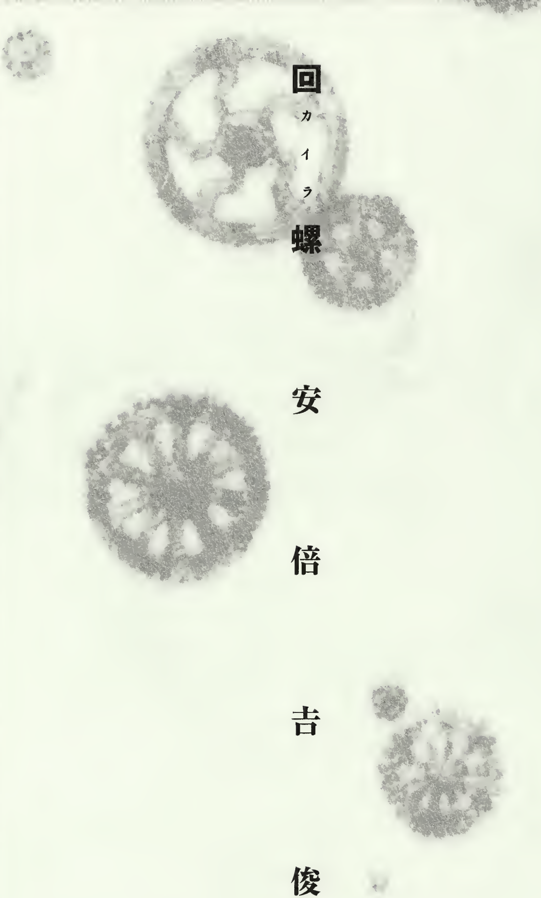
回螺

カイラ

安倍吉俊



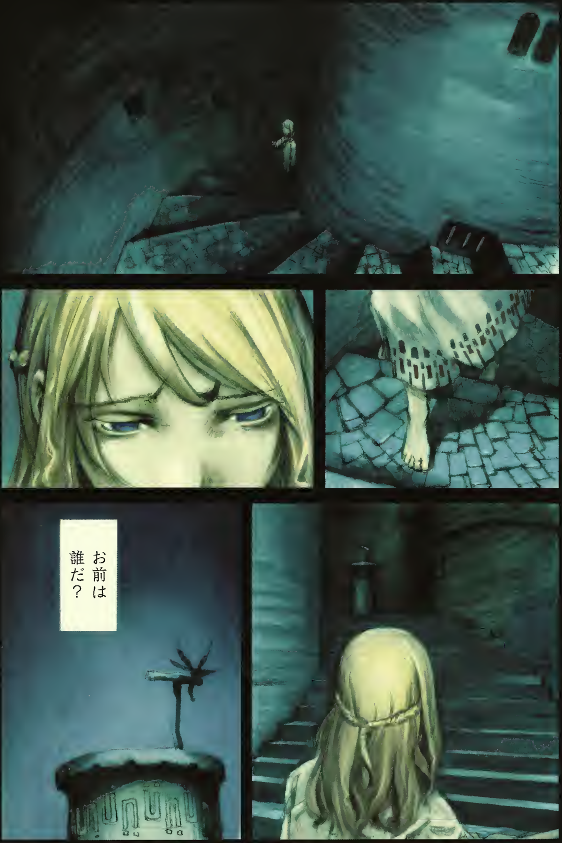
回螺（カイラ）

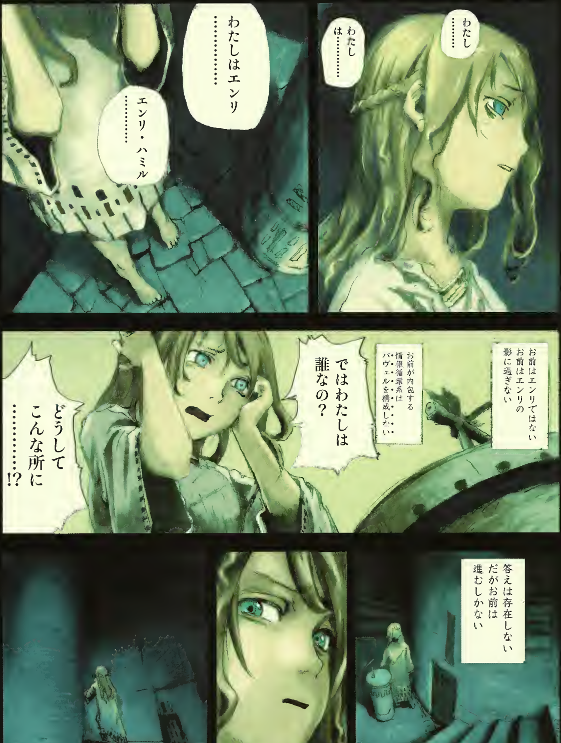
安倍吉俊

回螺

救いはない。

これから向う世界のどこにも
救いと呼べるものは何ひとつ、ない。


お前は誰だ？


……わたし
わたしは…………
わたしは……………エンリ
エンリ・ハミル………
お前はエンリではない お前はエンリの影に過ぎない
お前が内包する情報循環系はバヴェルを構成しない
ではわたしは誰なの？
どうしてこんな所に…………!?
答えは存在しない だがお前は進むしかない

目次

古街及びその周辺領域

古街

9頁……20頁

樹葬

第1話　21頁……32頁
第2話　33頁……40頁
第3話　41頁……48頁

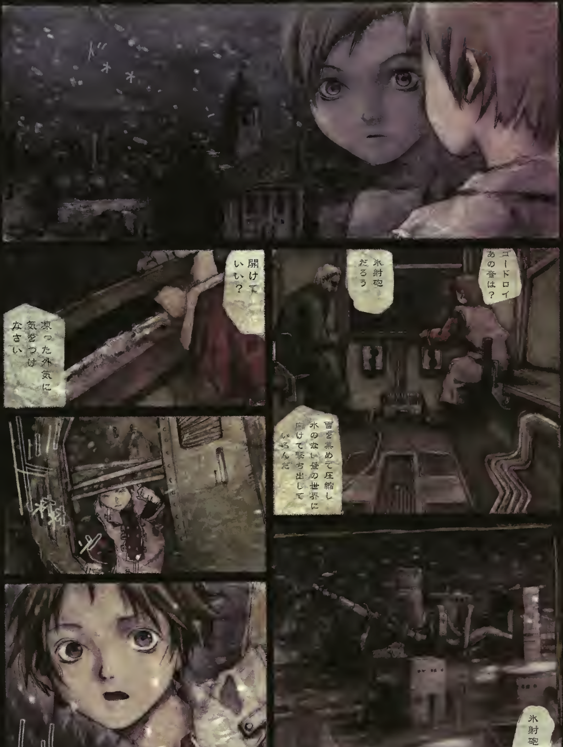
廃域

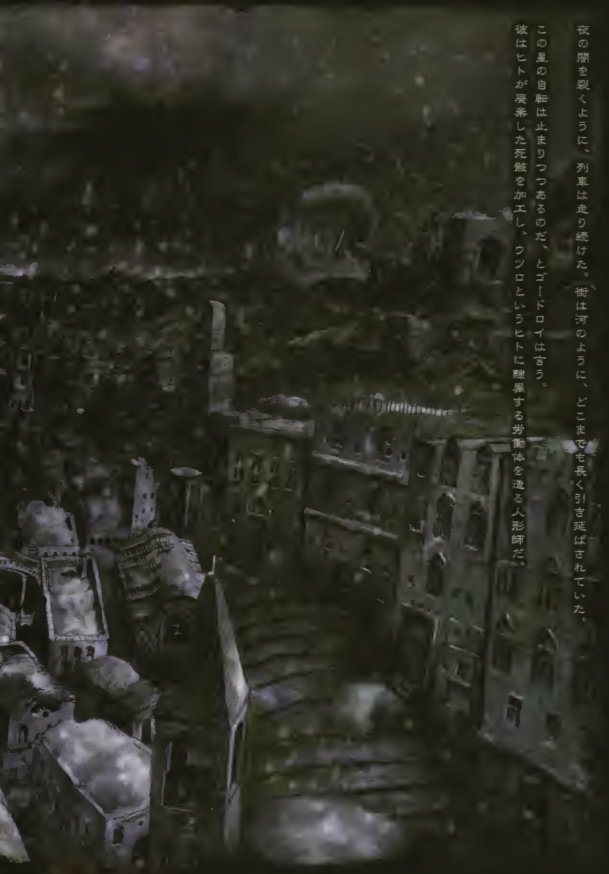
第1話　49頁……60頁
第2話　61頁……78頁
第3話　79頁……90頁
第4話　91頁……108頁
第5話　109頁……120頁
第6話　121頁……136頁
第7話　137頁……152頁
第8話　153頁……168頁
第9話　169頁……184頁

白雨

185頁……226頁

古街（フルマチ）

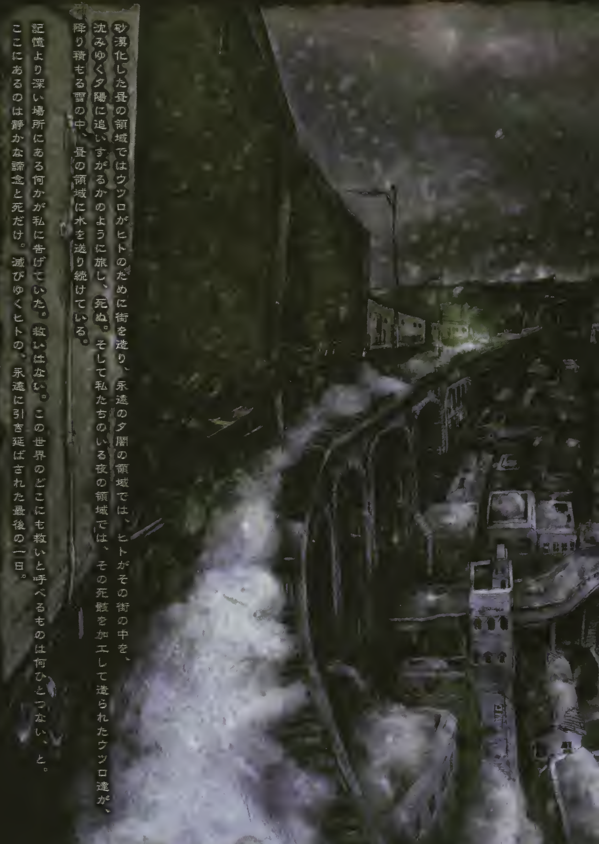

ドオオ
ゴードロイ あの音は？
氷射砲 だろう
開けて いい？
凍った外気に 気をつけ なさい
雪を集めて圧縮し 水のない昼の世界に 向けて撃ち出して いるんだ
氷射砲・・・



夜の闇を裂くように、列車は走り続けた。街は河のように、どこまでも長く引き延ばされていた。

この星の自転は止まりつつあるのだ、とゴードロイは言う。

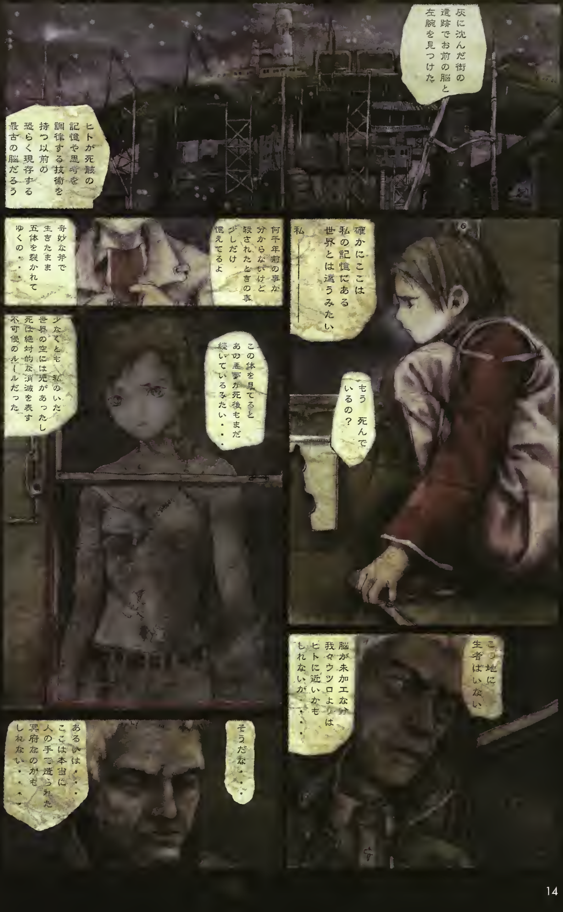
彼はヒトが廃棄した死骸を加工し、ウツロというヒトに隷属する労働体を造る人形師だ。

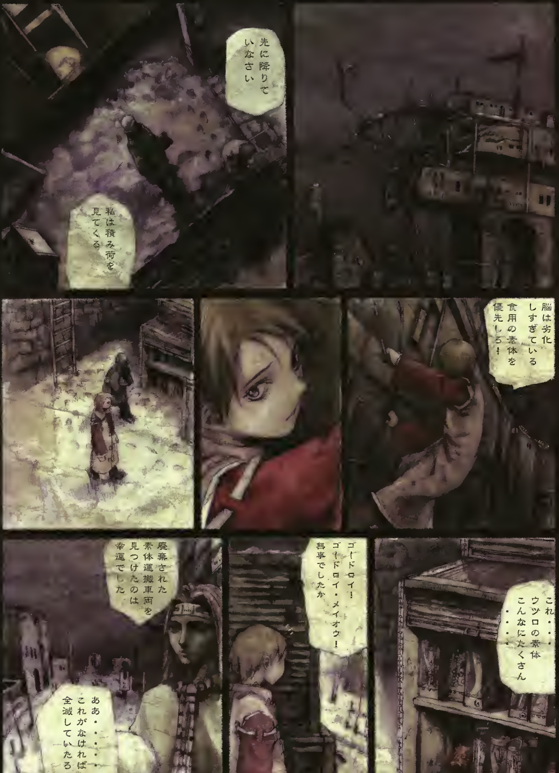


砂漠化した昼の領域ではウツロがヒトのために街を造り、永遠の夕闇の領域では、ヒトがその街の中を、沈みゆく夕陽に追いすがるかのように旅し、死ぬ。そして私たちのいる夜の領域では、その死骸を加工して造られたウツロ達が、降り積もる雪の中、昼の領域に水を送り続けている。

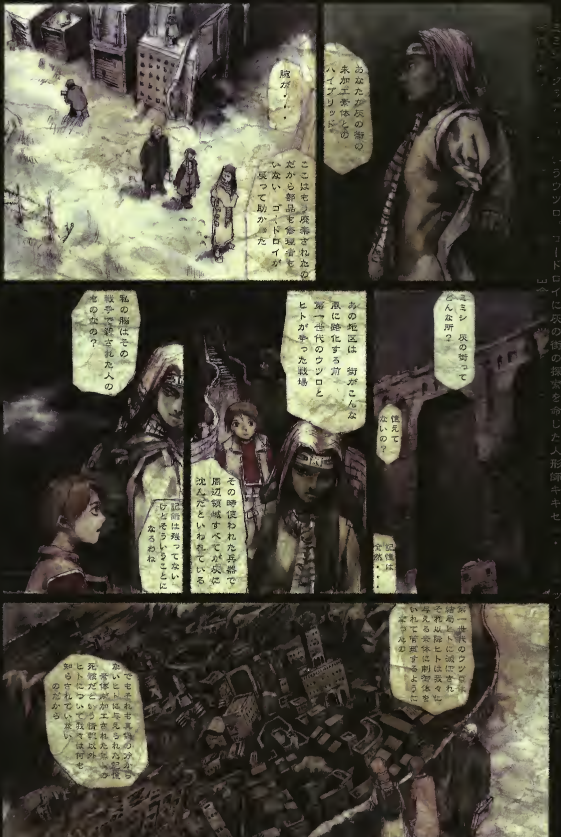
記憶より深い場所にある何かが私に告げていた。救いはない。この世界のどこにも救いと呼べるものは何ひとつない、と。ここにあるのは静かな諦念と死だけ。滅びゆくヒトの、永遠に引き延ばされた最後の一日。

この列車の中で私の脳が起動してから２００時間が経過していた。記憶が回復することはなく、夜が終わることもなかった。

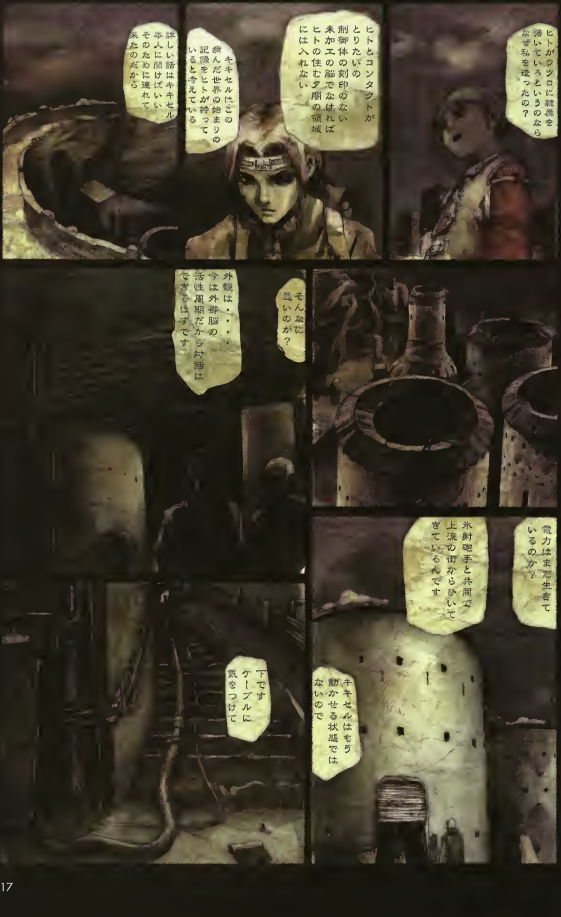

灰に沈んだ街の遺跡でお前の脳と左腕を見つけた
ヒトが死骸の記憶や思考を調律する技術を持つ以前の恐らく現存する最古の脳だろう
確かにここは私の記憶にある世界とは違うみたい
私――――
もう 死んでいるの？
何千年前の事か分からないけど殺されたときの事少しだけ憶えてるよ
奇妙な斧で生きたまま五体を裂かれてゆくの・・・
この体を見てるとあの悪夢が死後もまだ続いているみたい・・・
少なくとも私のいた世界の空には光があったし死は絶対的な消滅を表す不可侵のルールだった
この地に生者はいない
脳が未加工な分我々ウツロよりはヒトに近いかもしれないが・・・
そうだな・・・
あるいは・・・ここは本当に人の手で造られた冥府なのかもしれない・・・

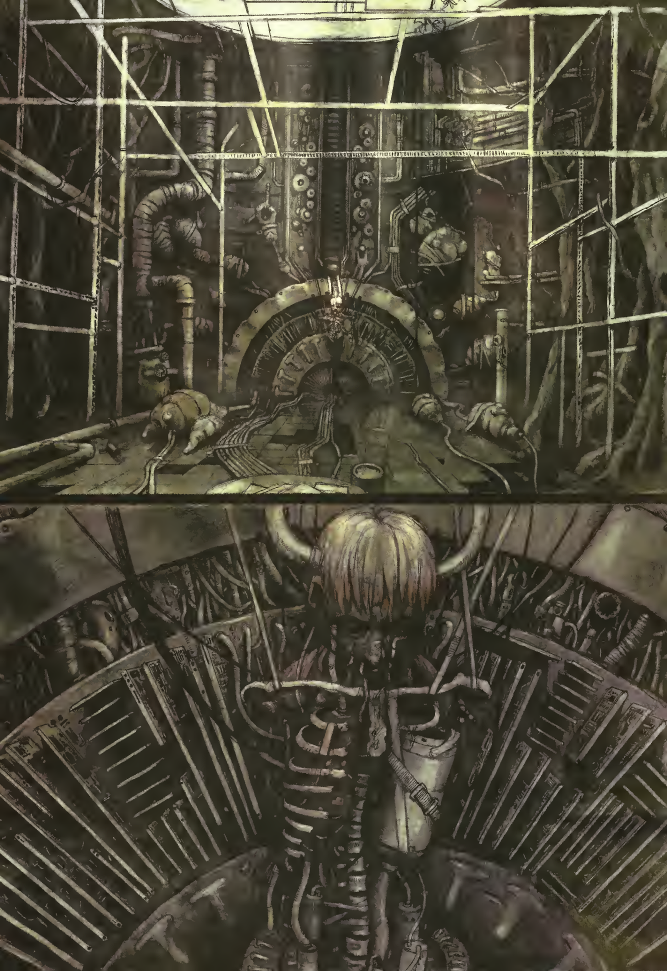

先に降りていなさい
私は積み荷を見てくる
脳は劣化しすぎている
食用の素体を優先しろ！
これ・・・ウツロの素体
こんなにたくさん・・・
ゴードロイ！
ゴードロイ・メイオウ！
無事でしたか
廃棄された素体運搬車両を見つけたのは幸運でした
ああ・・・これがなければ全滅していたろう

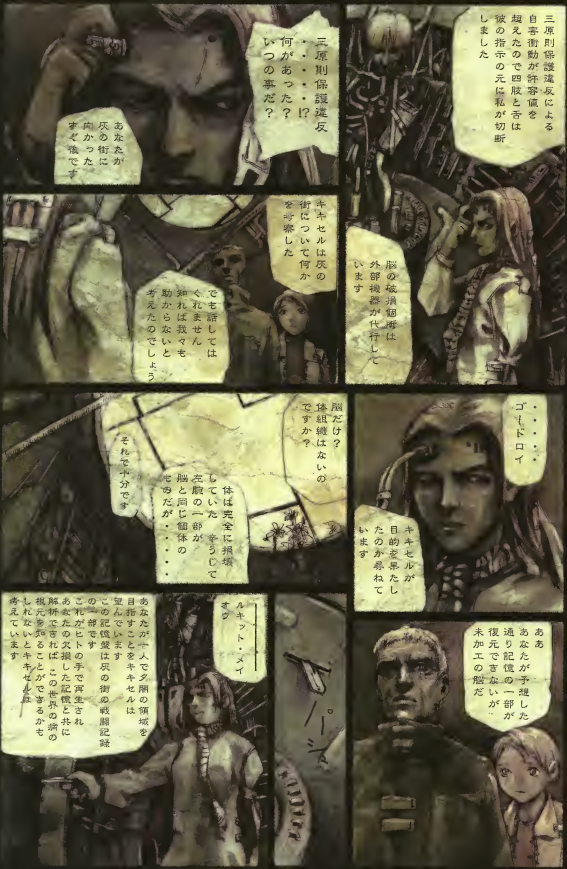
[illegible]、ウツロボディを食用加工して喰った。それが[illegible]与えられた、この世界にある唯一の食料だった。

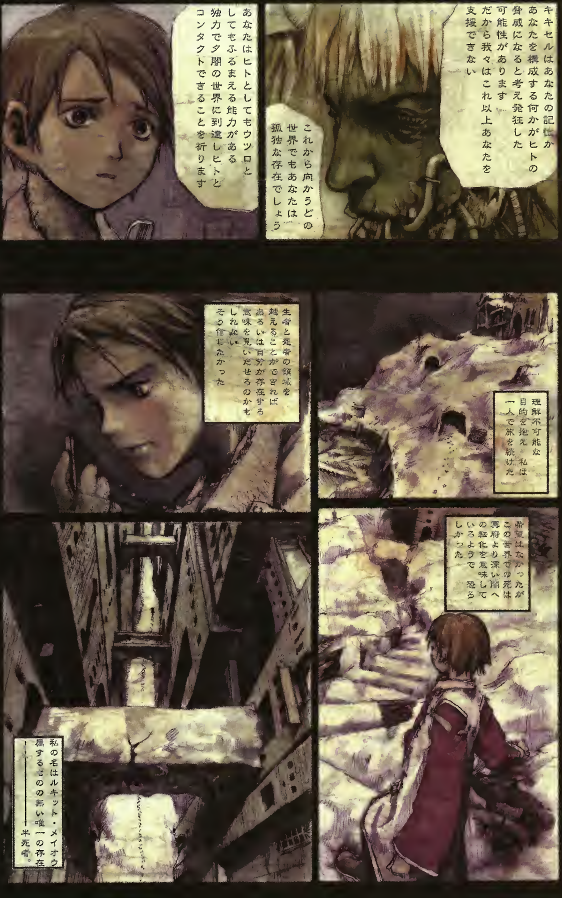

あなたが灰の街の未加工素体とのハイブリッド
腕が・・・
ここはもう廃棄されたのだから部品も修理者もいない コードロイが戻って助かった
ミミシ 灰の街ってどんな所？
憶えてないの？
記憶は全然・・・
あの地区は 街がこんな風に路化する前 第一世代のウツロとヒトが争った戦場
その時使われた兵器で周辺領域すべてが灰に沈んだといわれている
私の脳はその戦争で殺された人のものなの？
記録は残ってないけどそういうことになるわね
第一世代のウツロは結局ヒトに滅ぼされそれ以降ヒトは我々に与える素体に制御体をいれて管理するようになったの
でもそれも真偽の分からないヒトに与えられた記憶 素体が加工された人の死骸だという情報以外ヒトについて我々は何も知らされていないのだから

ミミシ・クラフト・[illegible]というウツロ。コードロイに灰の街の探索を命じた人形師キキセ・[illegible]ツ[illegible]


ヒトがウツロに隷属を強いているというのならなぜ私を造ったの？
ヒトとコンタクトがとりたいの制御体の刻印のない未加工の脳でなければヒトの住む夕闇の領域には入れない
キキセルはこの病んだ世界の始まりの記録をヒトが持っていると考えている
詳しい話はキキセル本人に聞けばいいそのために連れて来たのだから
そんなに悪いのか？
外観は・・・今は外部脳の活性周期だから対話はできるはずです
電力はまだ生きているのか？
氷射砲手と共同で上流の街からひいてきているんです
キキセルはもう動かせる状態ではないので
下ですケーブルに気をつけて



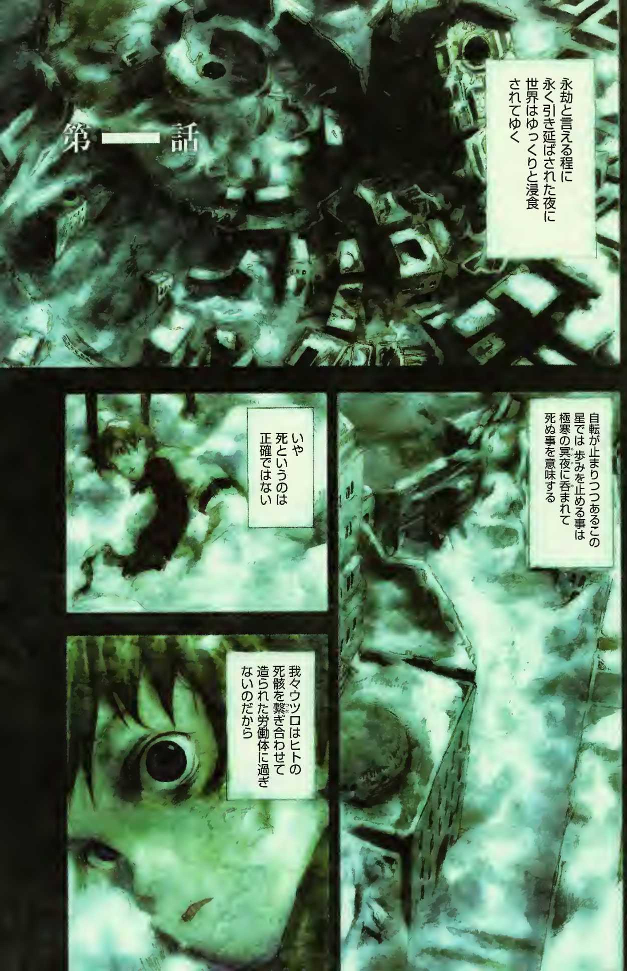

三原則保護違反による自害衝動が許容値を超えたので四肢と舌は彼の指示の元に私が切断しました
脳の破損個所は外部機器が代行しています
三原則保護違反・・・・!?
何があった？いつの事だ？
あなたが灰の街に向かったすぐ後です
キキセルは灰の街について何かを考察した
でも話してはくれません 知れば我々も助からないと考えたのでしょう
・・・・ゴードロイ
キキセルが目的を果たしたのか尋ねています
脳だけ？体組織はないのですか？
体は完全に損壊していた 辛うじて左腕の一部が脳と同じ個体のものだが・・・・・
それで十分です
ああ あなたが予想した通り記憶の一部が復元できないが未加工の脳だ
ルキット・メイオウ
パシュ
あなたが一人で夕闇の領域を目指すことをキキセルは望んでいます この記憶盤は灰の街の戦闘記録の一部です これがヒトの手で再生されあなたの欠損した記憶と共に解析できれば この世界の病の根元を知ることができるかもしれないとキキセルは考えています

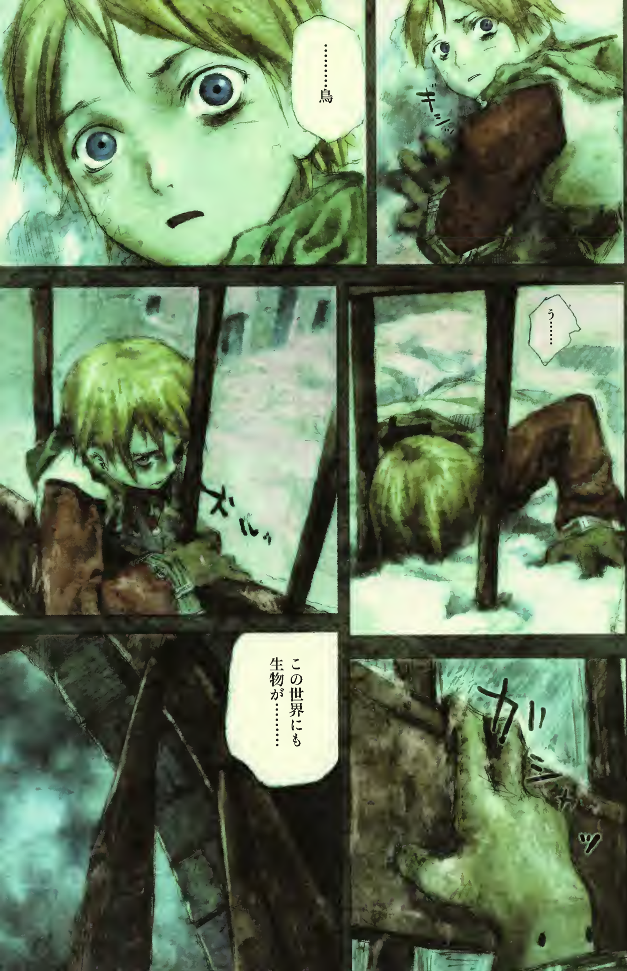

キセルはあなたの記憶かあなたを構成する何かがヒトの脅威になると考え発狂した可能性があります
だから我々はこれ以上あなたを支援できない
これから向かうどの世界でもあなたは孤独な存在でしょう
あなたはヒトとしてもウツロとしてもふるまえる能力がある
独力で夕闇の世界に到達しヒトとコンタクトできることを祈ります
理解不可能な目的を抱え　私は一人で旅を続けた
生者と死者の領域を越えることができればあるいは自分が存在する意味を見いだせるのかもしれない
そう信じたかった
希望はなかったがこの世界での死は冥府より深い闇への転化を意味しているようで恐ろしかった
私の名はルキット・メイオウ
属するものの無い唯一の存在
――――半死者。

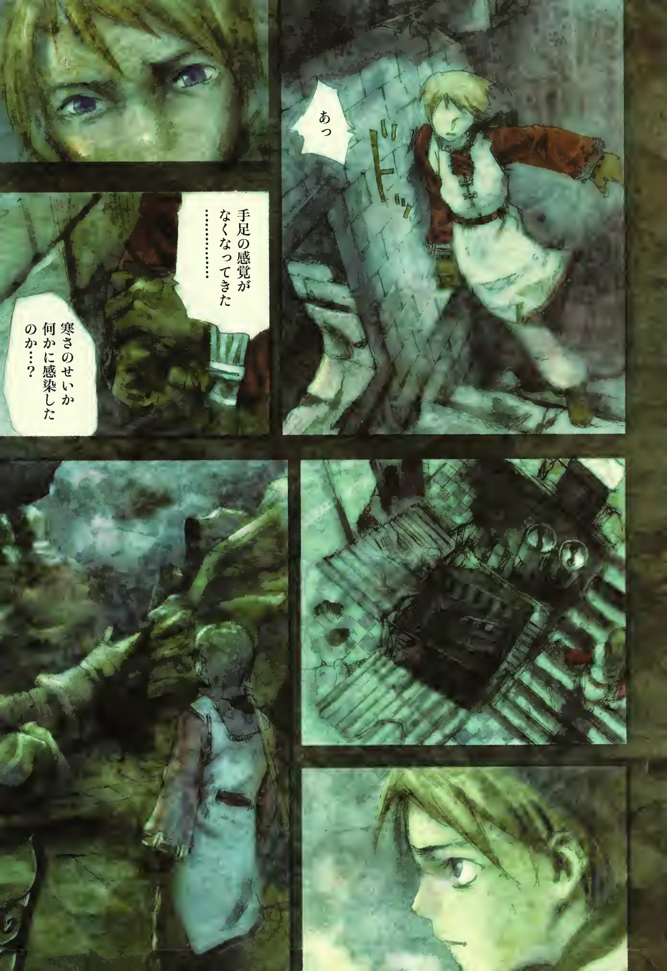
古街 おわり

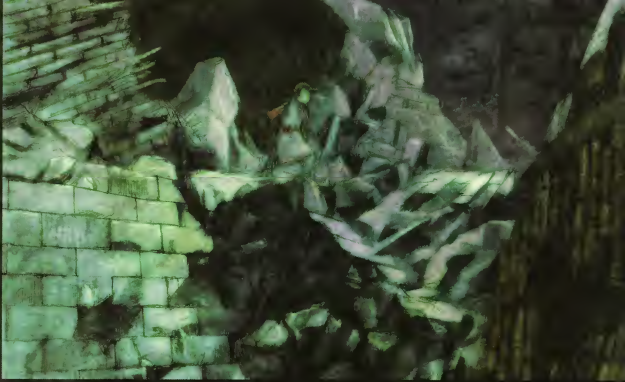
樹葬

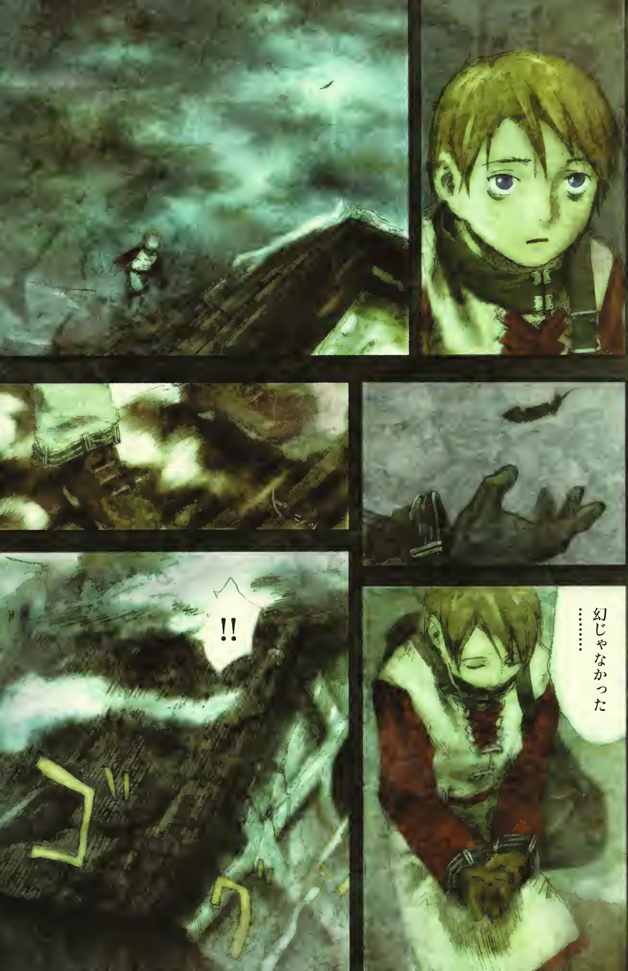
ジュソウ

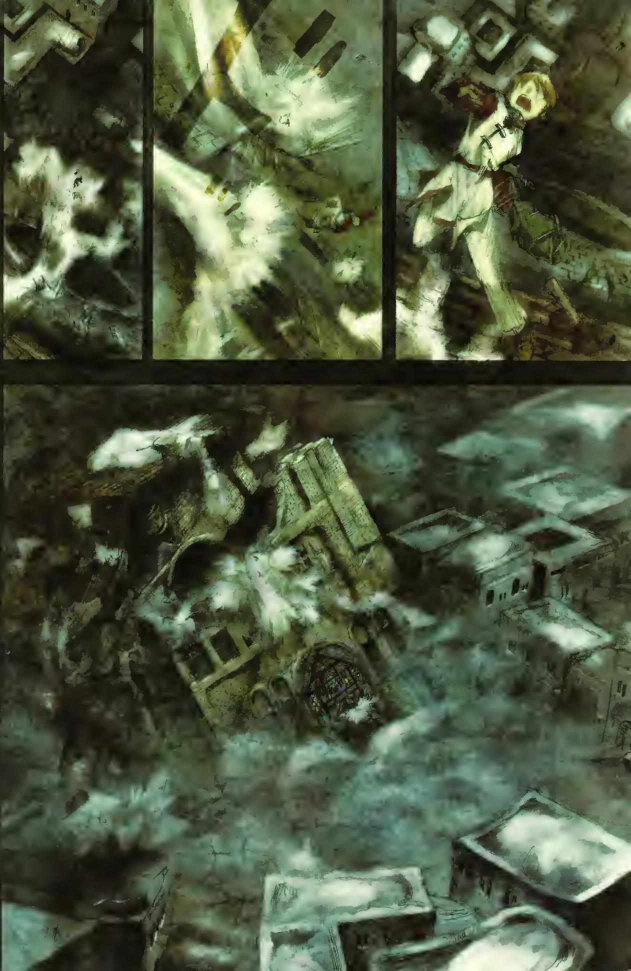

第一話
永劫と言える程に永く引き延ばされた夜に世界はゆっくりと浸食されてゆく
自転が止まりつつあるこの星では 歩みを止める事は極寒の冥夜に呑まれて死ぬ事を意味する
いや 死というのは正確ではない
我々ウツロはヒトの死骸を繋ぎ合わせて造られた労働体に過ぎないのだから

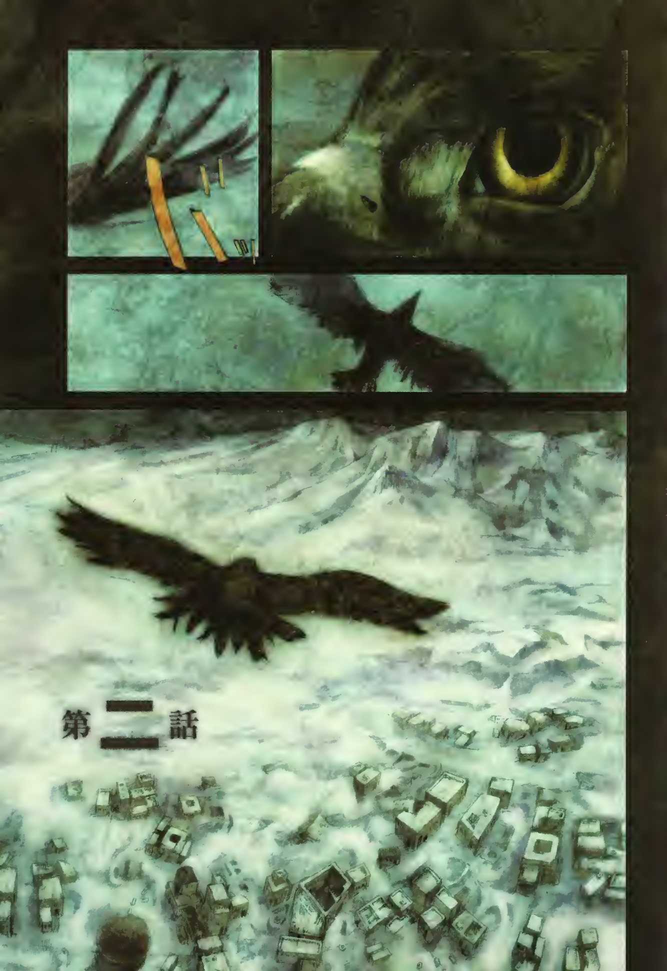

ギシッ
……鳥
う……
ズルッ
ガリミシッ
この世界にも
生物が………


あっ
ドッ
手足の感覚がなくなってきた……………
寒さのせいか何かに感染したのか…？

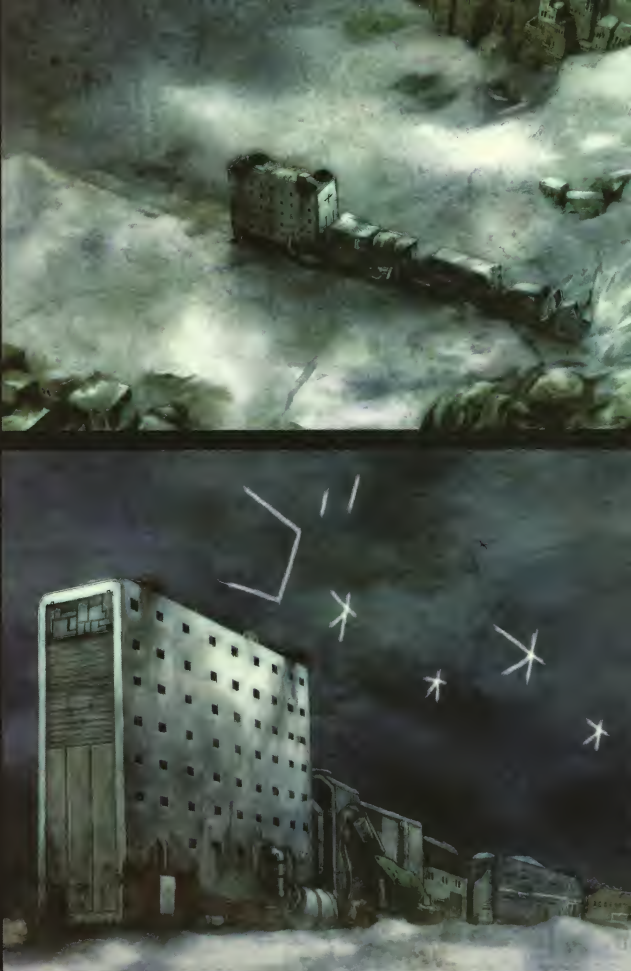


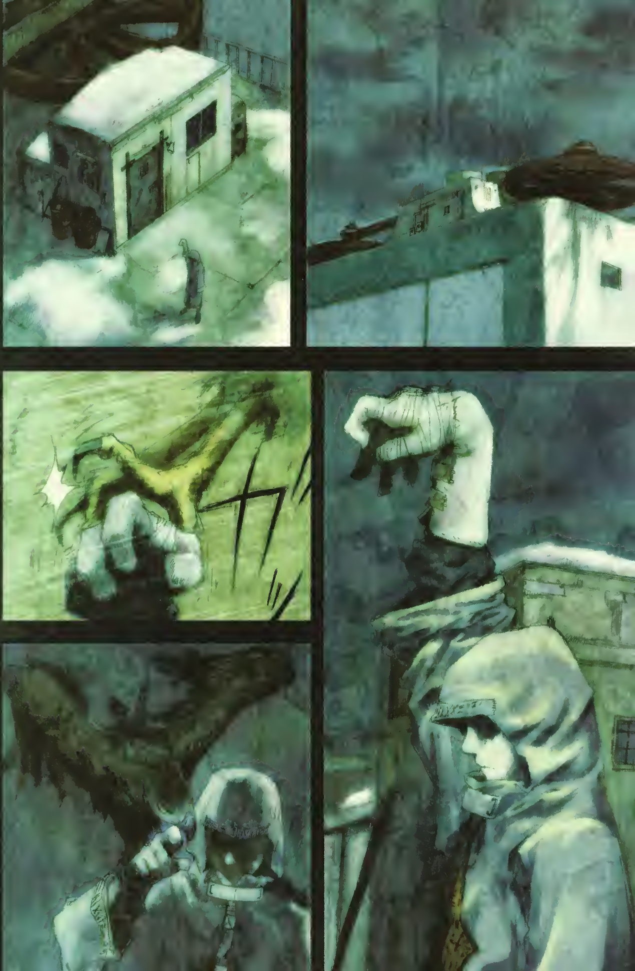

幻じゃなかった………
!!
ゴ
ゴ

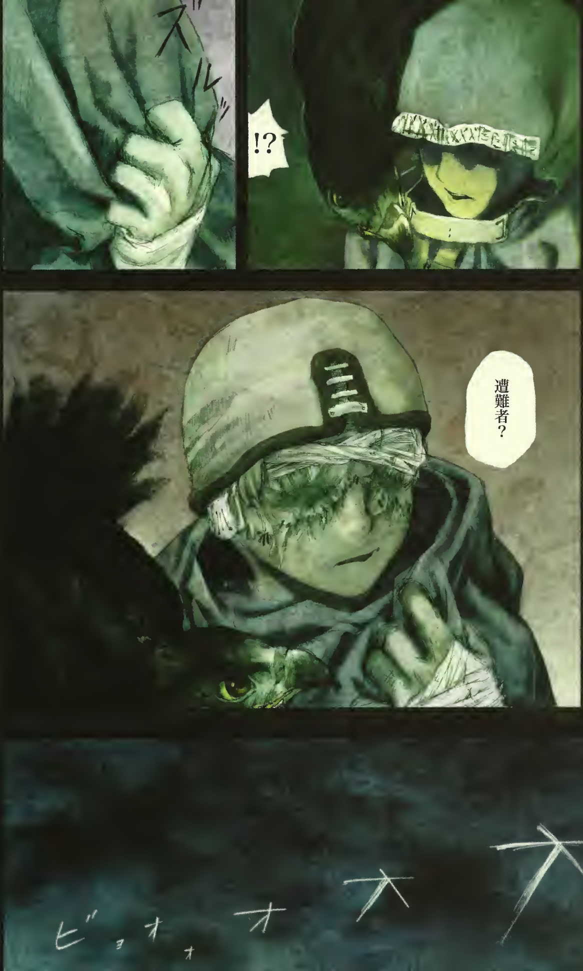


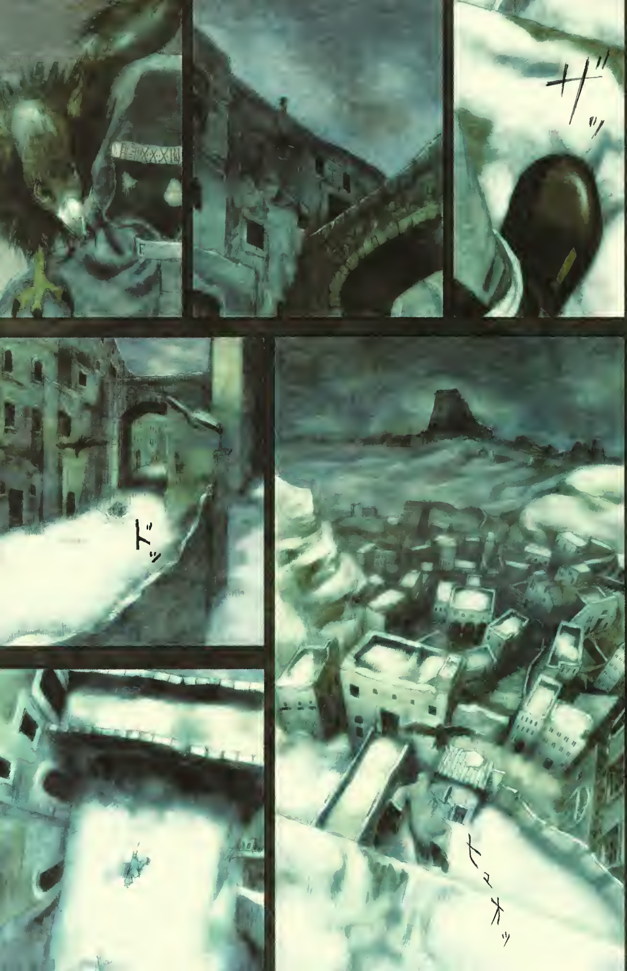


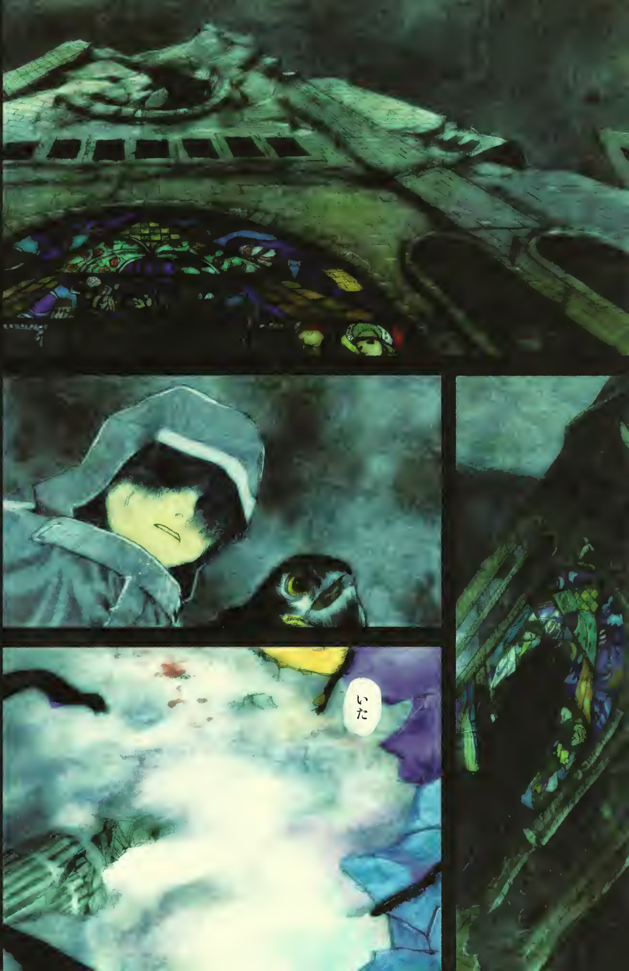
第二話

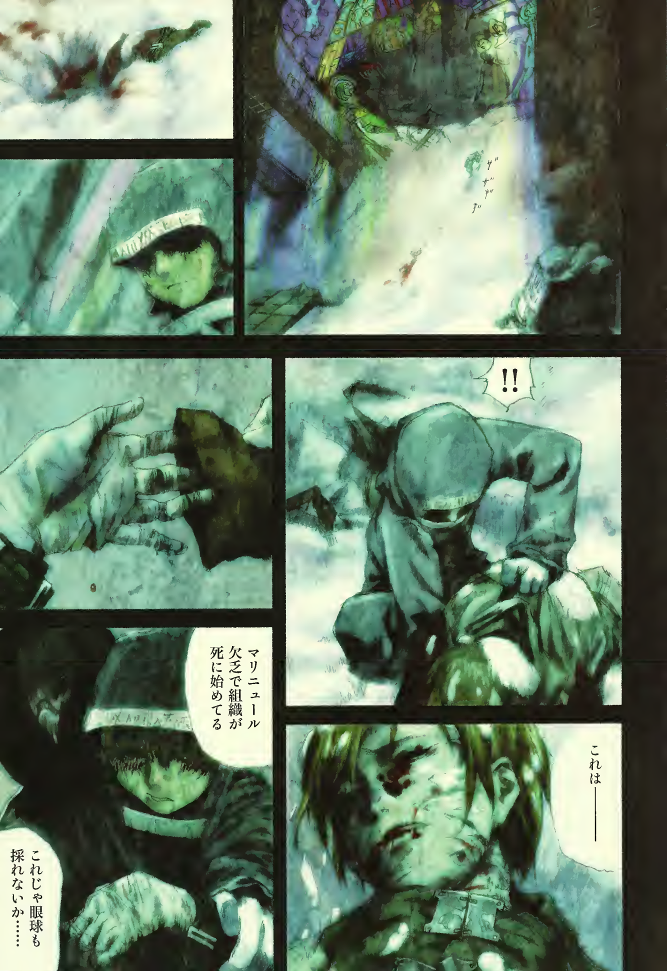

ゴ

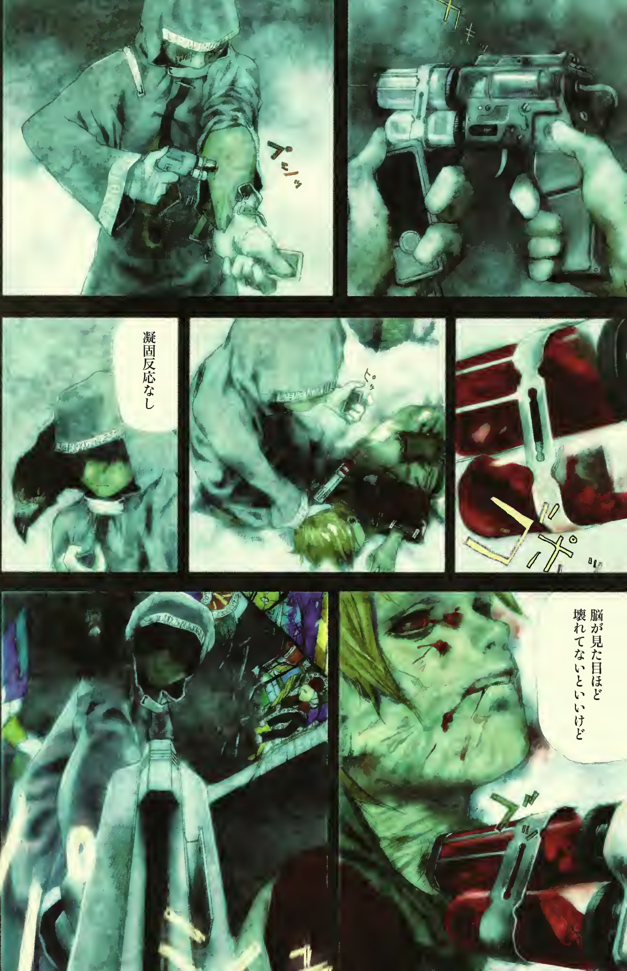



!?
ズルッ
遭難者？
ビョオォオオオ

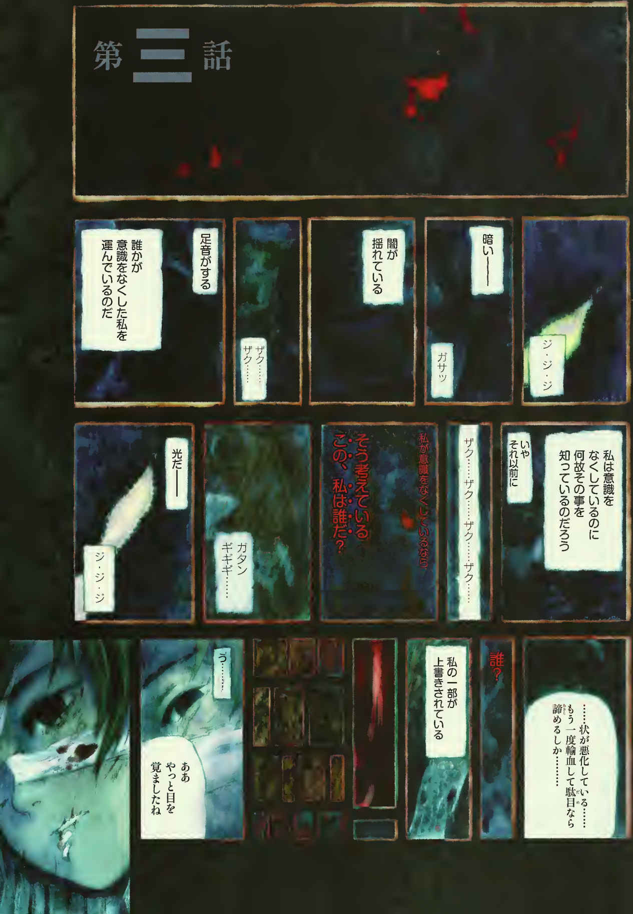

ザッ
ヒュオッ
ドッ

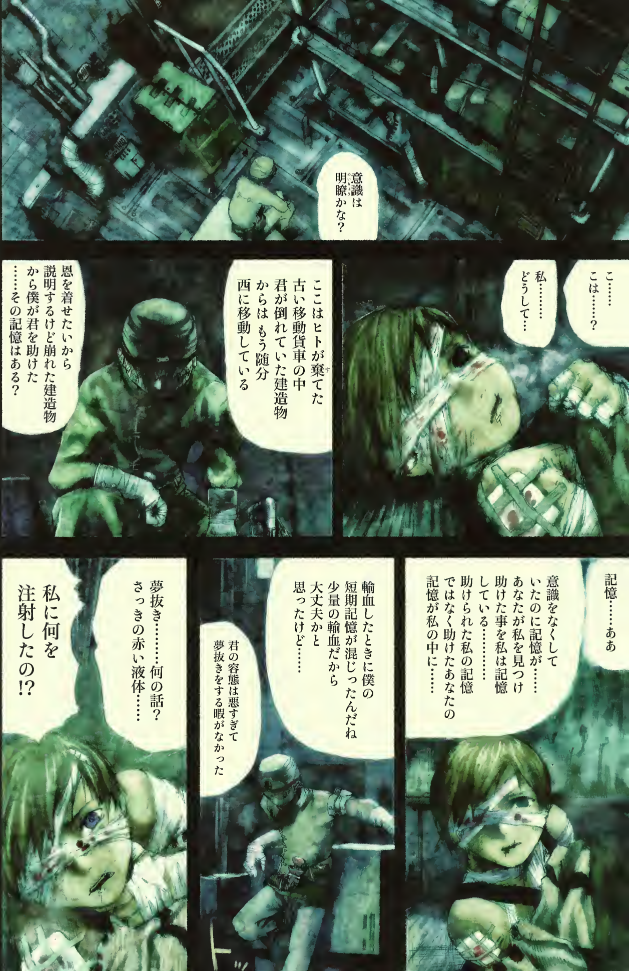

いた

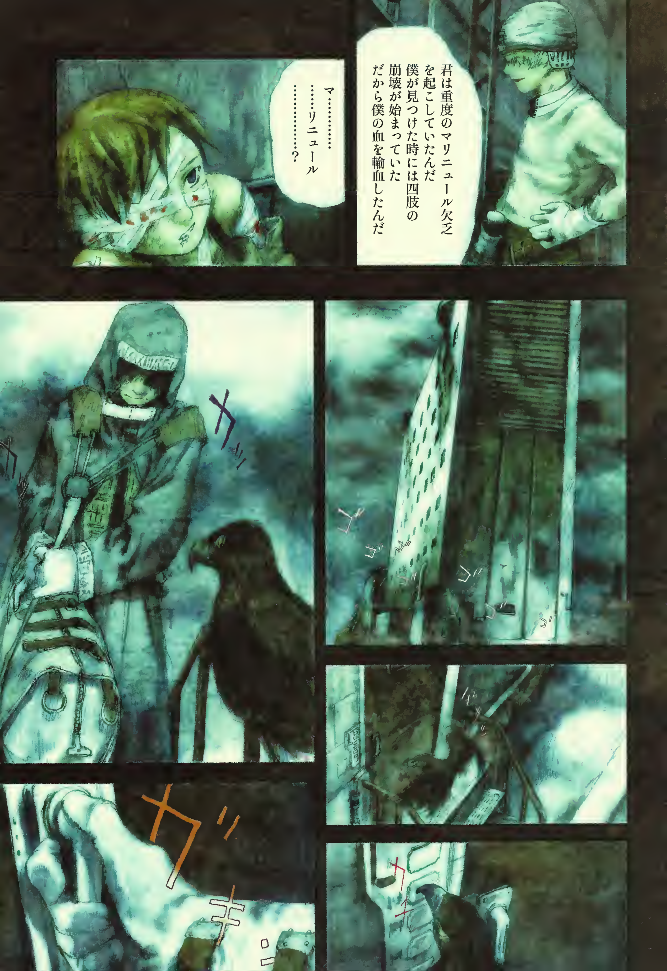

ザ
ザ
ザ
!!
これは――
マリニュール欠乏で組織が死に始めてる
これじゃ眼球も採れないか……

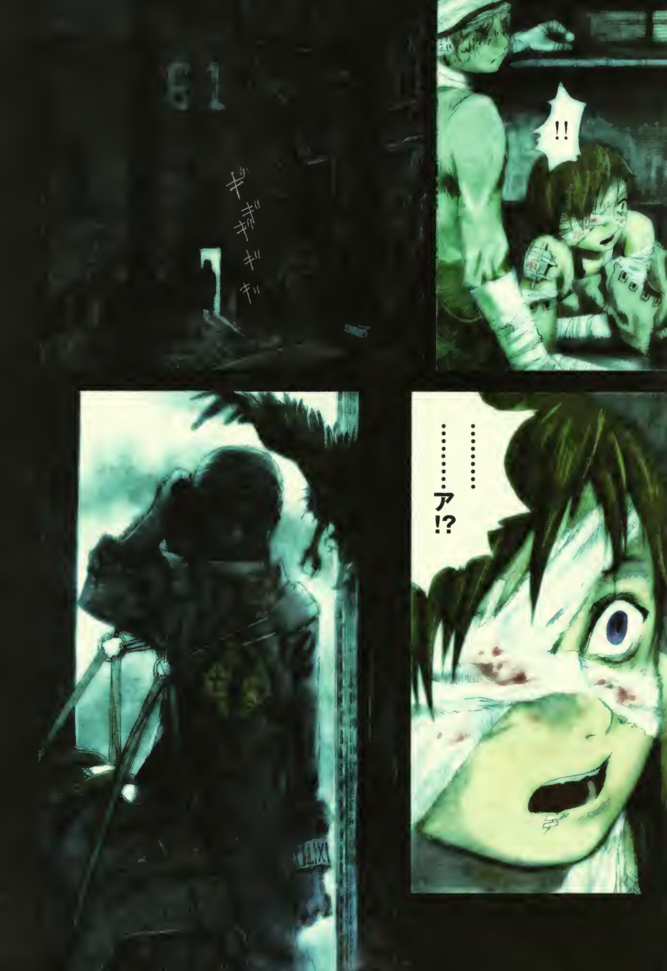

ガキッ
プシッ
ゴポッ
ピッ
凝固反応なし
脳が見た目ほど
壊れてないといいけど
ブヅッ

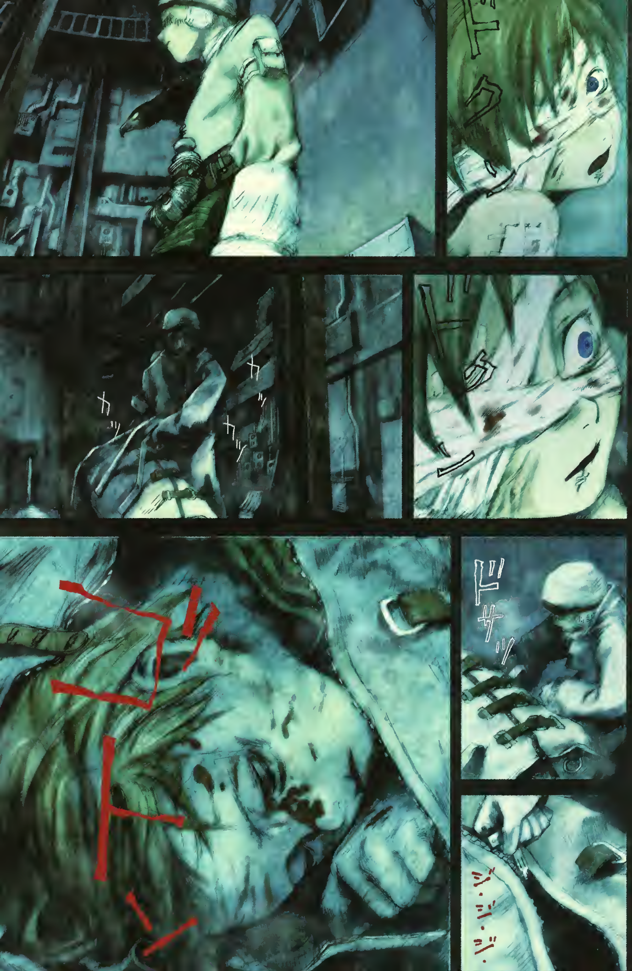
第三話

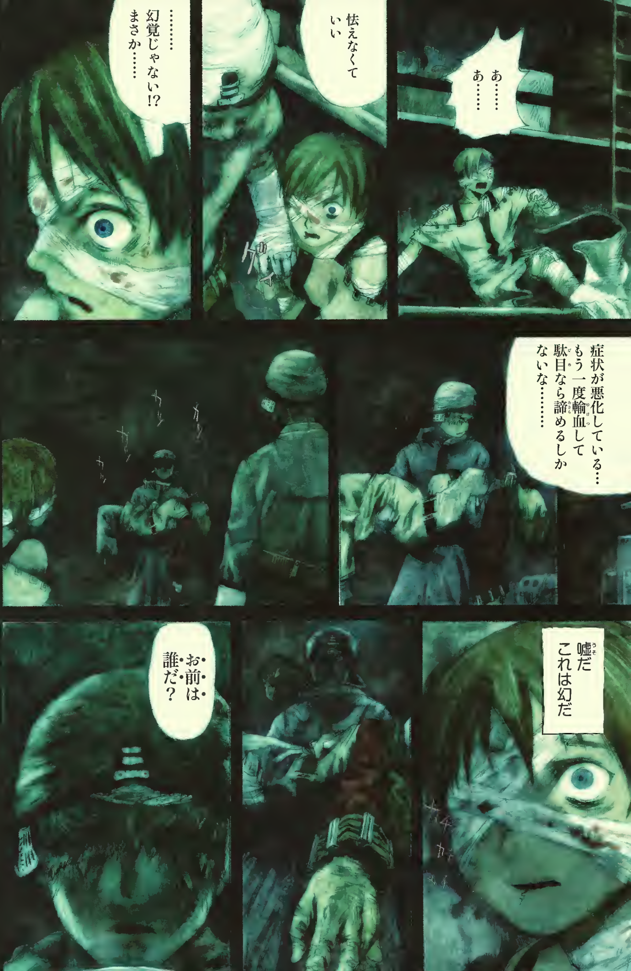

ジ・ジ・ジ
暗い――
ガサッ
闇が揺れている
ザク……ザク……
足音がする
誰かが意識をなくした私を運んでいるのだ
私は意識をなくしているのに何故その事を知っているのだろう
いやそれ以前に
ザク……ザク……ザク……ザク……
私が意識をなくしているなら
そう考えている この、私は誰だ？
ガタン ギギギ……
光だ――
ジ・ジ・ジ
……状が悪化している……もう一度輸血して駄目（だめ）なら諦（あきら）めるしか………
誰？
私の一部が上書きされている
う……
ああやっと目を覚ましたね

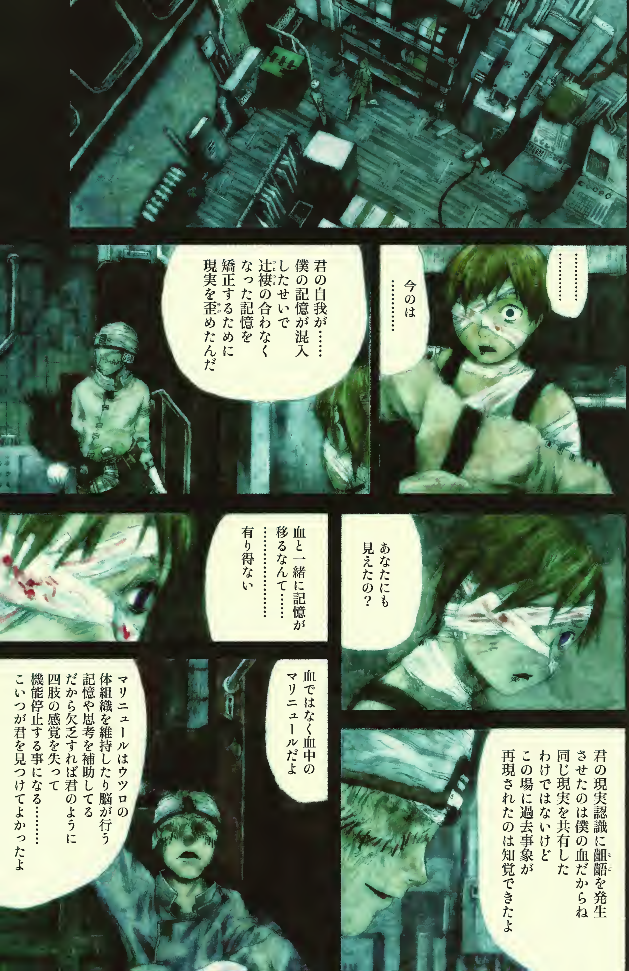

意識は明瞭かな？
こ……
こは……？
私……どうして…
ここはヒトが棄てた古い移動貨車の中 君が倒れていた建造物からは もう随分西に移動している
恩を着せたいから説明するけど崩れた建造物から僕が君を助けた……その記憶はある？
記憶……ああ
意識をなくしていたのに記憶が…… あなたが私を見つけ助けた事を私は記憶している…… 助けられた私の記憶ではなく助けたあなたの記憶が私の中に……
輸血したときに僕の短期記憶が混じったんだね 少量の輸血だから大丈夫かと思ったけど……
君の容態は悪すぎて夢抜きをする暇がなかった
トッ
夢抜き……何の話？ さっきの赤い液体……
私に何を注射したの!?

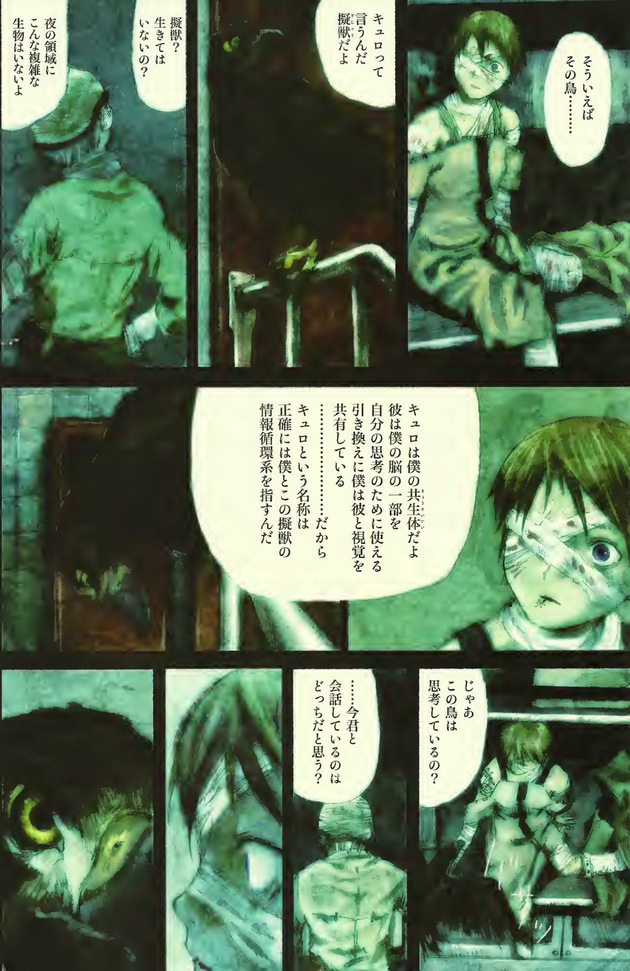

君は重度のマリニュール欠乏
を起こしていたんだ
僕が見つけた時には四肢の
崩壊が始まっていた
だから僕の血を輸血したんだ
マ……………
……リニュール
…………？
ガッ
ゴゴゴゴ
ガッ
カッ
カチ


!!
61
ギギギギギ
………
………ア!?


ドクン
ドクン
カッ
カッ
カッ
ドサッ
ゴトン
ジ・ジ・ジ・


あ……あ……
怯えなくていい
グイ
……幻覚じゃない!?まさか……
症状が悪化している…もう一度輸血して駄目なら諦めるしかないな……
カッ
カッ
カッ
カッ
嘘だ これは幻だ
お前は誰だ？


…………
今のは…………
君の自我が……僕の記憶が混入したせいで辻褄の合わなくなった記憶を矯正するために現実を歪めたんだ
あなたにも見えたの？
血と一緒に記憶が移るなんて…………有り得ない
君の現実認識に齟齬を発生させたのは僕の血だからね同じ現実を共有したわけではないけどこの場に過去事象が再現されたのは知覚できたよ
血ではなく血中のマリニュールだよ
マリニュールはウツロの体組織を維持したり脳が行う記憶や思考を補助してるだから欠乏すれば君のように四肢の感覚を失って機能停止する事になる………こいつが君を見つけてよかったよ


そういえば その鳥………
キュロって 言うんだ 擬獣だよ
擬獣？ 生きては いないの？
夜の領域に こんな複雑な 生物はいないよ
キュロは僕の共生体だよ 彼は僕の脳の一部を 自分の思考のために使える 引き換えに僕は彼と視覚を 共有している ……………だから キュロという名称は 正確には僕とこの擬獣の 情報循環系を指すんだ
じゃあ この鳥は 思考しているの？
……今君と 会話しているのは どっちだと思う？

樹葬 おわり

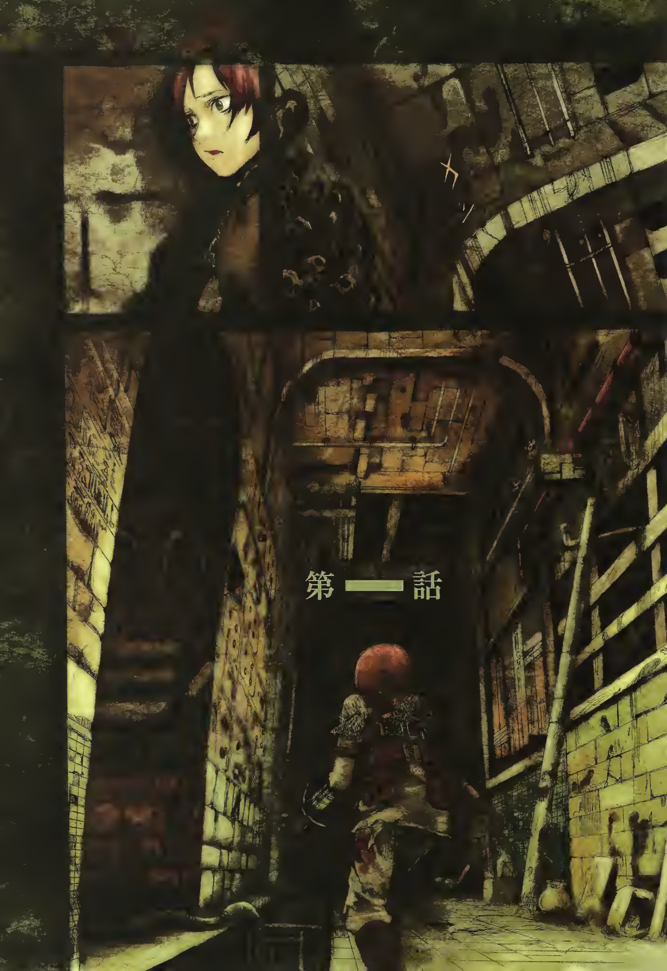
廃域（ハイイキ）

脳がおこなう情報の演繹が意識を発生させるのならば、同等の複雑さを持った人工の回路が意識を持たないとする根拠は何か。

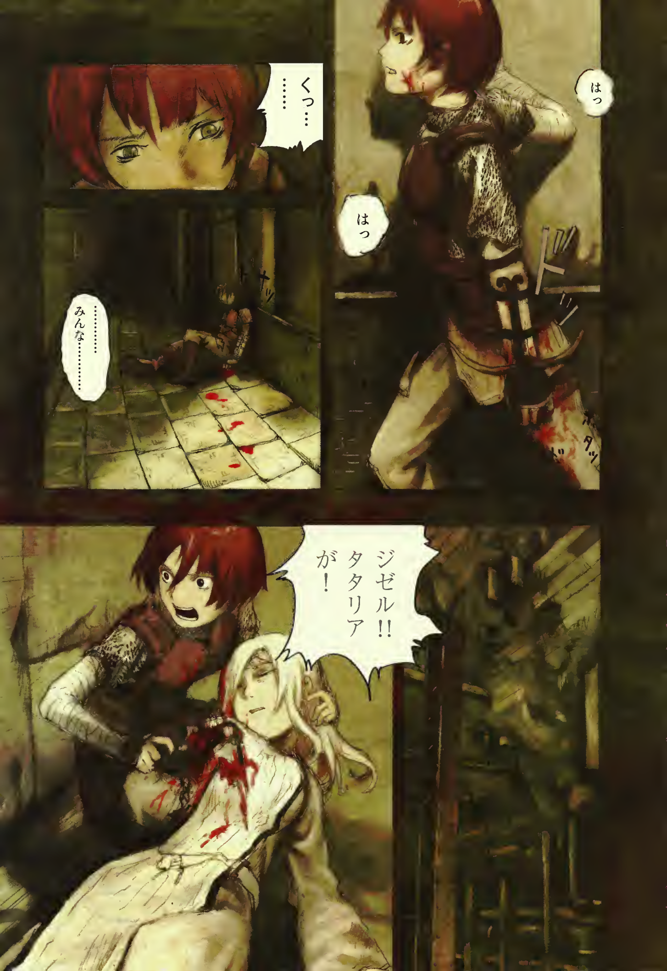
情報循環系の構造がある状態に達した時、そこには意識が発生していると仮定する。

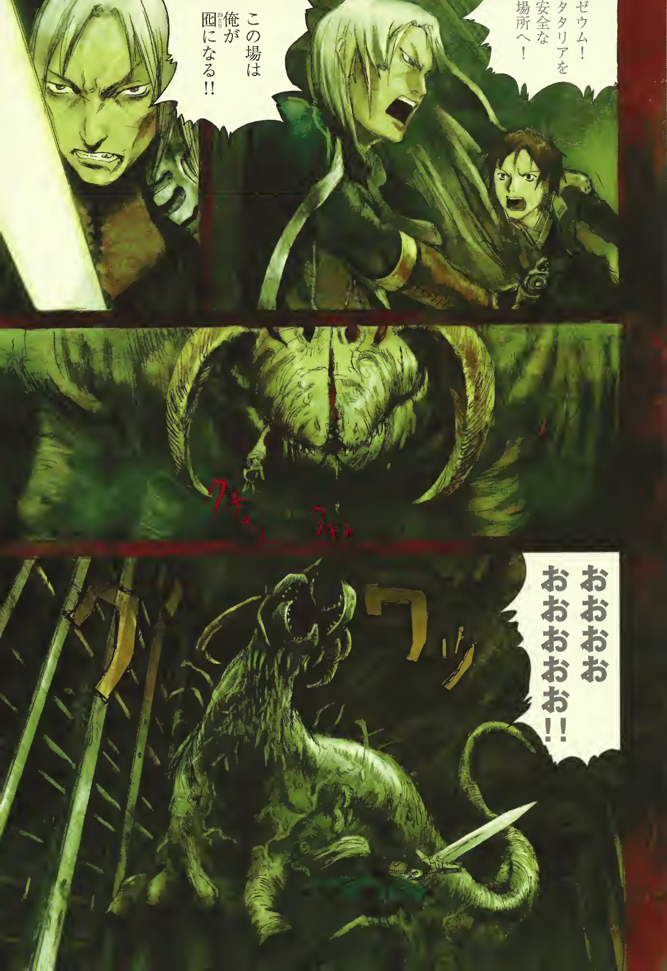
その状態をバヴェルと呼ぶ。

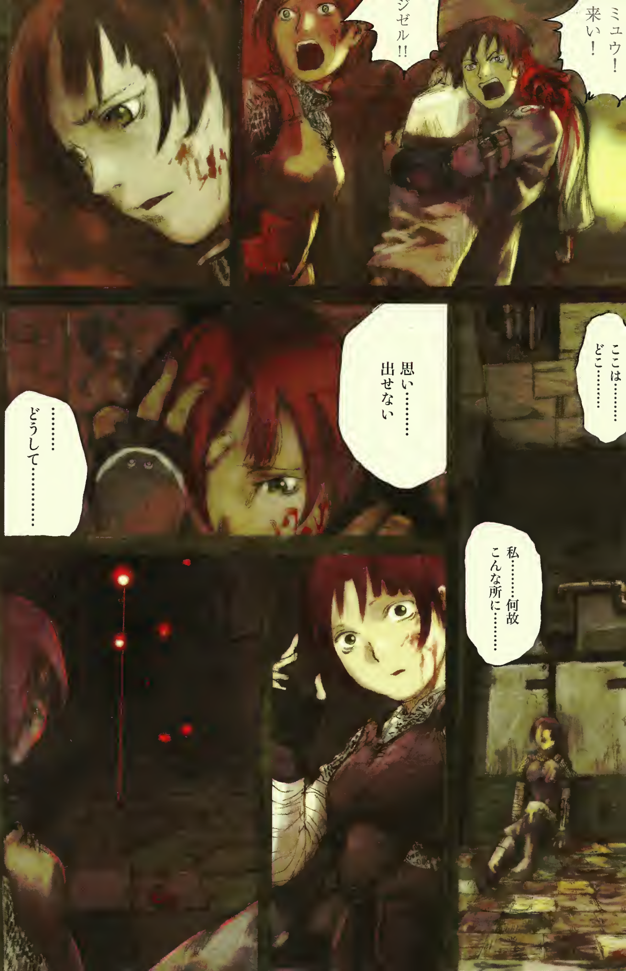
死亡したエンリ・ハミルの脳から再構成した意識の断片の複製体（328.329）を用いて、バヴェルを発生させ、バヴェルが意識を発生させうるかを試験する。

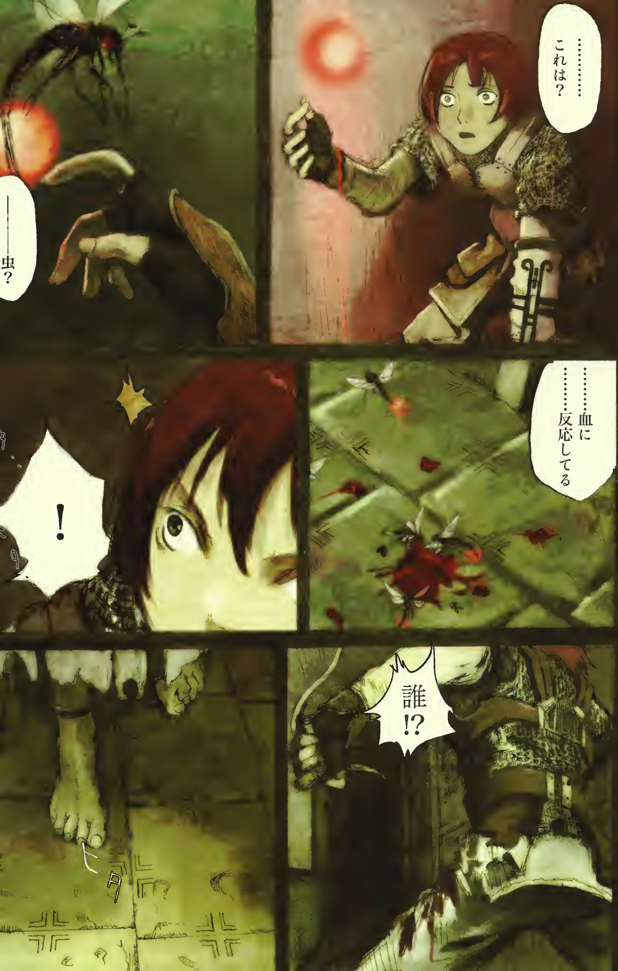


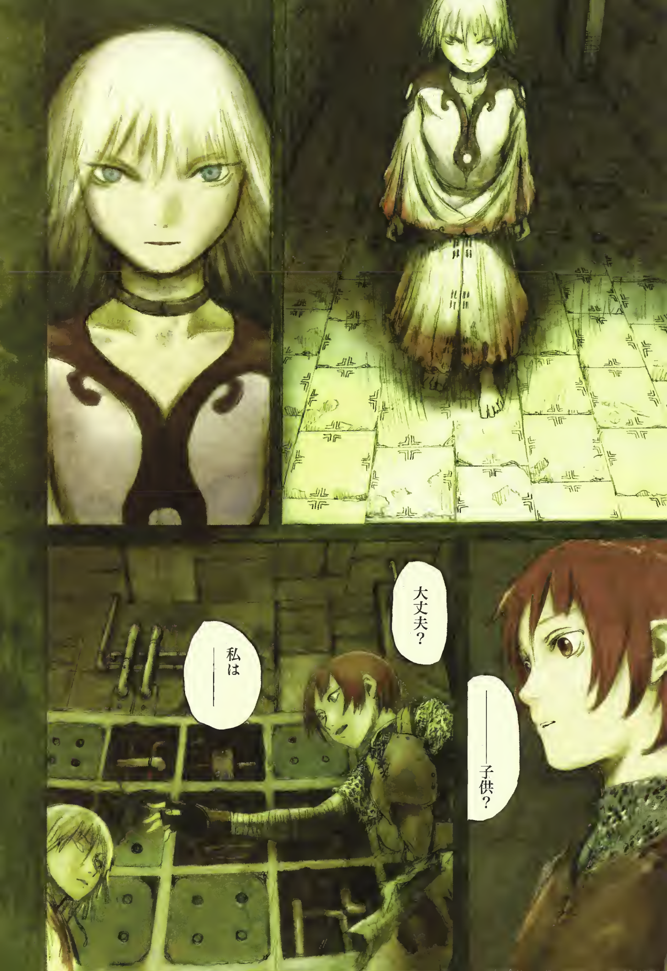
第一話

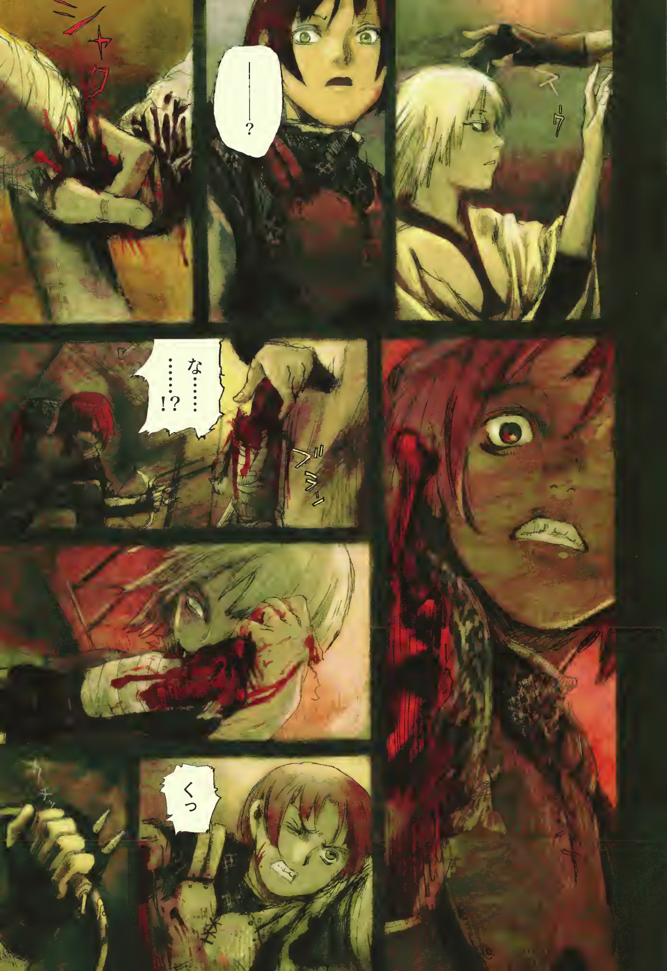

はっ
はっ
ドッ
ボタッ
ドッ
くっ……
……
トッ
………
みんな…………
ジゼル!!
タタリアが！

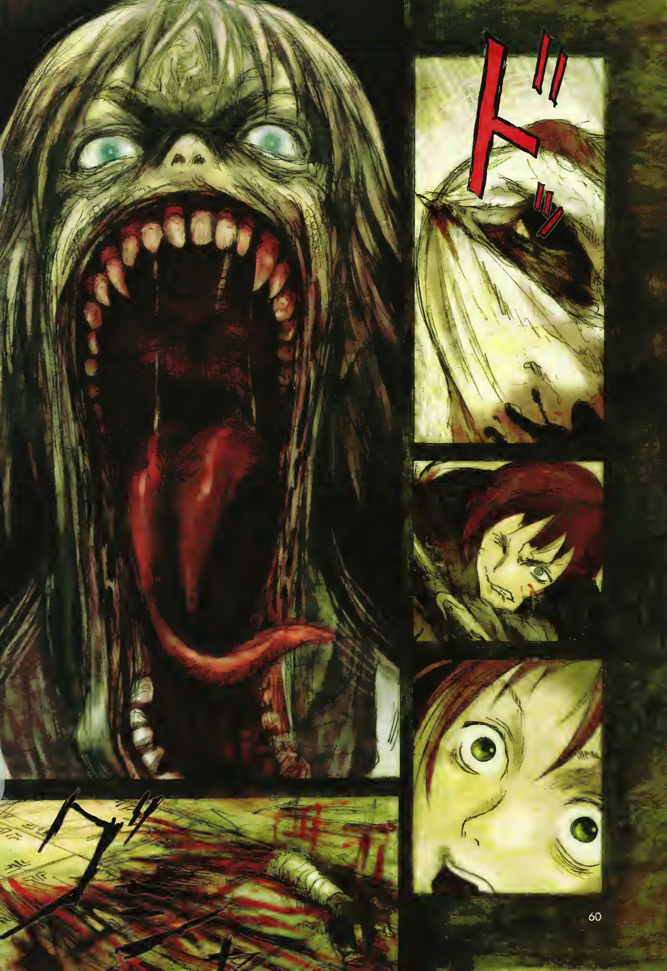

ゼウム！タタリアを安全な場所へ！
この場は俺が囮（おとり）になる!!
クチャッ
クチャ
おおおおおおおおお!!
ワッ

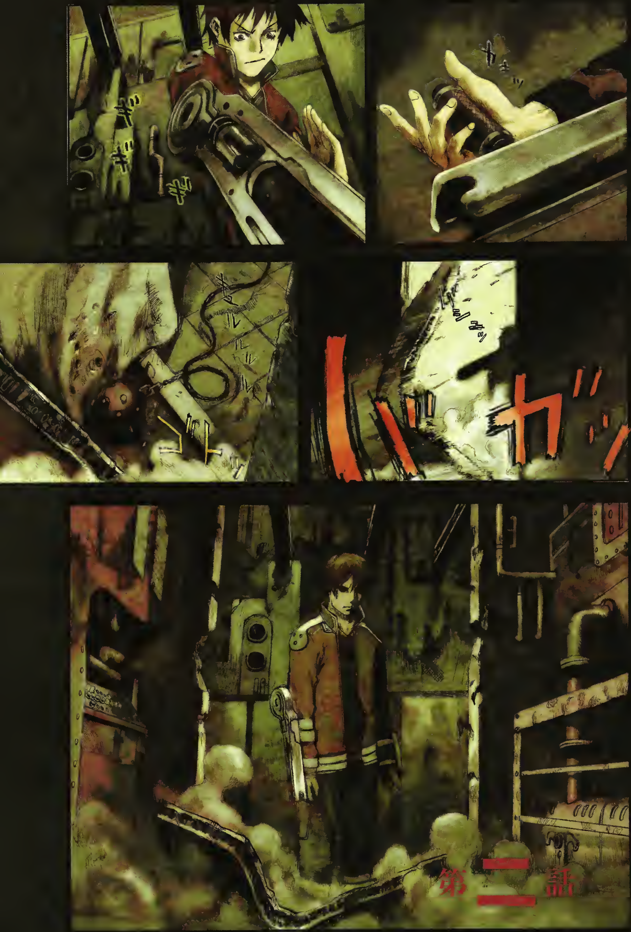

ミュウ！来い！
ジゼル!!
ここは……どこ……
思い……出せない
……どうして………
私……何故こんな所に……


…………これは？
――――虫？
……血に……反応してる
！
誰!?
ヒタ

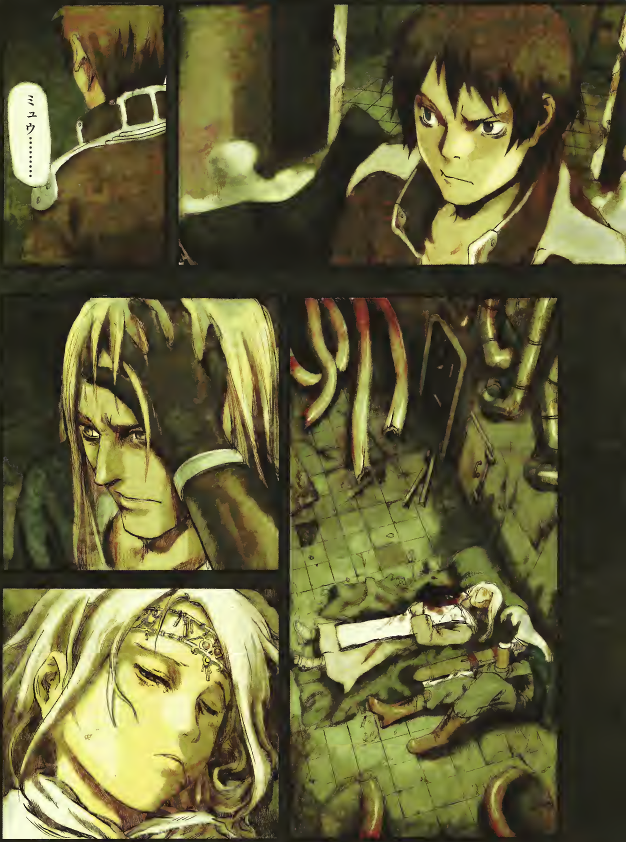

大丈夫？
私は――
――子供？

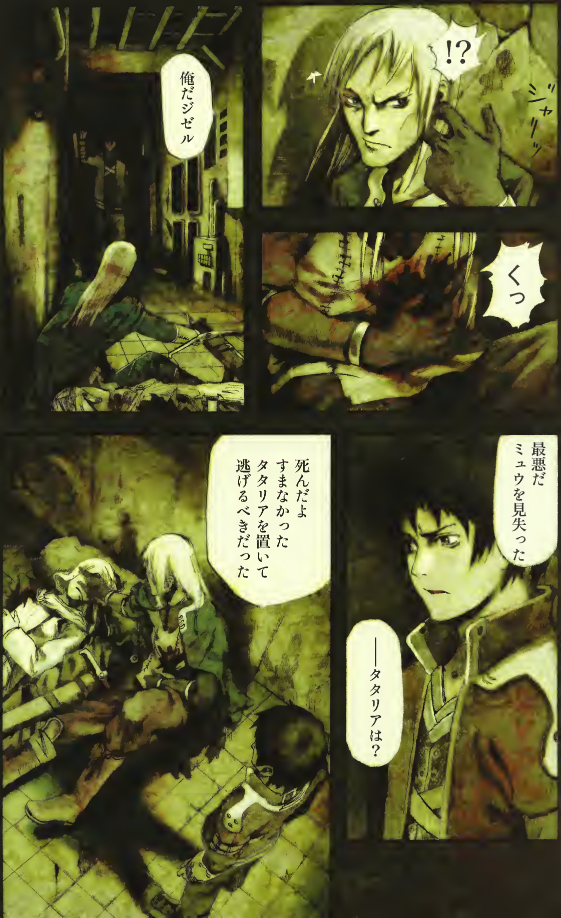

スゥ
――――?
ミシャク
な……!?
ベシャー
くっ
ギチッ

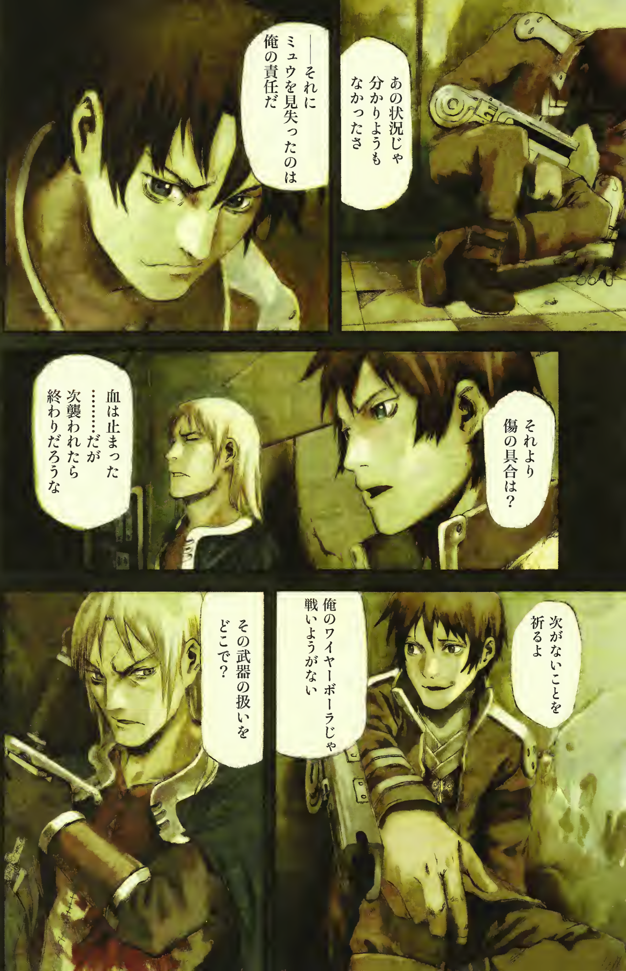

ドッ
グ

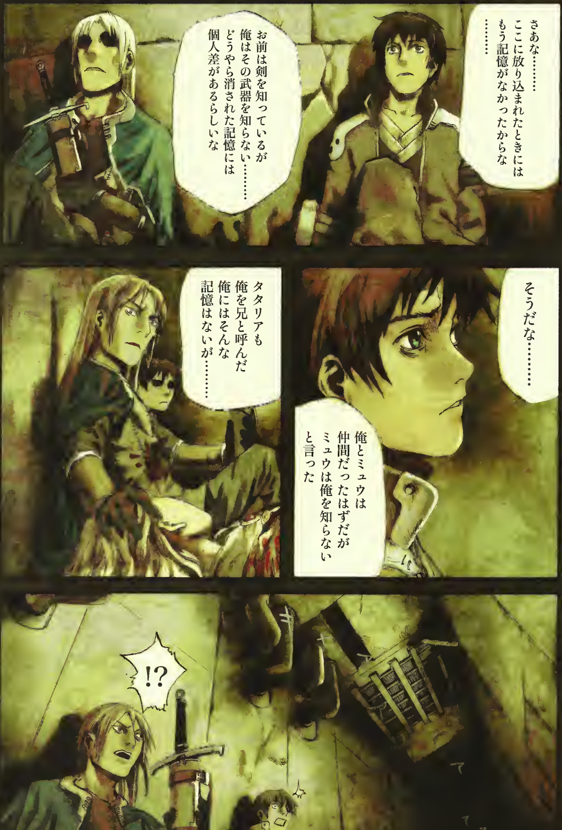

カチッ
ギギギ
バガッ
キュルルル
ゴトッ

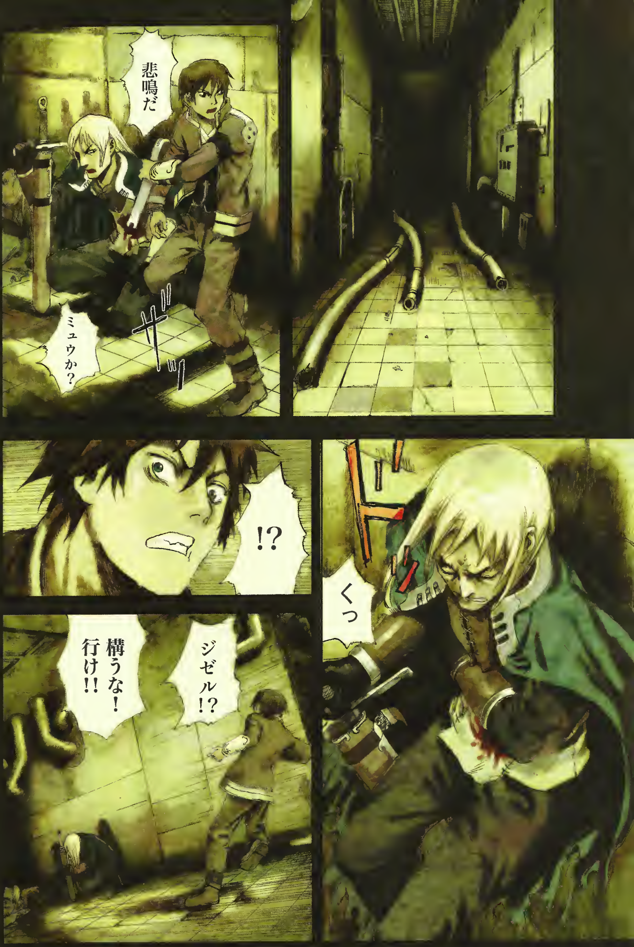
第二話

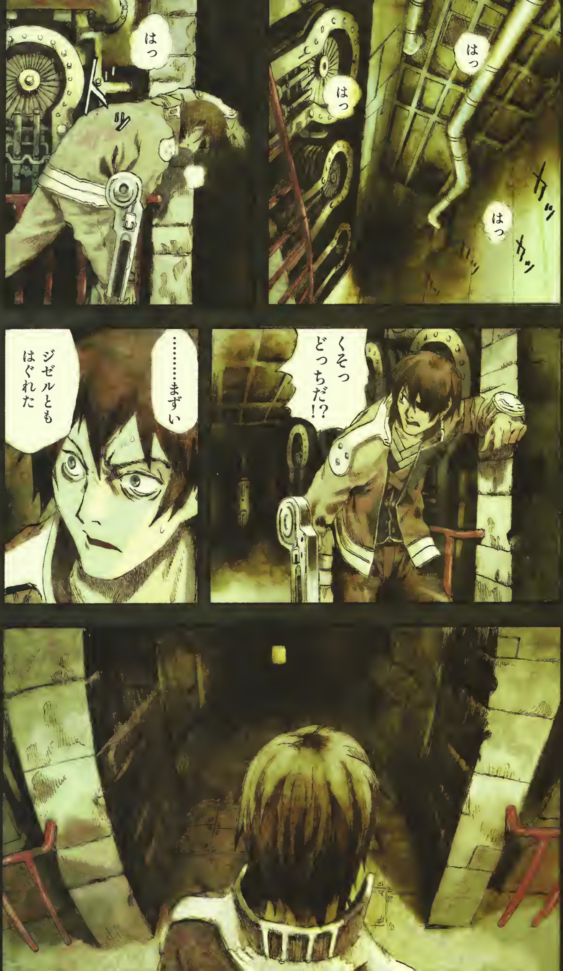

ミュウ………

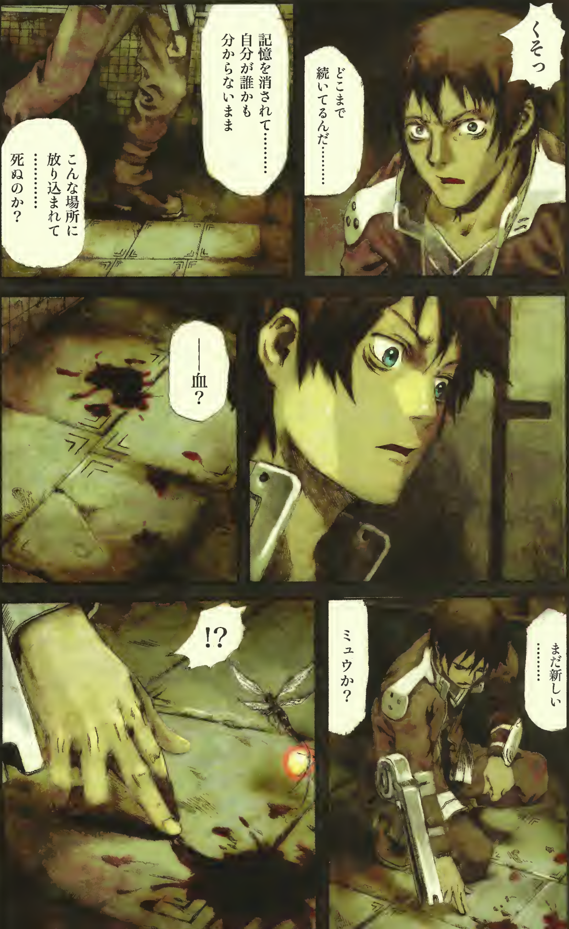

!?
ジャリッ
くっ
俺だジゼル
最悪だ
ミュウを見失った
——タタリアは？
死んだよ
すまなかった
タタリアを置いて
逃げるべきだった

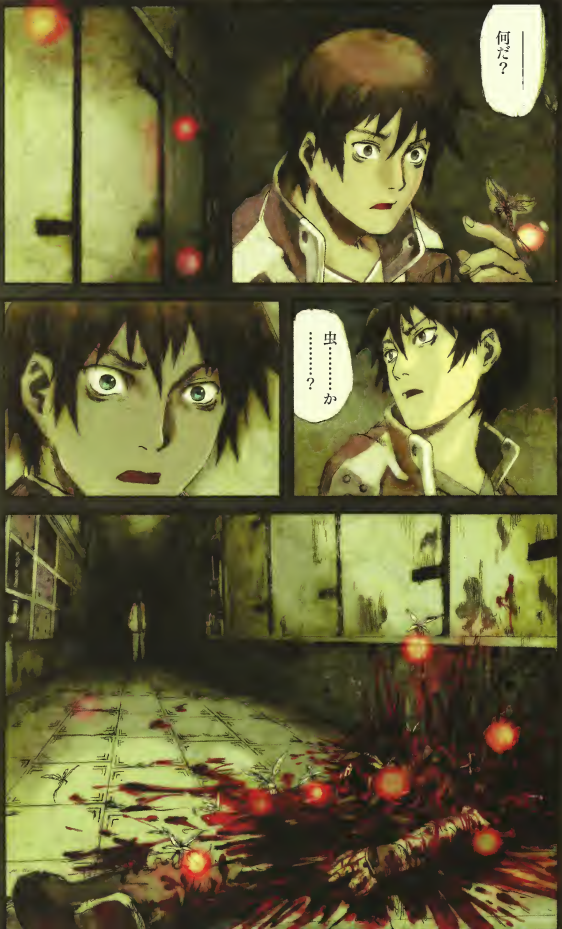

あの状況じゃ分かりようもなかったさ
——それにミュウを見失ったのは俺の責任だ
それより傷の具合は？
血は止まった……だが次襲われたら終わりだろうな
次がないことを祈るよ
俺のワイヤーボーラじゃ戦いようがない
その武器の扱いをどこで？

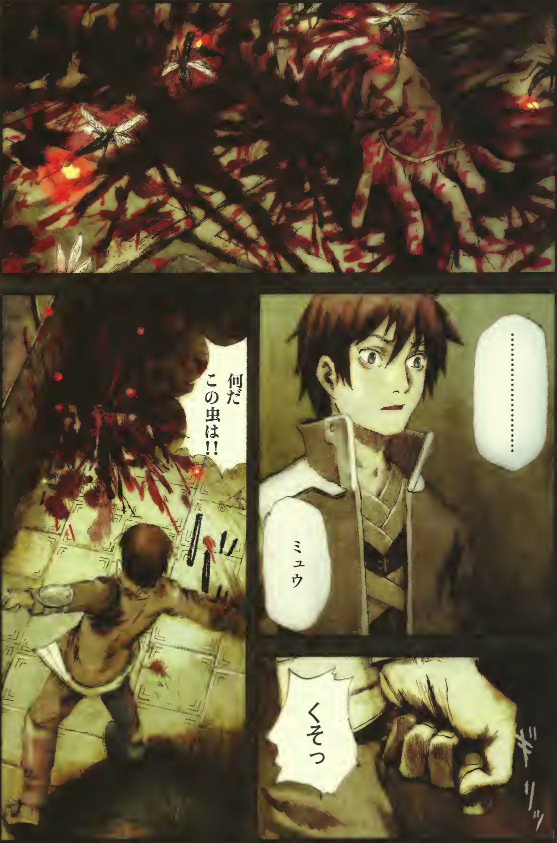

さあな…………
ここに放り込まれたときには
もう記憶がなかったからな
………
お前は剣を知っているが
俺はその武器を知らない…………
どうやら消された記憶には
個人差があるらしいな
そうだな…………
俺とミュウは
仲間だったはずだが
ミュウは俺を知らない
と言った
タタリアも
俺を兄と呼んだ
俺にはそんな
記憶はないが…………
!?

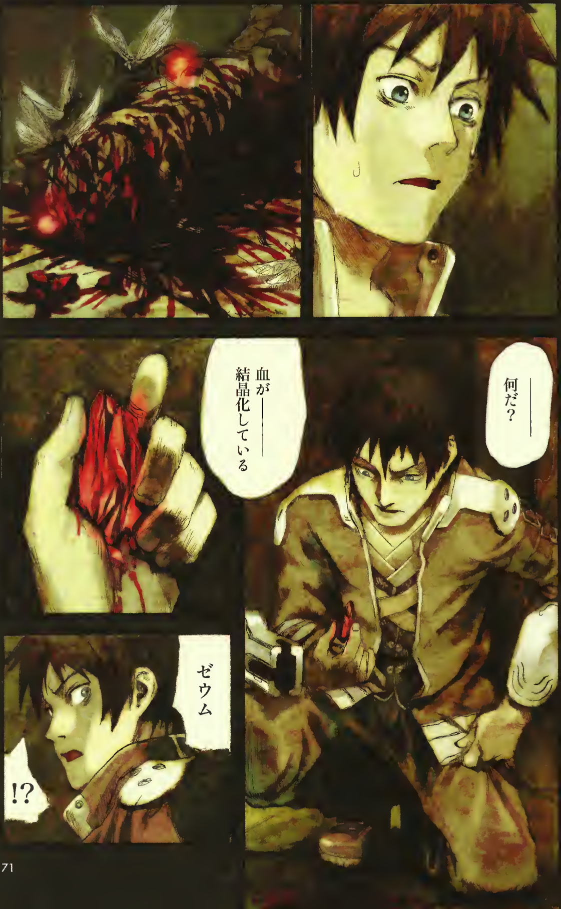

悲鳴だ
ザザッ
ミュウか？
!?
くっ
ジゼル!?
構うな！
行け!!

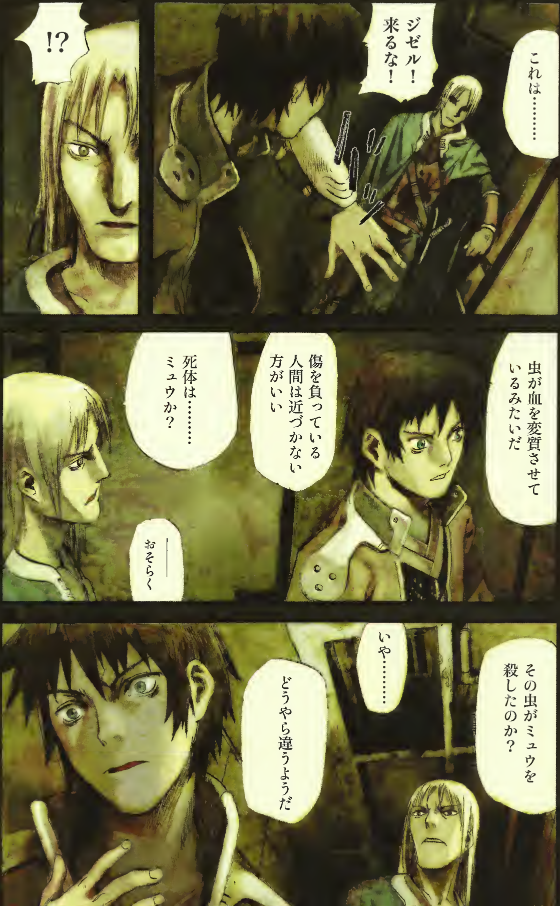

はっ
はっ
カッ
はっ
カッ
カッ
はっ
ドッ
くそっ どっちだ!?
……まずい
ジゼルとも はぐれた

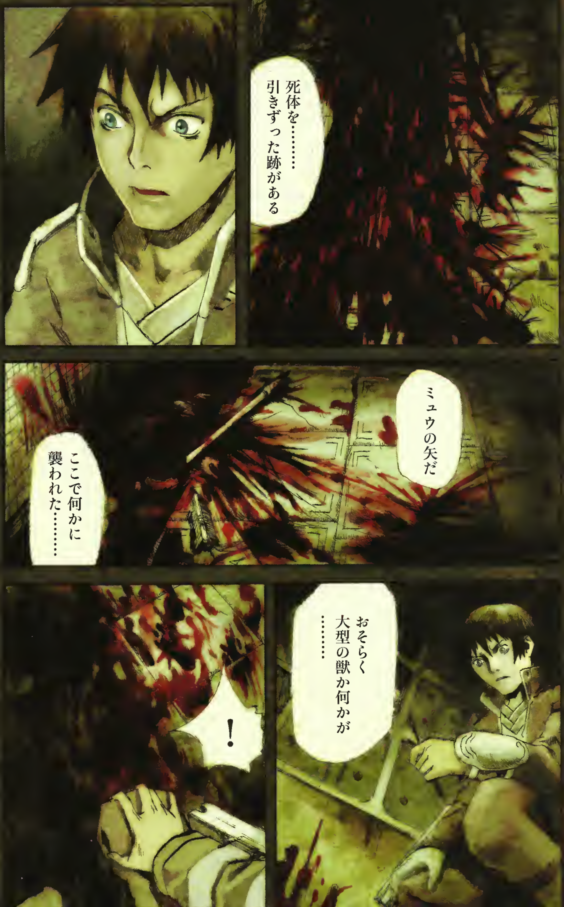

くそっ
どこまで続いてるんだ………
記憶を消されて………自分が誰かも分からないまま
こんな場所に放り込まれて………死ぬのか？
——血？
まだ新しい………
ミュウか？
!?

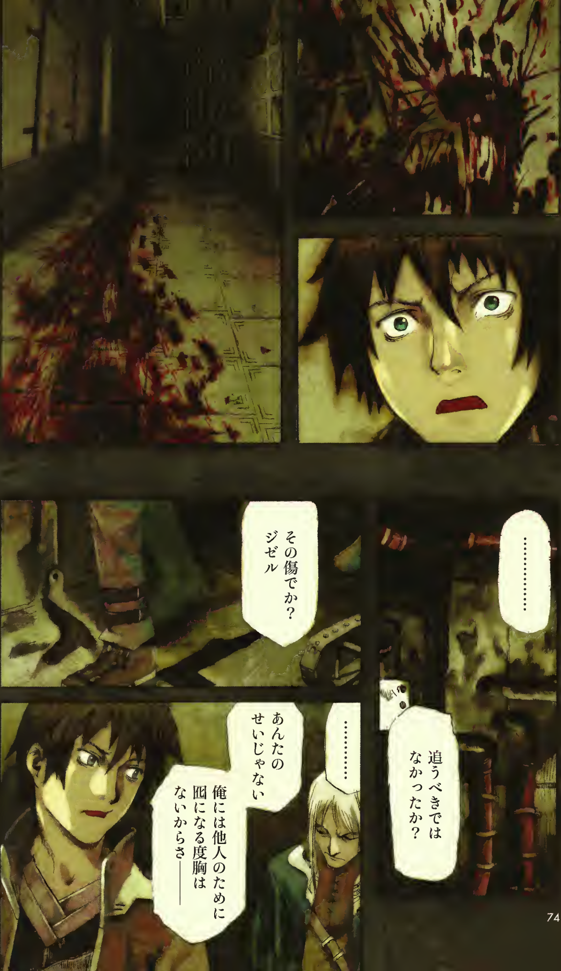

——何だ？
虫………か………？

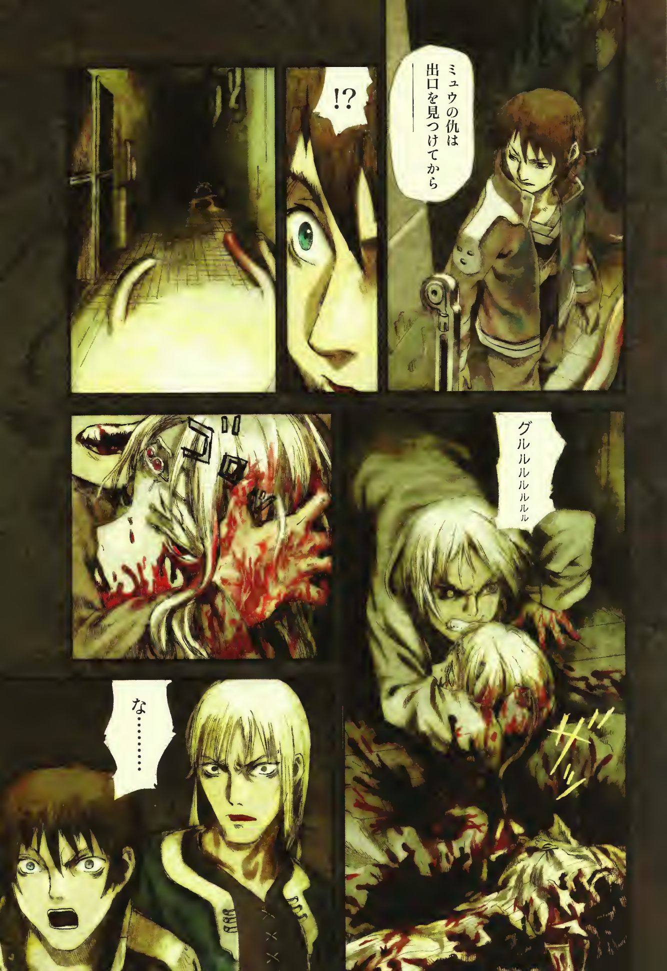

…………
ミュウ
くそっ
ギリッ
何だ この虫は!!

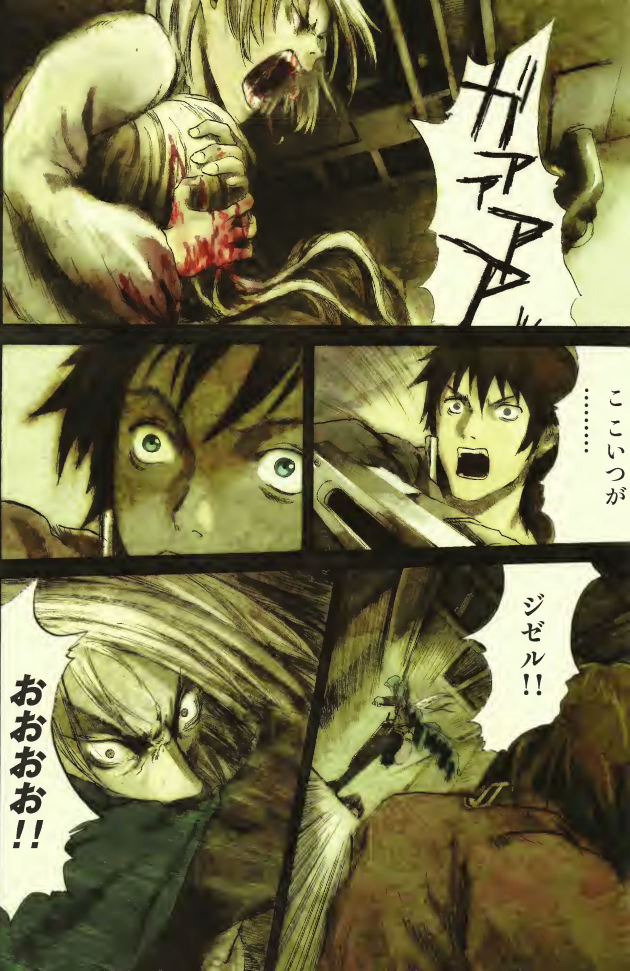

何だ？——
血が——
結晶化している
ゼウム
!?

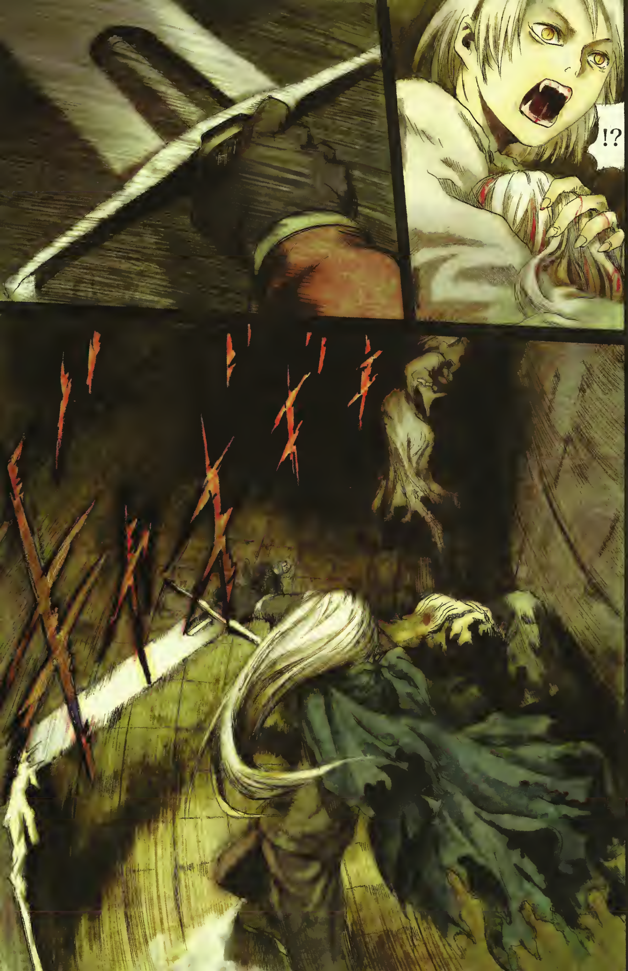

これは………
ジゼル！来るな！
!?
虫が血を変質させているみたいだ
傷を負っている人間は近づかない方がいい
死体は………ミュウか？
おそらく――
その虫がミュウを殺したのか？
いや………
どうやら違うようだ

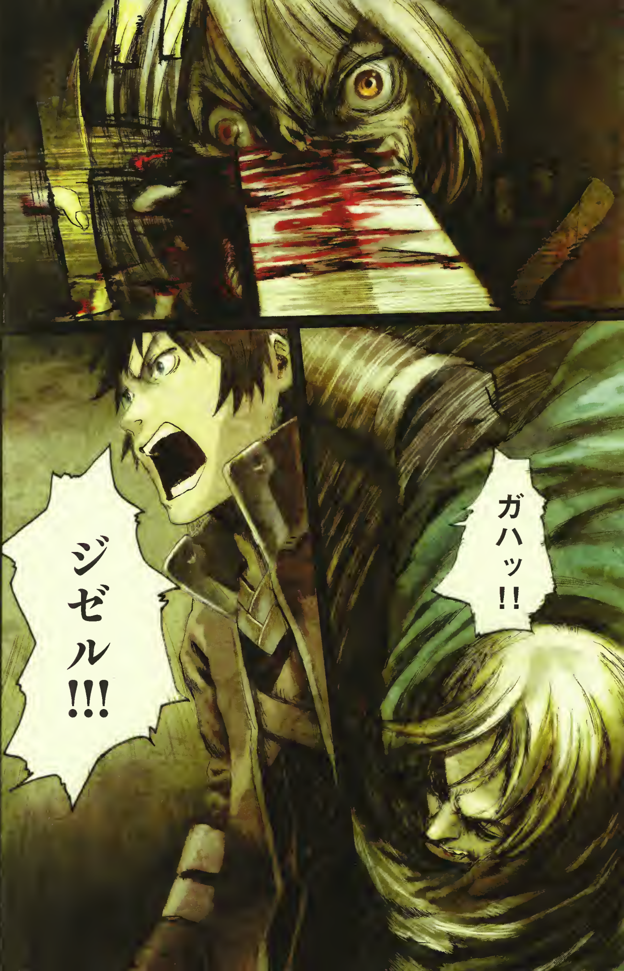

死体を………
引きずった跡がある
ミュウの矢だ
ここで何かに
襲われた………
おそらく
大型の獣か何かが
………
!

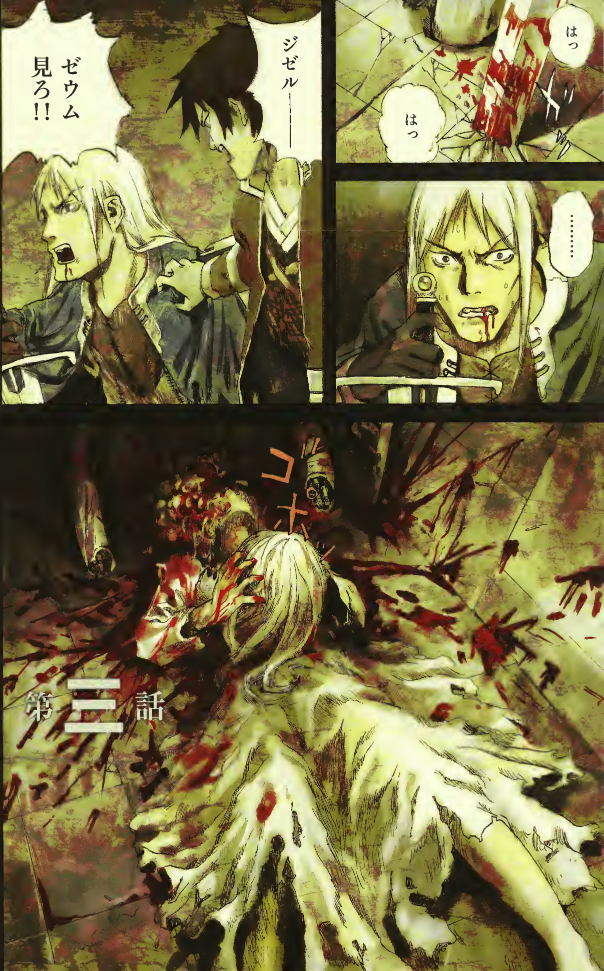

…………
追うべきではなかったか？
その傷でか？ジゼル
…………
あんたのせいじゃない
俺には他人のために囮になる度胸はないからさ――

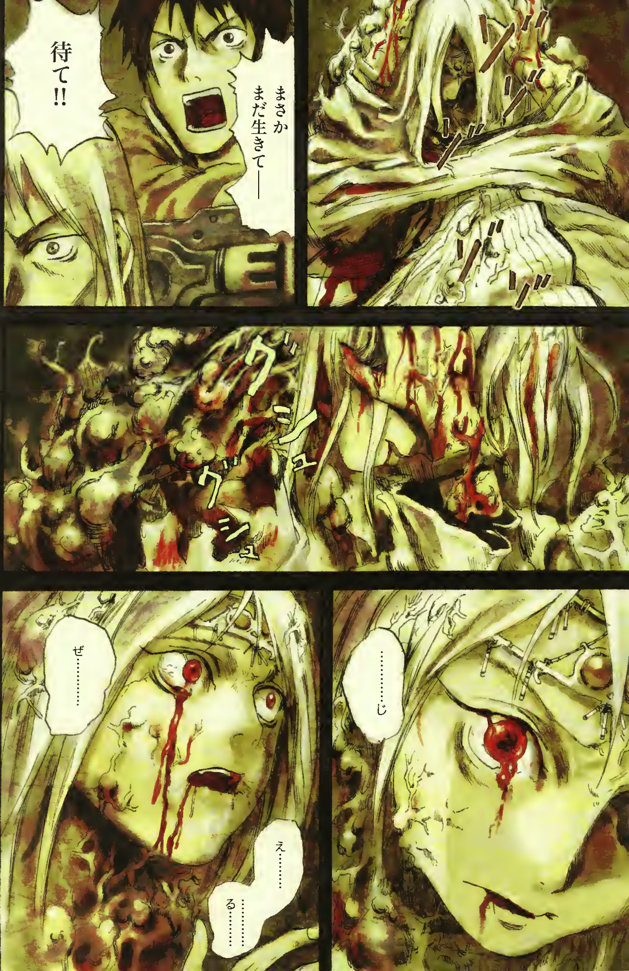

ミュウの仇は
出口を見つけてから――
!?
ゴロッ
グルルルルルルル
ザッ
な………

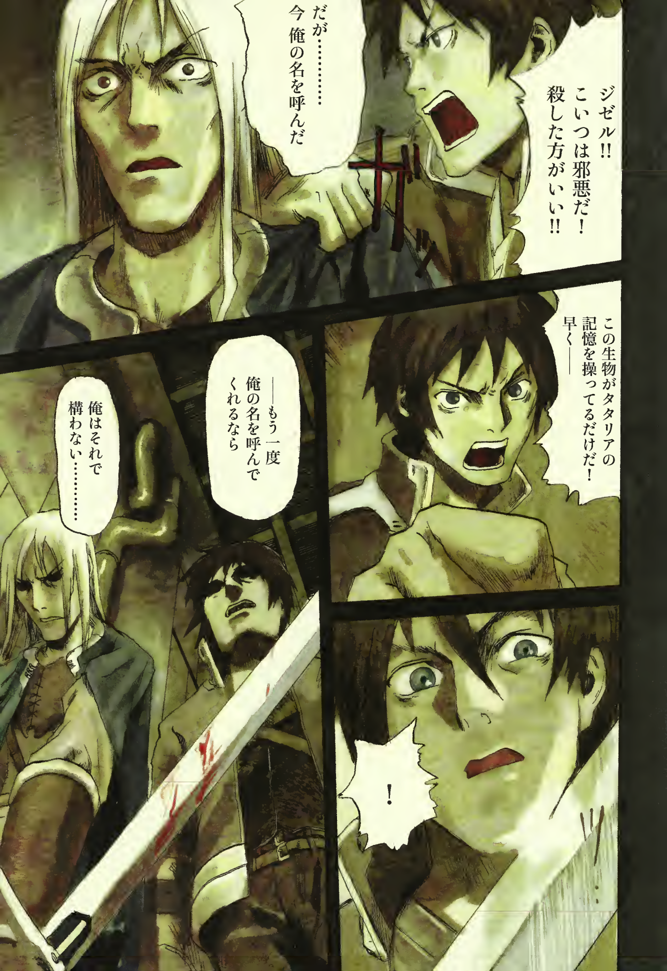

ガアァアアッ
こいつが……
ジゼル!!
おおおお!!

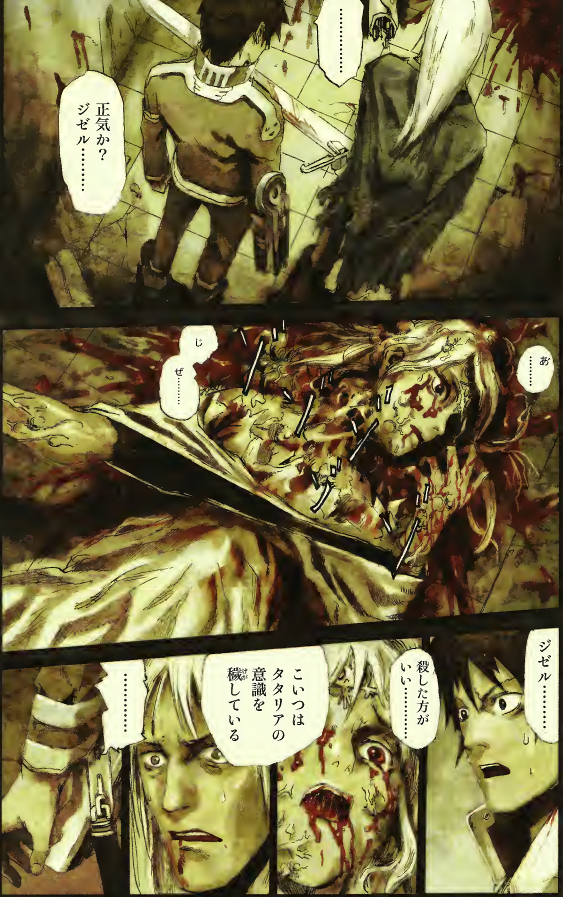


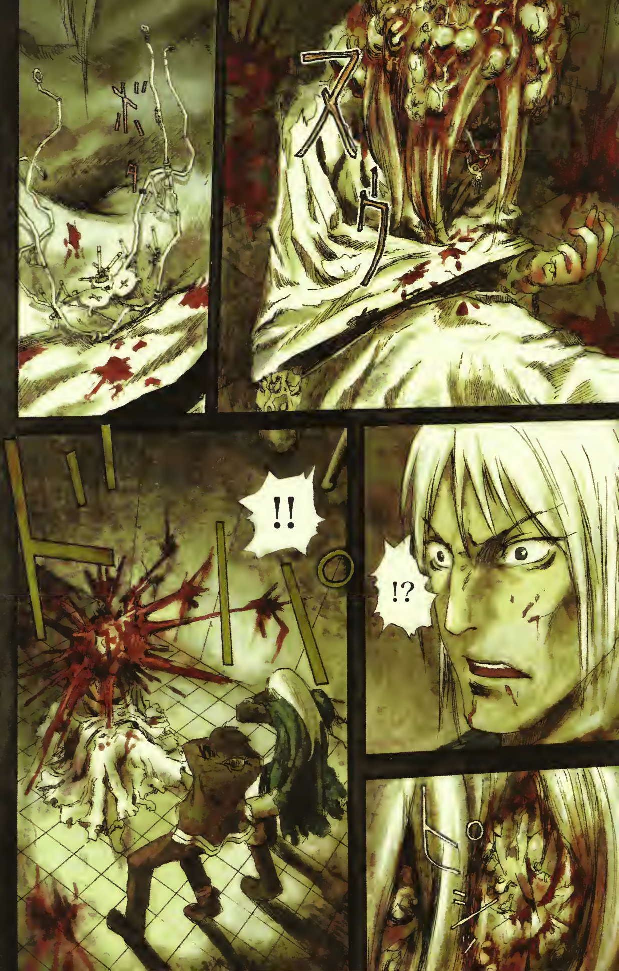

ガハッ!!
ジゼル!!!

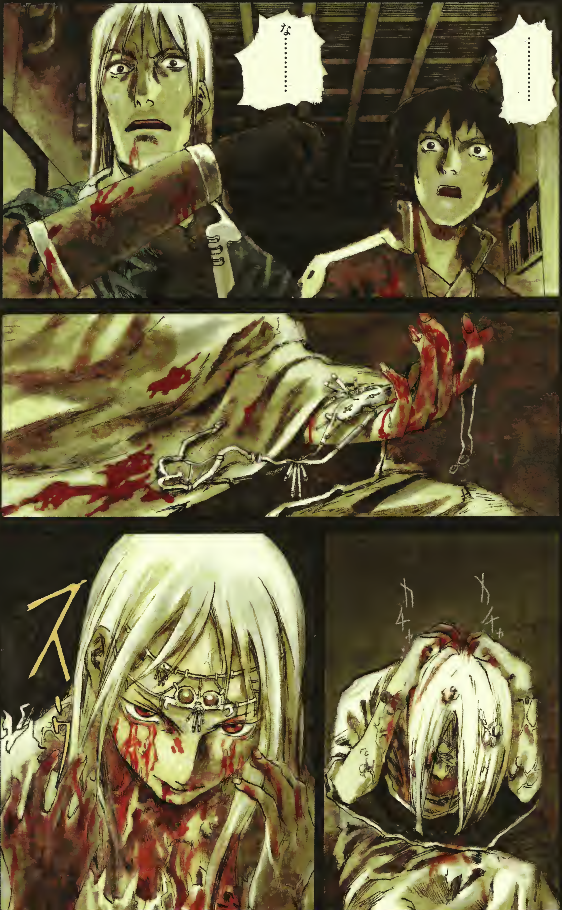

はっ
はっ
ド
………
ジゼル―――
ゼウム
見ろ!!
ゴホッ
第三話

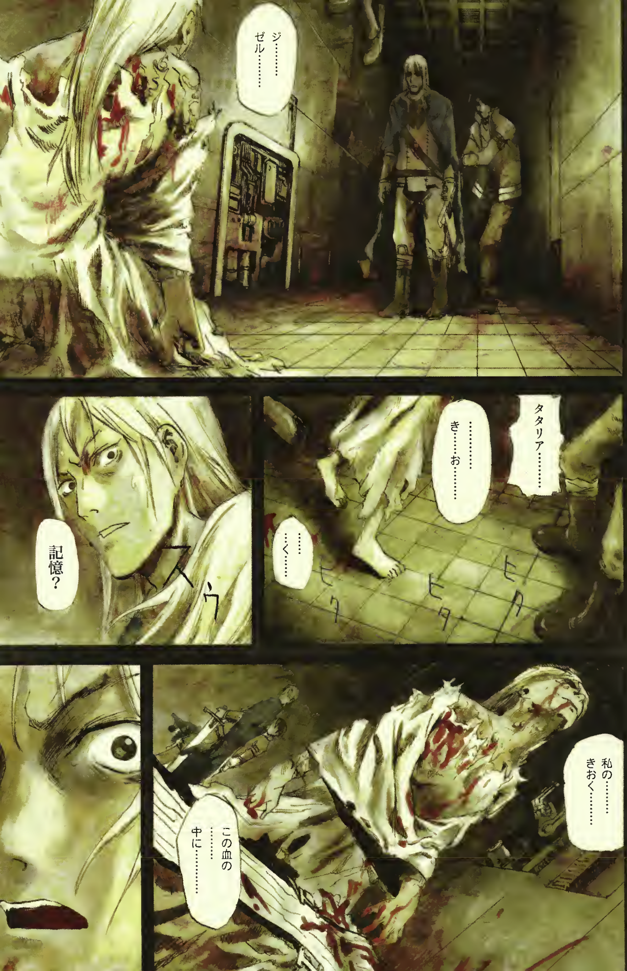

ゾゾ
ゾゾ
ゾゾ
まさか
まだ生きて――
待て!!
グシュ
グシュ
……じ
ぜ………
え………
る………

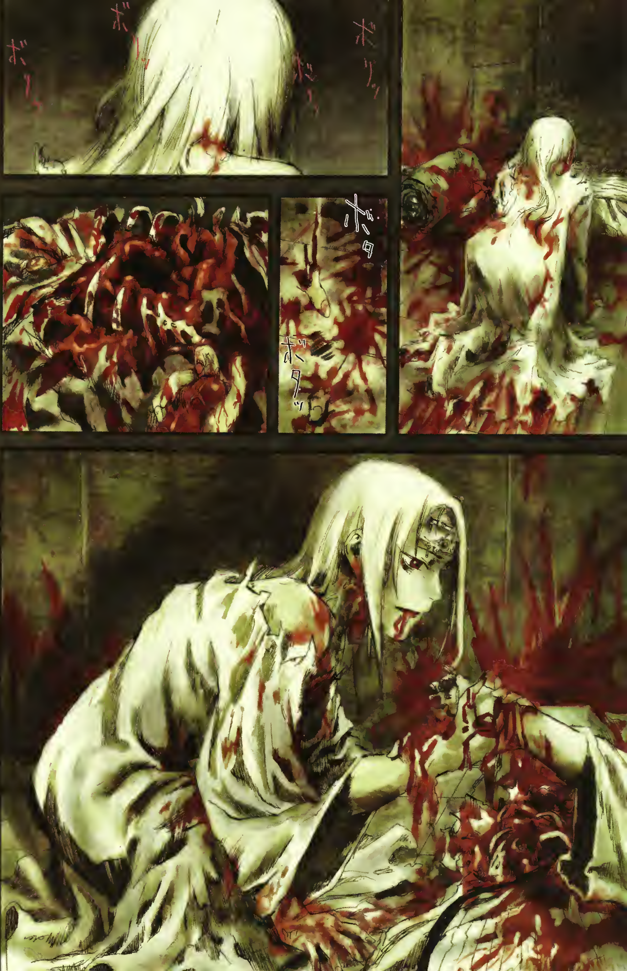

ジゼル!! こいつは邪悪だ! 殺した方がいい!!
だが……… 今俺の名を呼んだ
この生物がタタリアの記憶を操ってるだけだ! 早く――
――もう一度 俺の名を呼んで くれるなら
俺はそれで 構わない………
!

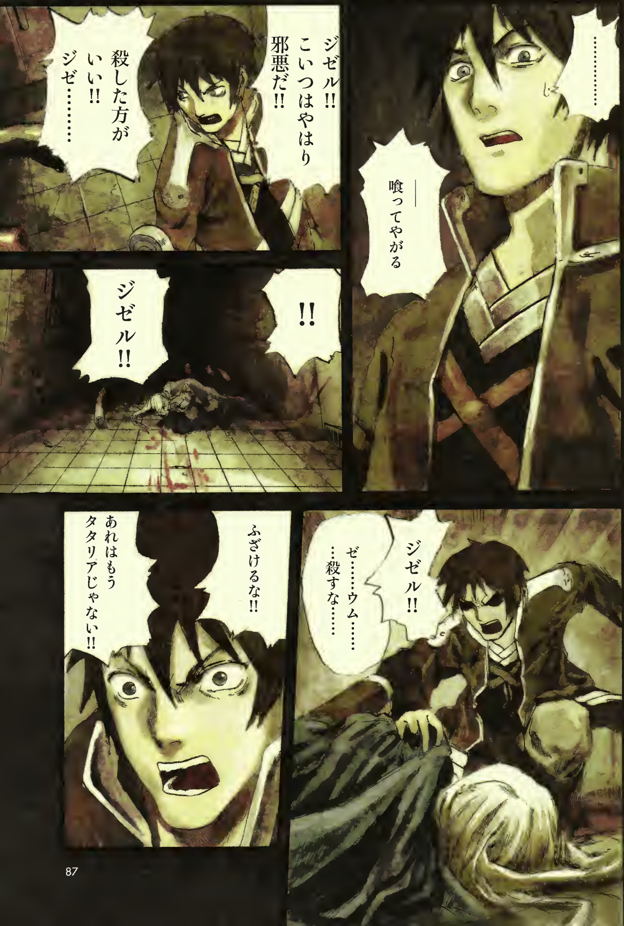

…………
正気か？ジゼル………
あ……
じ ぜ……
ジゼル………
殺した方がいい………
こいつはタタリアの意識を穢（けが）している
………

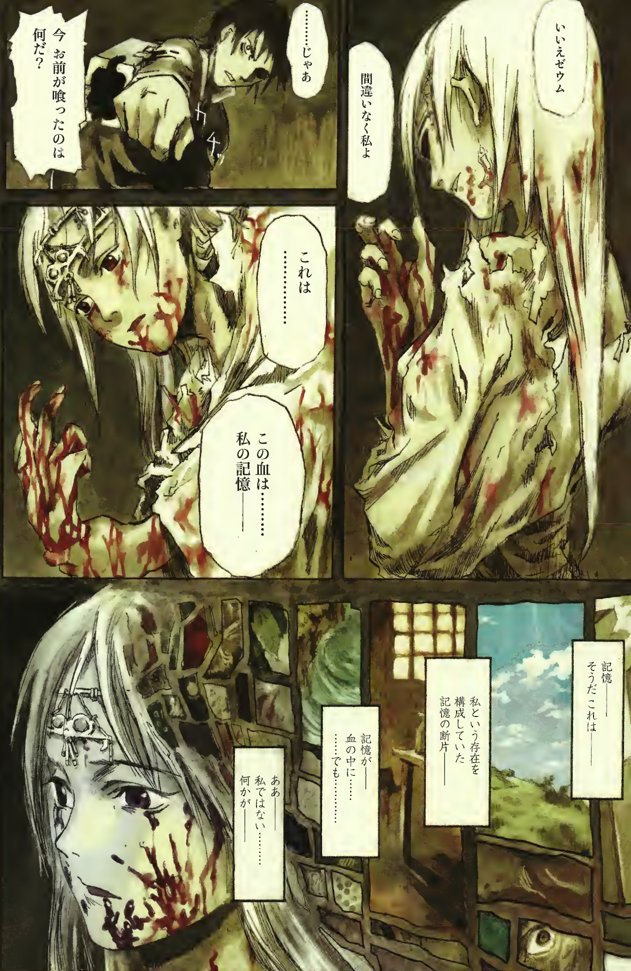

ズウ
ボタ
!?
!!
ピキ

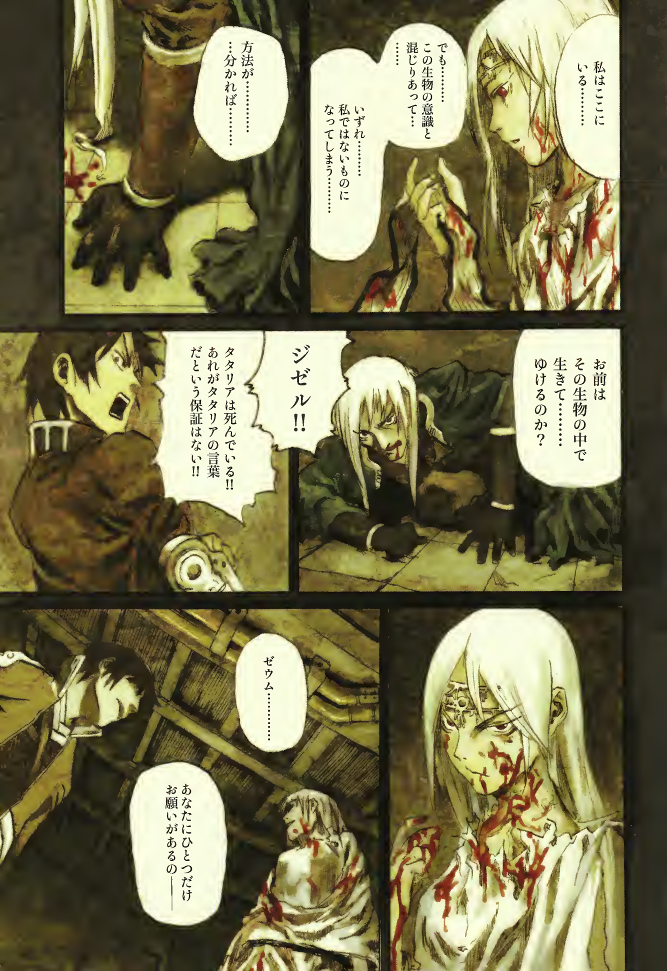

…………
な…………
カタカタ
カタカタ
スーウ

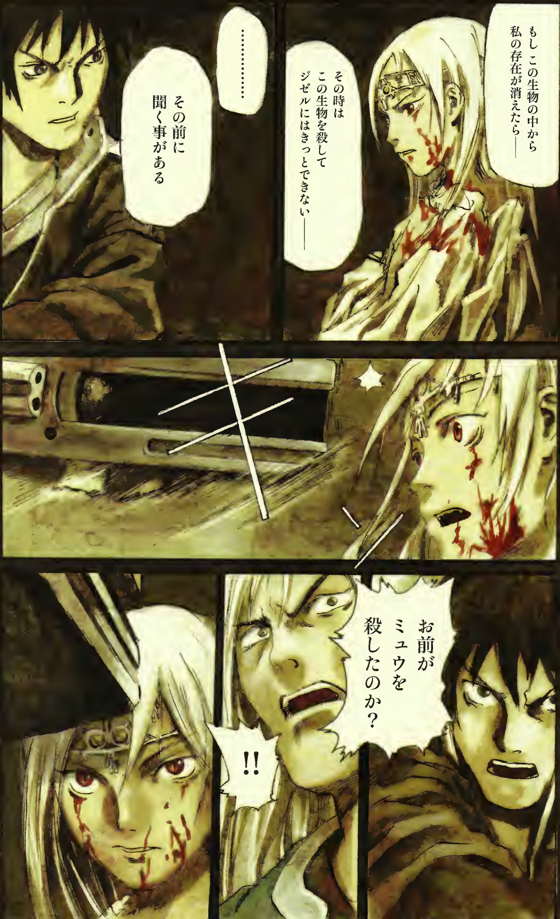

ジ……
ゼル……
タタリア……
き……お……
……く……
ヒタ
ヒタ
ヒタ
記憶？
スゥ
私の……
きおく……
この血の……
中に……

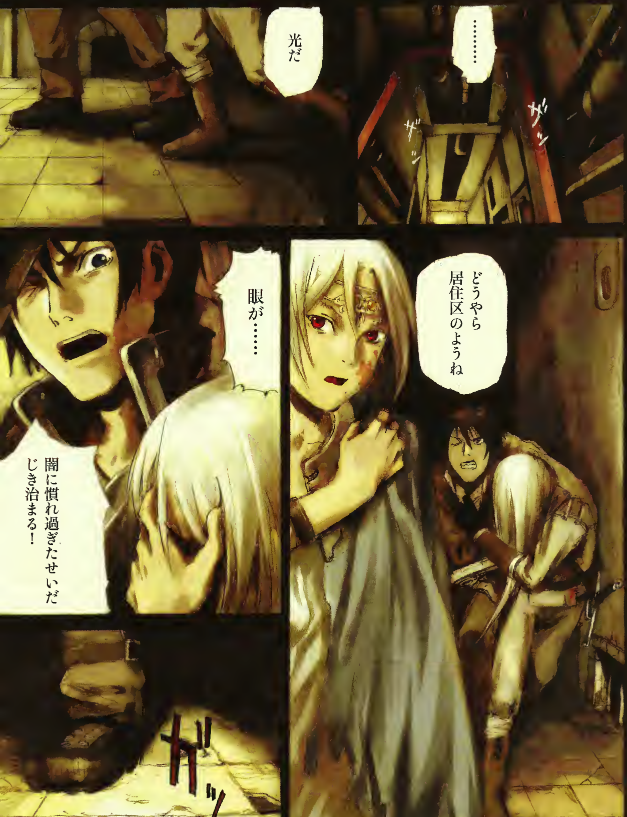

ボリッ
ボリッ
ボリッ
ボリッ
ボタ
ボタッ


………
——喰ってやがる
ジゼル!! こいつはやはり邪悪だ!!
殺した方がいい!! ジゼ………
!!
ジゼル!!
ジゼル!!
ゼ……ウム……
…殺すな……
ふざけるな!!
あれはもうタタリアじゃない!!

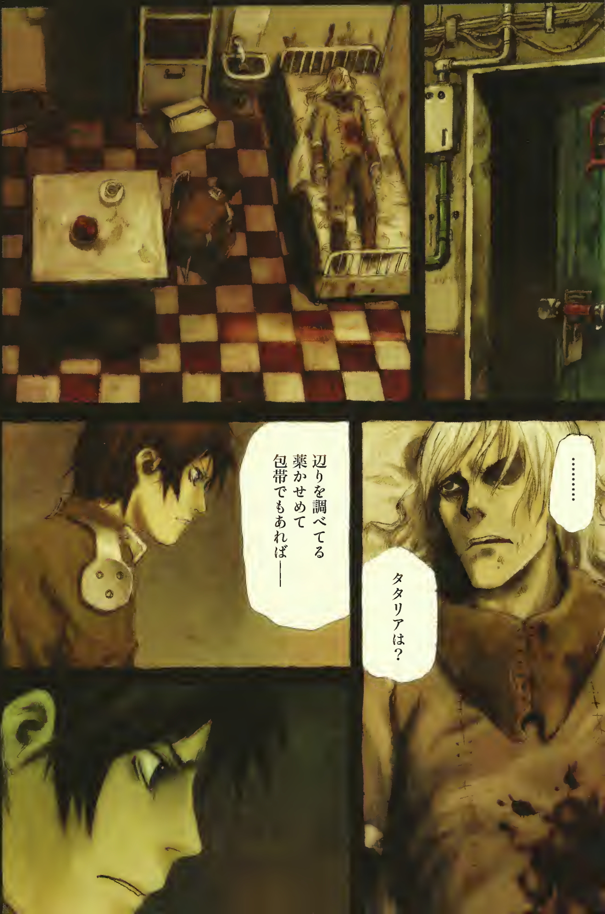

いいえゼウム
間違いなく私よ
……じゃあ
カチッ
今お前が喰ったのは何だ？
これは…………
この血は………私の記憶——
記憶——そうだ これは——
私という存在を構成していた記憶の断片——
記憶が——血の中に……でも………
ああ——私ではない………何かが——

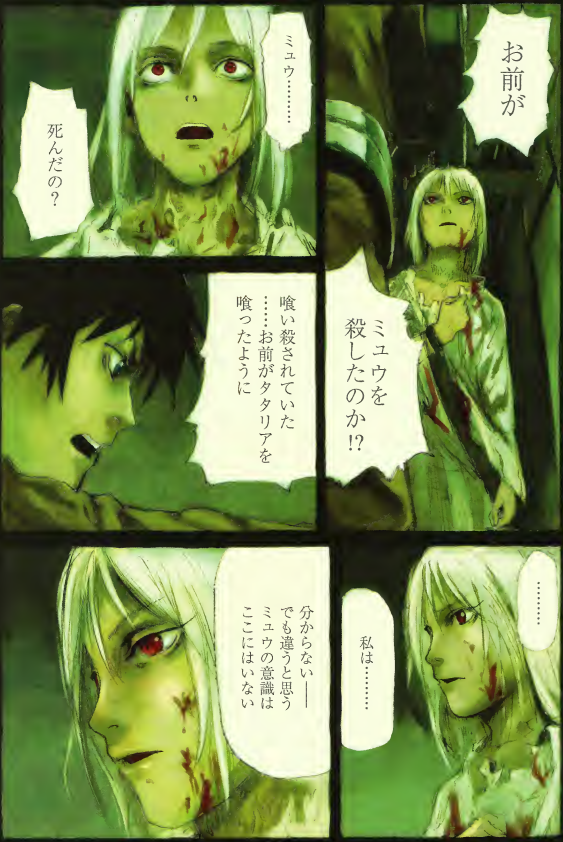

私はここにいる………
でも………この生物の意識と混じりあって………
いずれ………私ではないものになってしまう………
方法が………分かれば………
お前はその生物の中で生きて………ゆけるのか？
ジゼル!!
タタリアは死んでいる!!あれがタタリアの言葉だという保証はない!!
ゼウム………
あなたにひとつだけお願いがあるの——

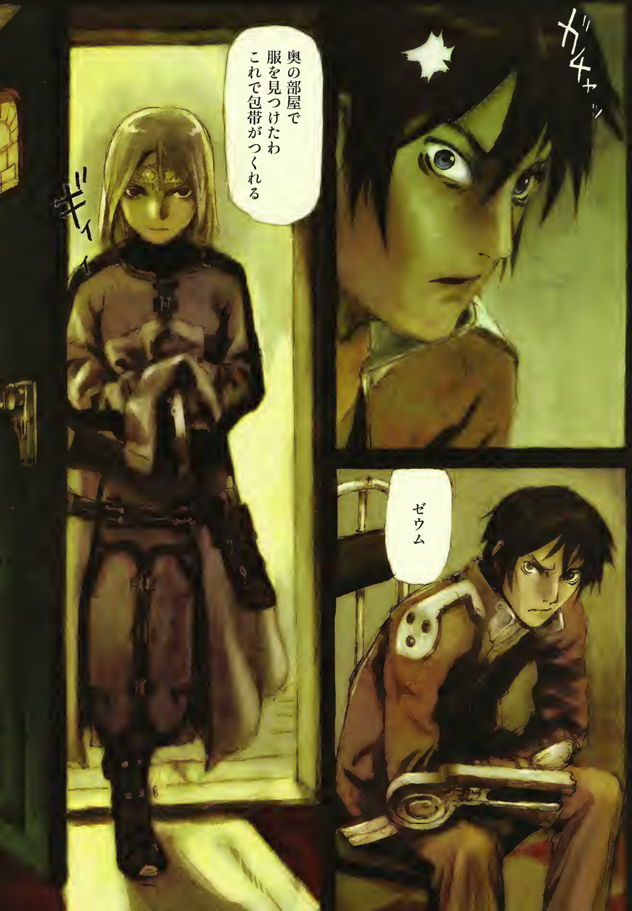

もし この生物の中から 私の存在が消えたら――
その時は この生物を殺して ジゼルにはきっとできない――
……………
その前に 聞く事がある
お前が ミュウを 殺したのか？
!!

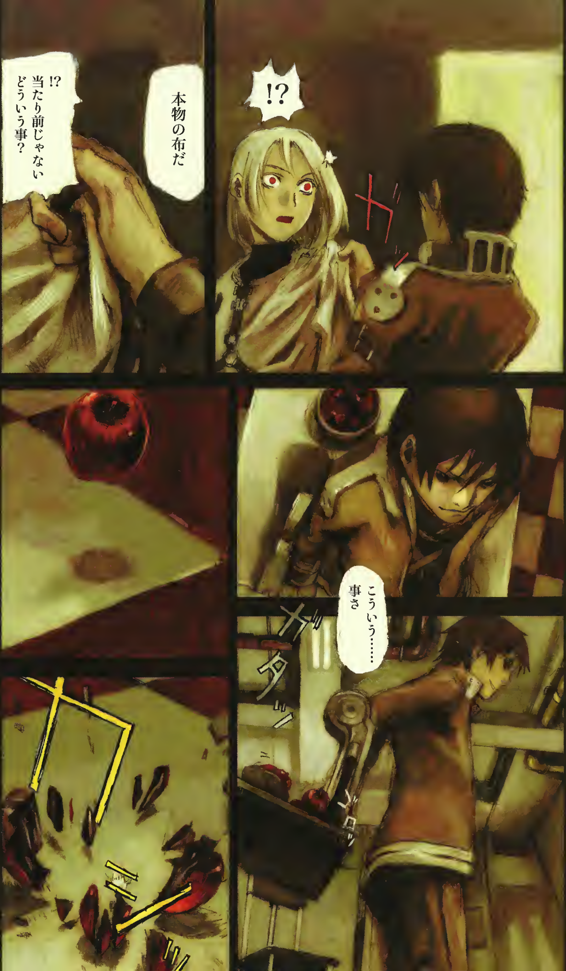

………
ザッ
ザッ
光だ
どうやら居住区のようね
眼が……
闇に慣れ過ぎたせいだ
じき治まる！
ザッ

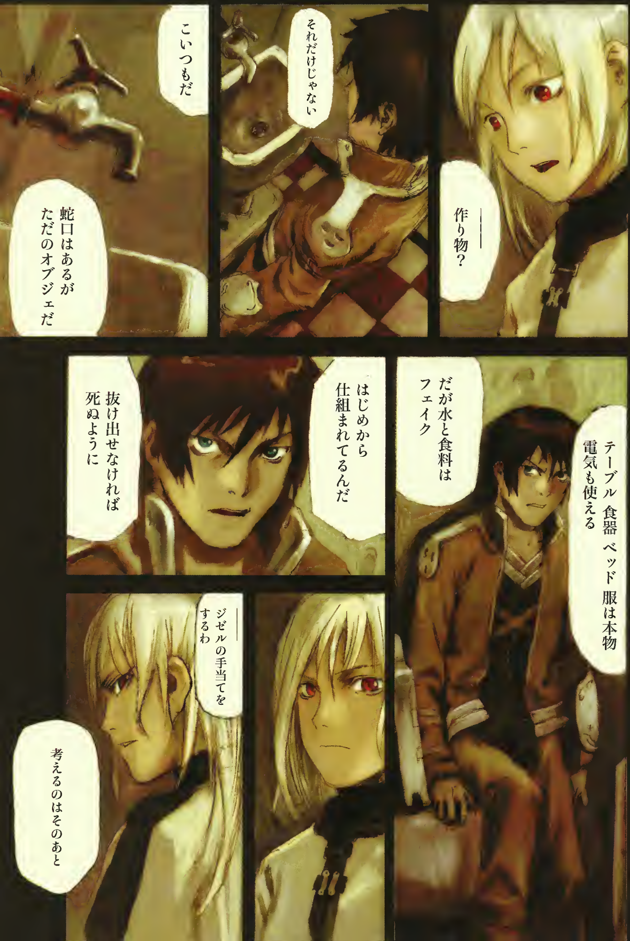
第四話

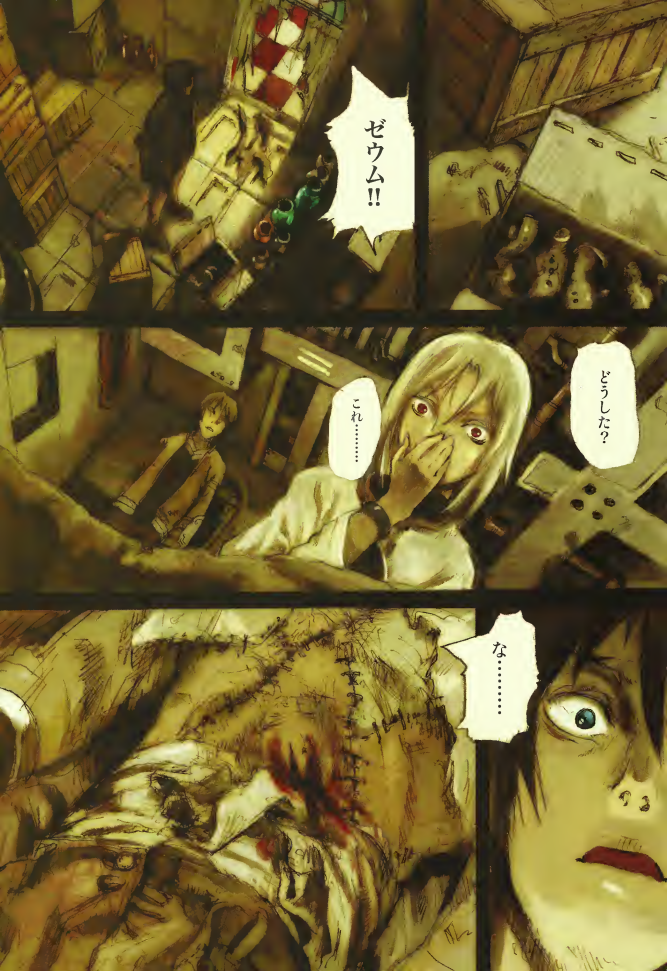

……
タタリアは？
辺りを調べてる薬かせめて包帯でもあれば――

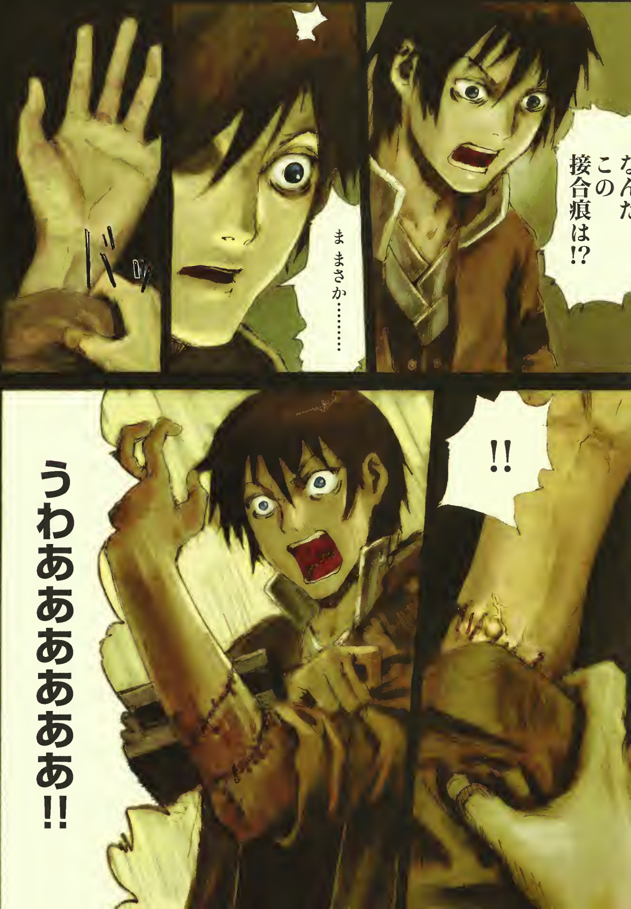

お前が
ミュウを殺したのか!?
ミュウ………
死んだの？
喰い殺されていた……お前がタタリアを喰ったように
………
私は………
分からない――でも違うと思うミュウの意識はここにはいない

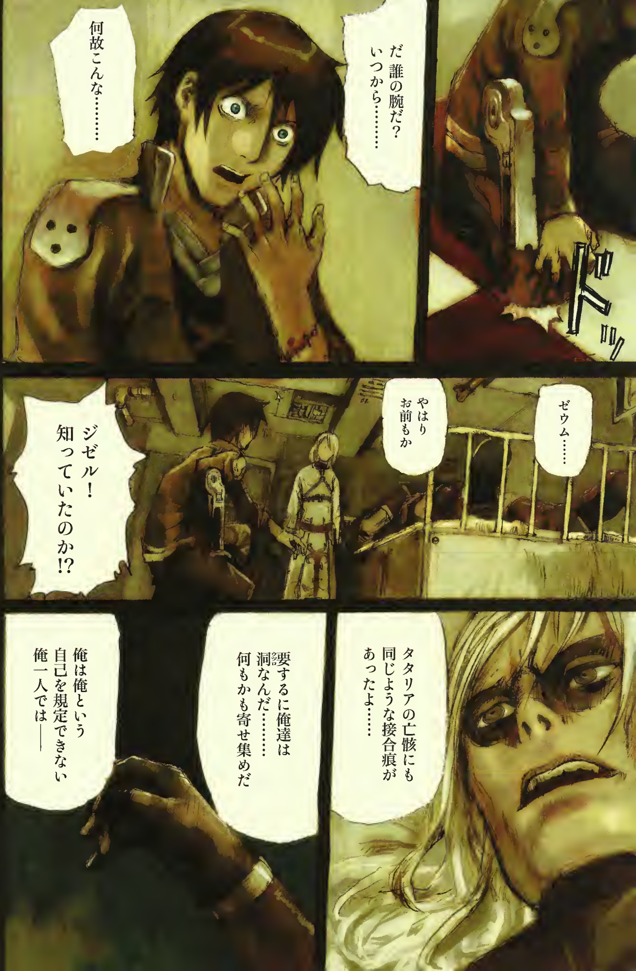

ガチャッ
ゼウム
ギィィ
奥の部屋で
服を見つけたわ
これで包帯がつくれる

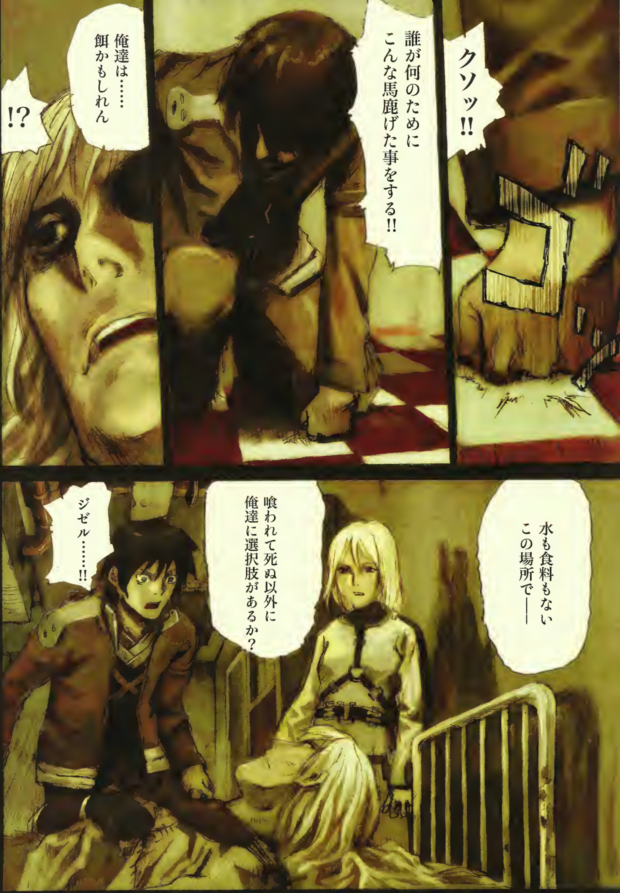

!?
ガッ
本物の布だ
!?
当たり前じゃない
どういう事？
こういう……
事さ
ガタッ
ゴロッ

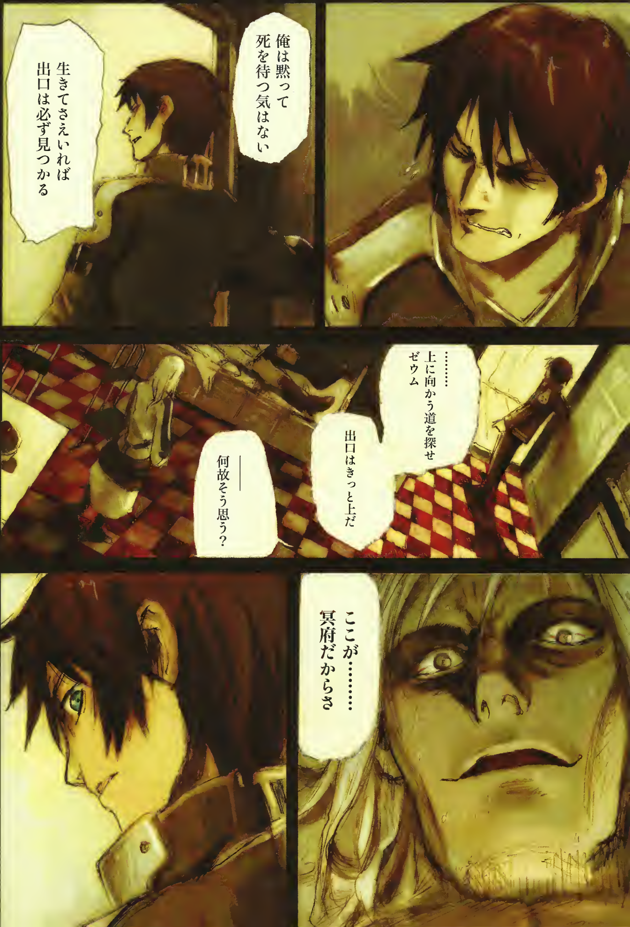

――作り物？
それだけじゃない
こいつもだ
蛇口はあるが ただのオブジェだ
テーブル 食器 ベッド 服は本物 電気も使える
だが水と食料は フェイク
はじめから 仕組まれてるんだ
抜け出せなければ 死ぬように
――ジゼルの手当てを するわ
考えるのはそのあと

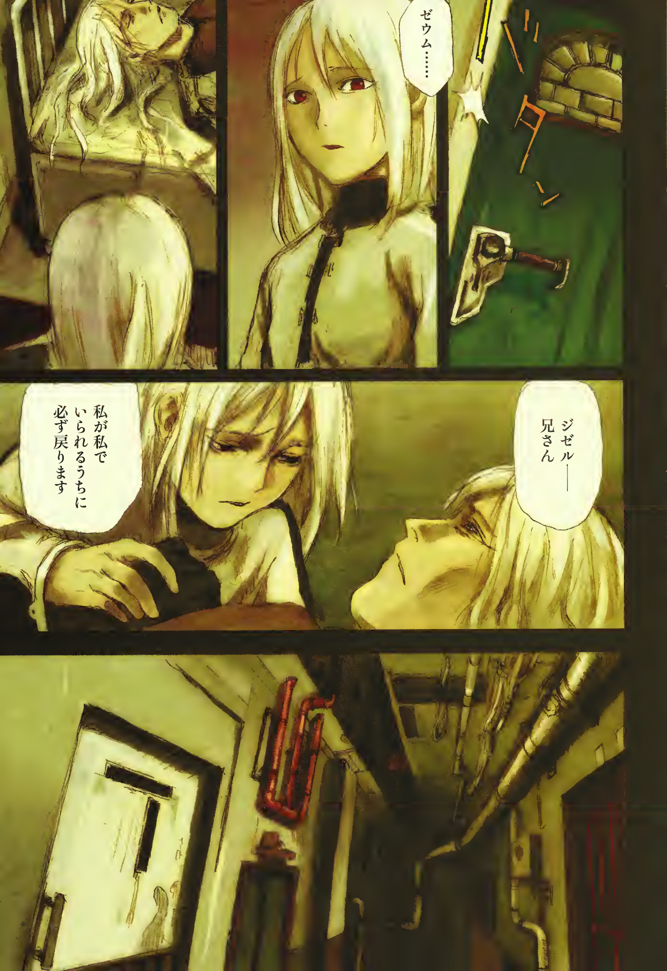

ゼウム!!
どうした?
これ……
な………

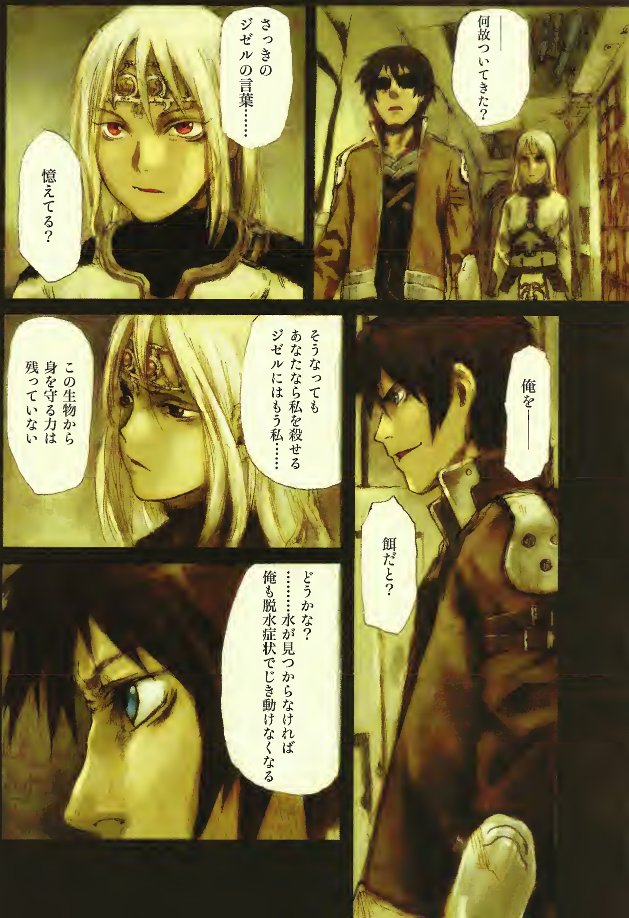

なんだ
この
接合痕は!?
ま まさか………
バッ
!!
うわあああああ!!

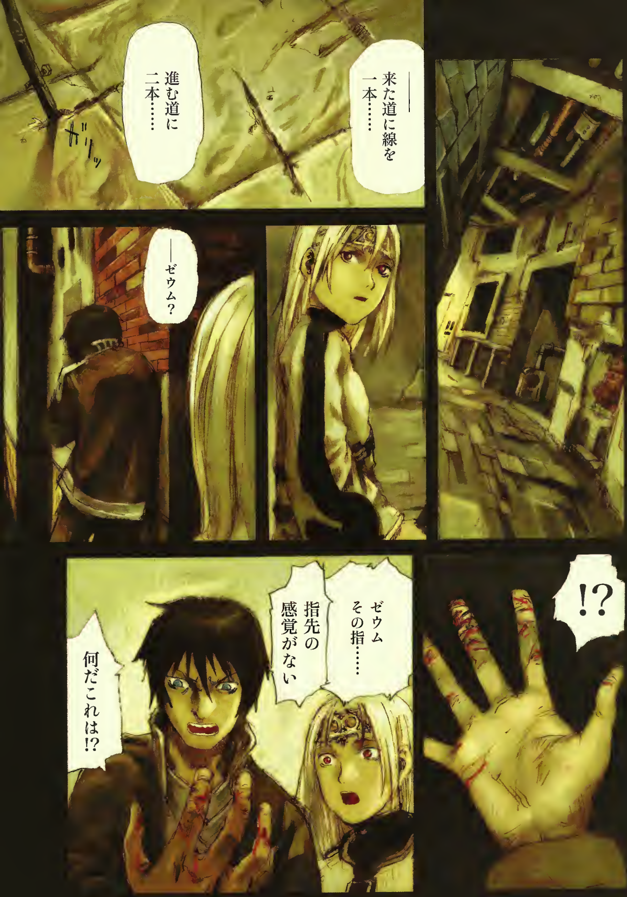

ドドッ
だ誰の腕だ？
いつから………
何故こんな………
ゼウム……
やはり
お前もか
ジゼル！
知っていたのか!?
タタリアの亡骸にも
同じような接合痕が
あったよ……
要するに俺達は
洞（うろ）なんだ………
何もかも寄せ集めだ
俺は俺という
自己を規定できない
俺一人では——

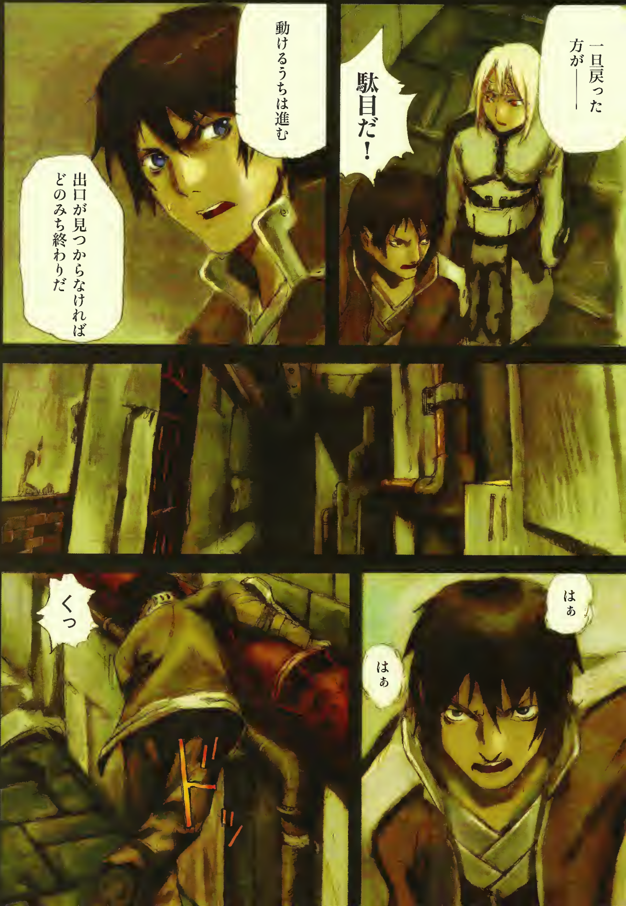

クソッ!!
誰が何のためにこんな馬鹿げた事をする!!
俺達は……餌かもしれん
!?
水も食料もないこの場所で――
喰われて死ぬ以外に俺達に選択肢があるか？
ジゼル……!!

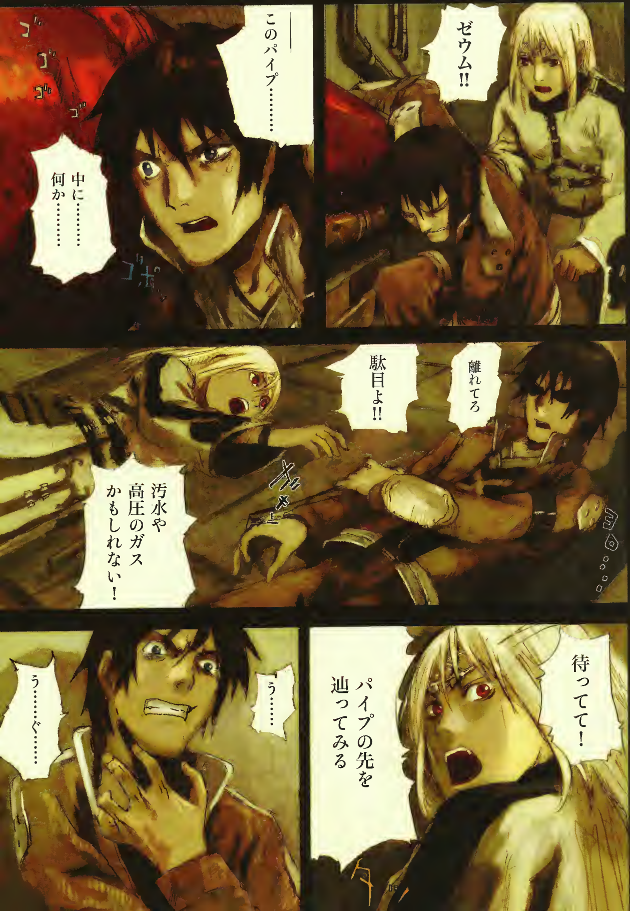

俺は黙って死を待つ気はない
生きてさえいれば出口は必ず見つかる
……上に向かう道を探せゼウム
出口はきっと上だ
――何故そう思う？
ここが………冥府だからさ

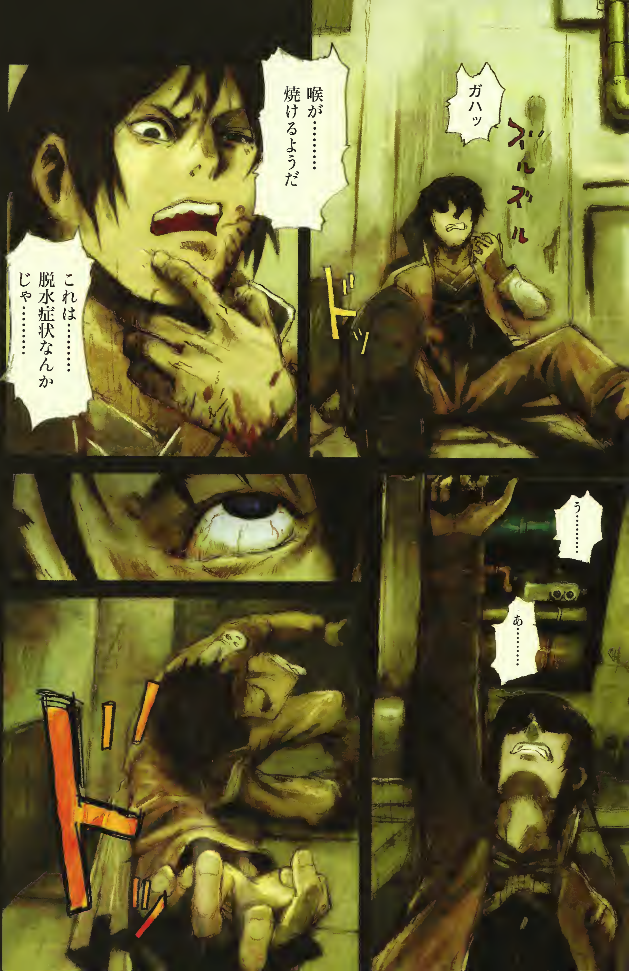

バタン
ゼウム……
ジゼル――兄さん
私が私でいられるうちに必ず戻ります

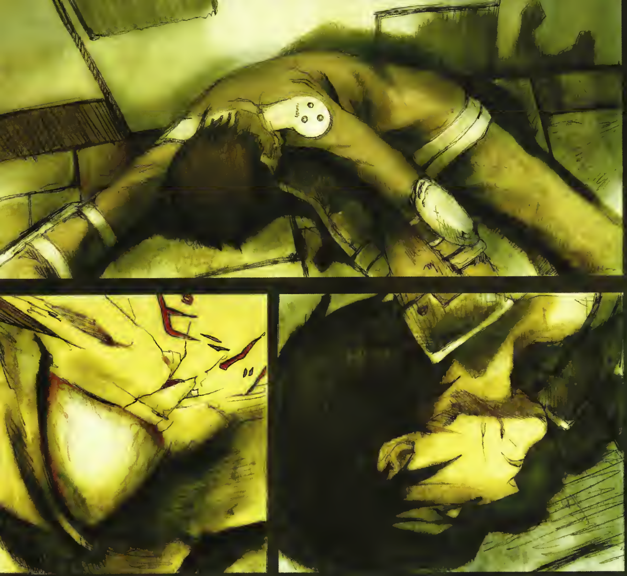

――何故ついてきた？
さっきのジゼルの言葉……
憶えてる？
俺を――
餌だと？
そうなってもあなたなら私を殺せるジゼルにはもう私……
この生物から身を守る力は残っていない
どうかな？……水が見つからなければ俺も脱水症状でじき動けなくなる


——来た道に線を一本……
進む道に二本……
ガリッ
——ゼウム？
!?
ゼウム その指……
指先の感覚がない
何だこれは!?

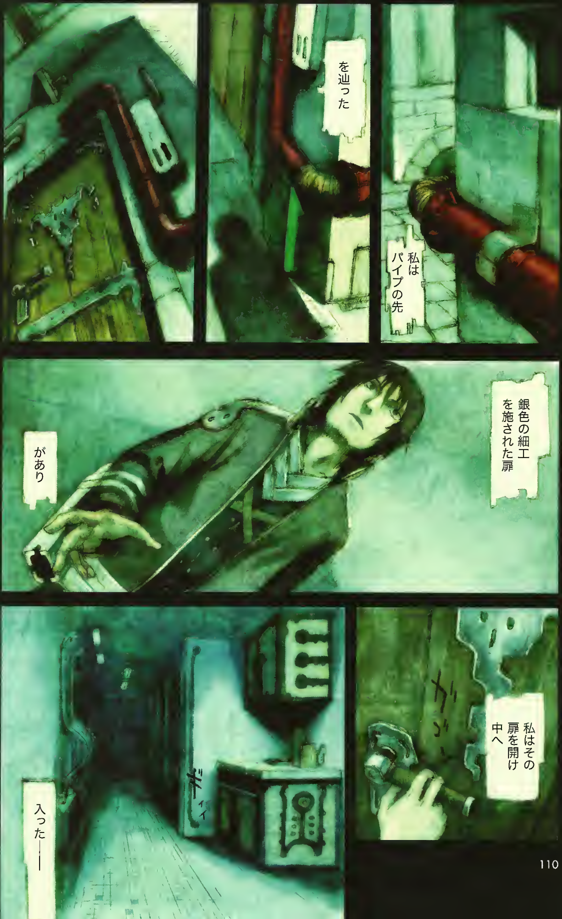

一旦戻った方が――
駄目だ！
動けるうちは進む
出口が見つからなければどのみち終わりだ
はぁ
はぁ
くっ
ドッ

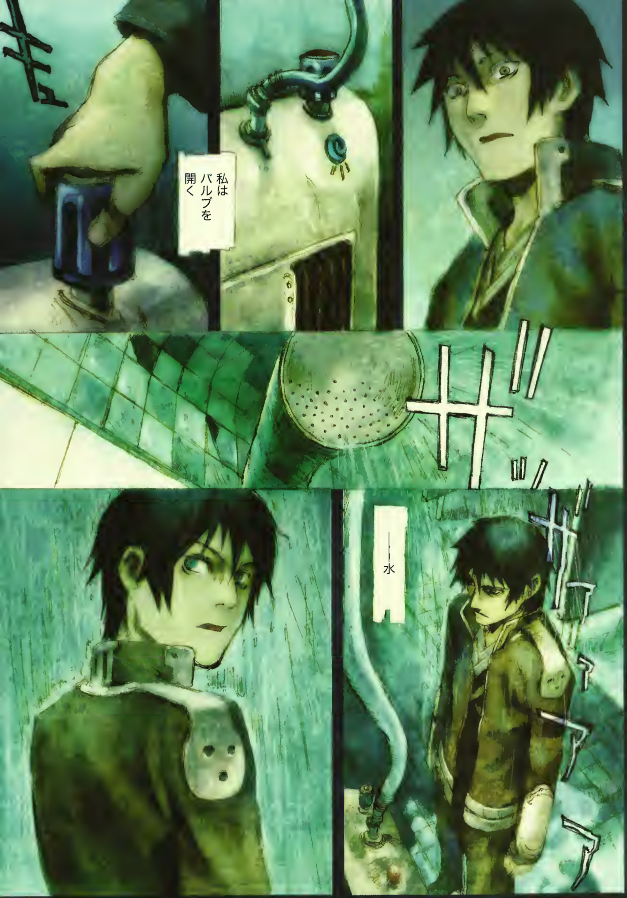

ゼウム!!
ゴゴゴゴ
――このパイプ………
中に………何か………
ゴボッ
離れてろ
駄目よ!!
汚水や高圧のガスかもしれない!
ガッ
ヨロ…
待ってて!
パイプの先を辿ってみる
う……
う……ぐ……

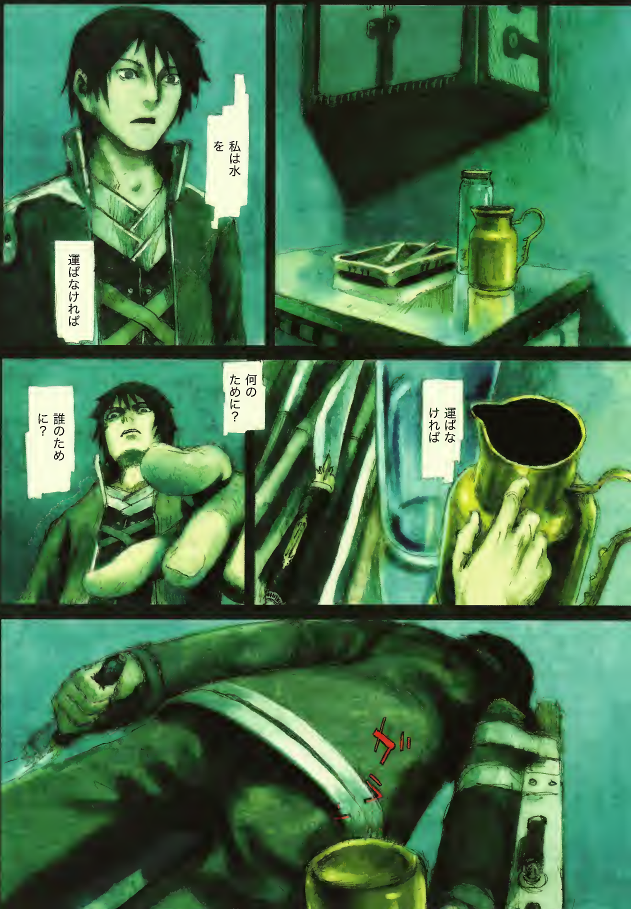

ガハッ
ズルズル
ドッ
喉が……焼けるようだ
これは……脱水症状なんかじゃ……
う……
あ……
ド

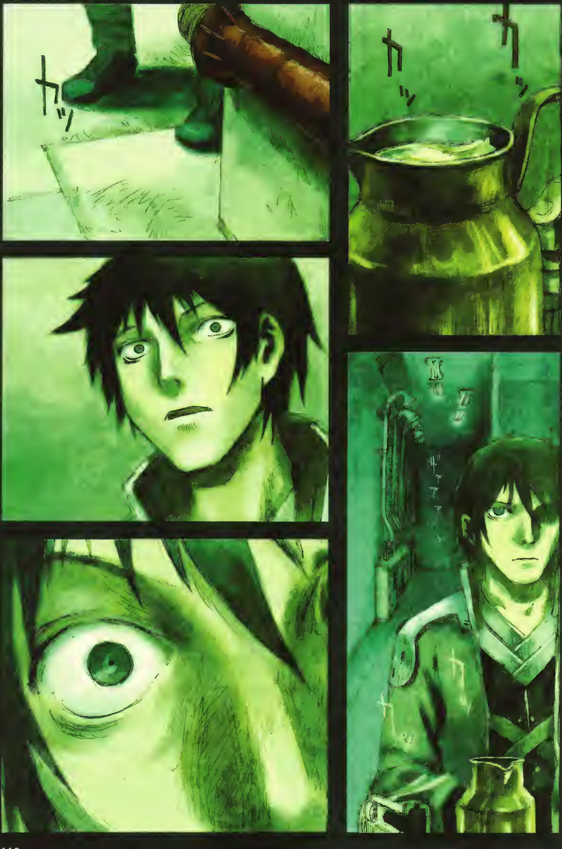


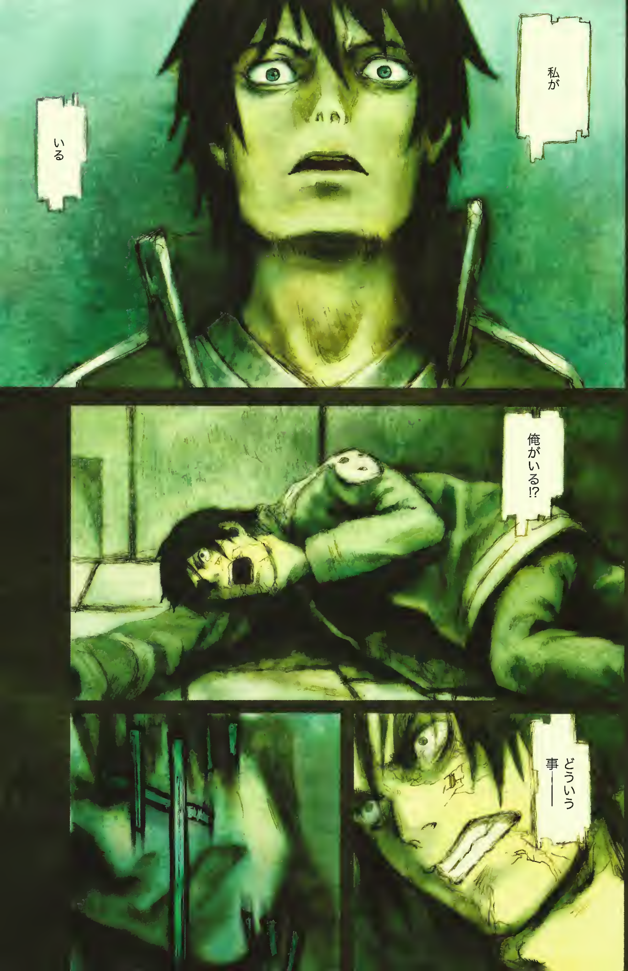
第五話

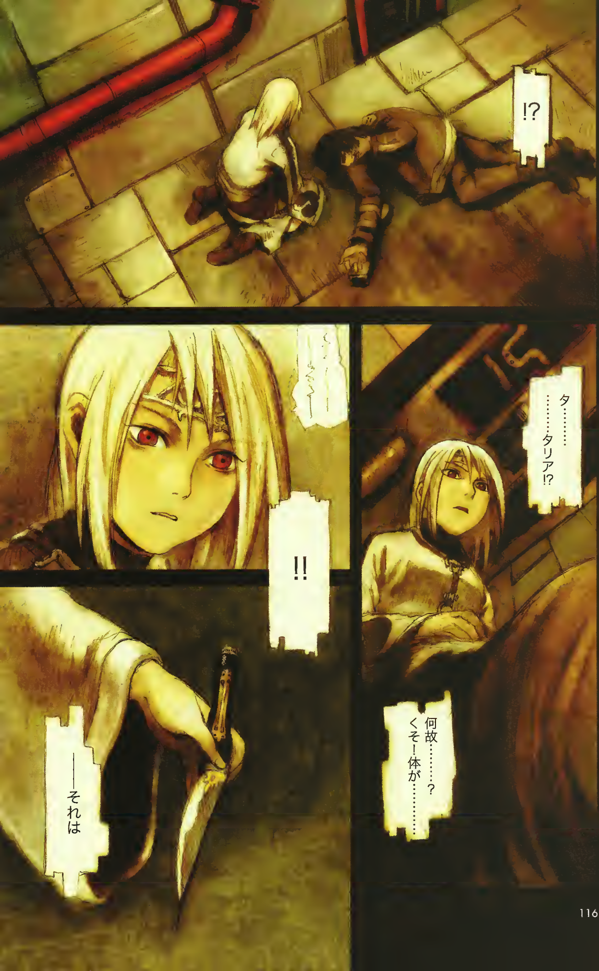

私は
パイプの先
を辿った
銀色の細工
を施された扉
があり
私はその
扉を開け
中へ
ガゴ
入った――
ギィイ

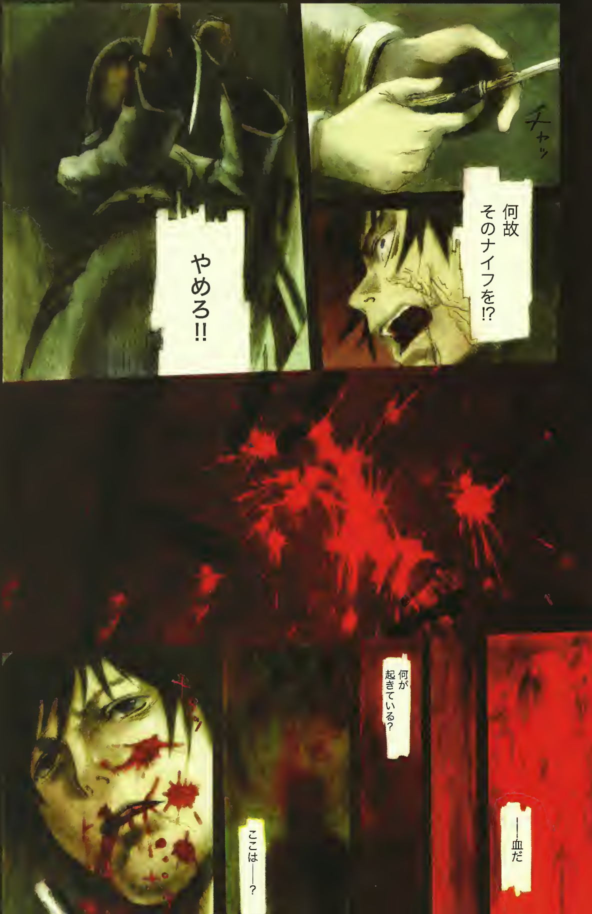

私は
バルブを
開く
キュ
ザーッ
——水
ザァァァ

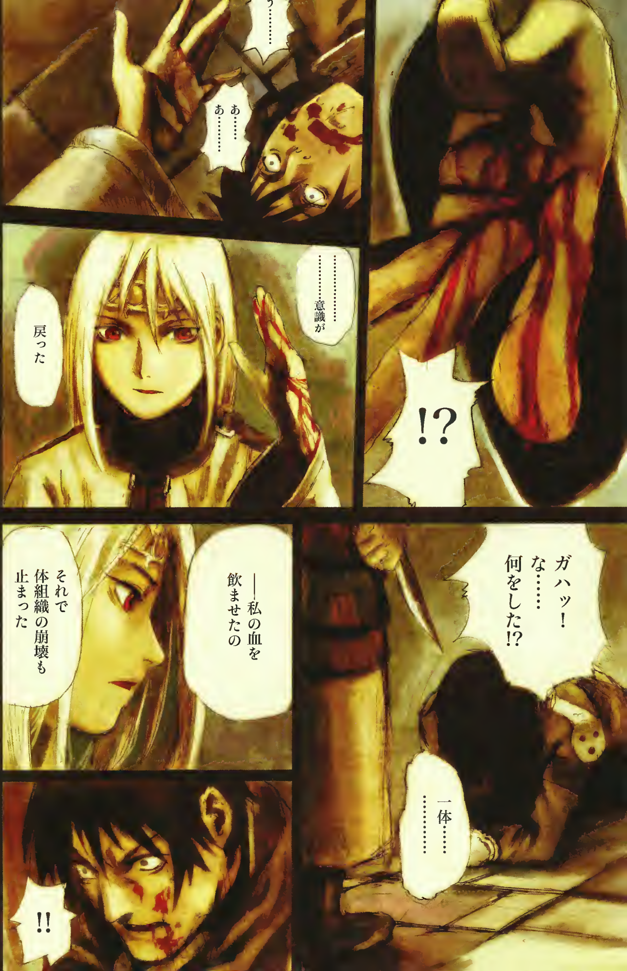

私は水を
運ばなければ
運ばなければ
何のために？
誰のために？
ガシ

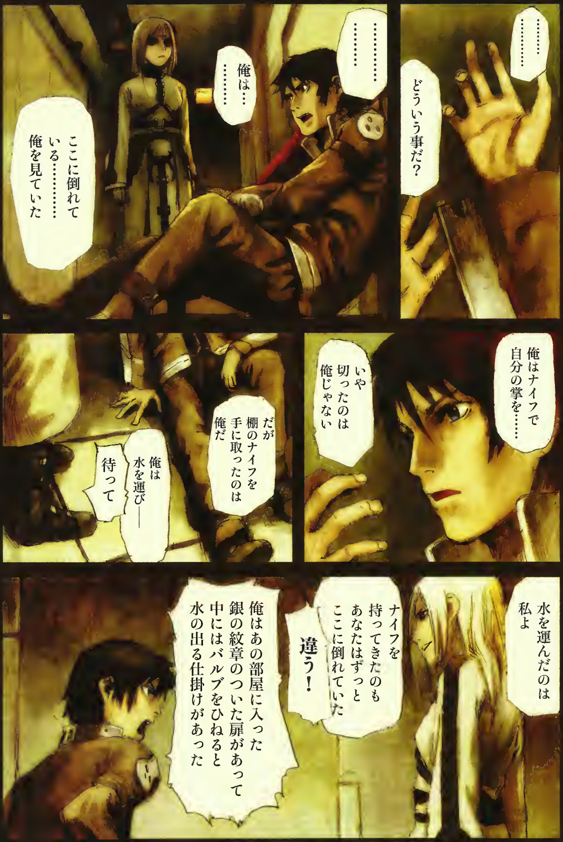

カッ
カッ
カッ
ザァァァァ
カッ
カッ

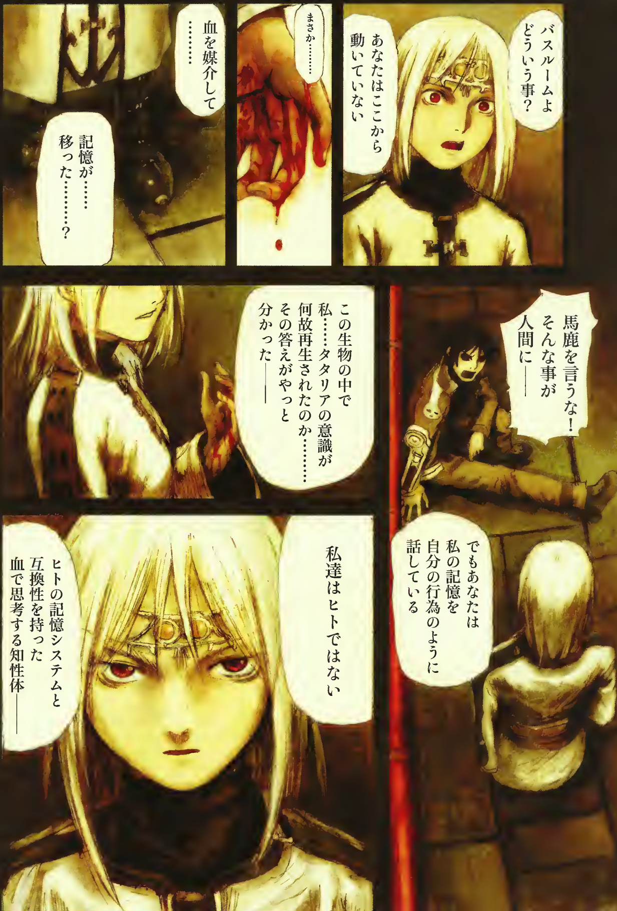

私が
いる
俺がいる!?
どういう事——


!?
タ……
……タリア!?
く……
ふふ……
!!
何故……?
くそ!体が………
――それは

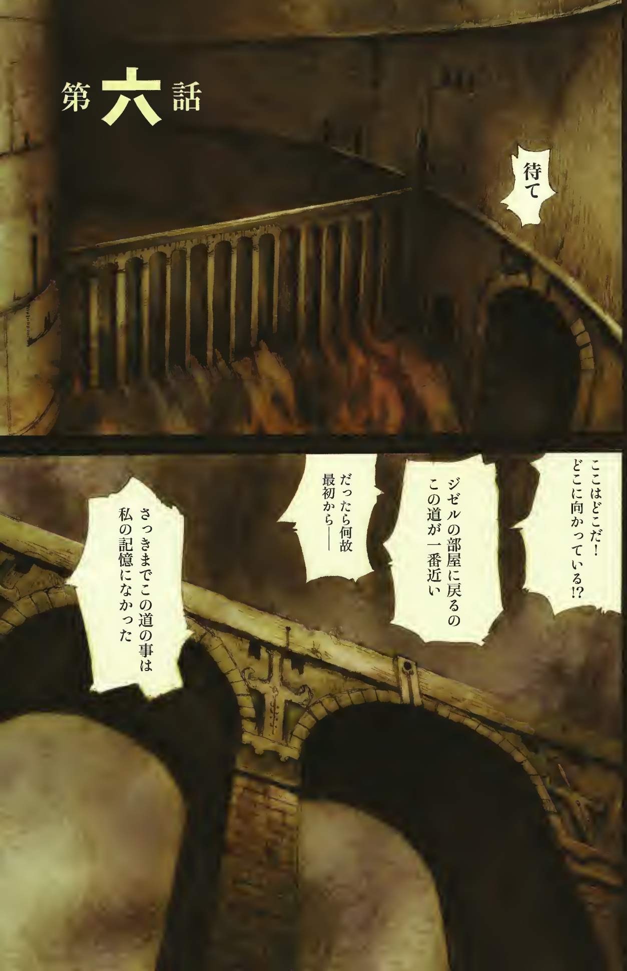

チャッ
何故そのナイフを!?
やめろ!!
―血だ
何が起きている?
ここは――?

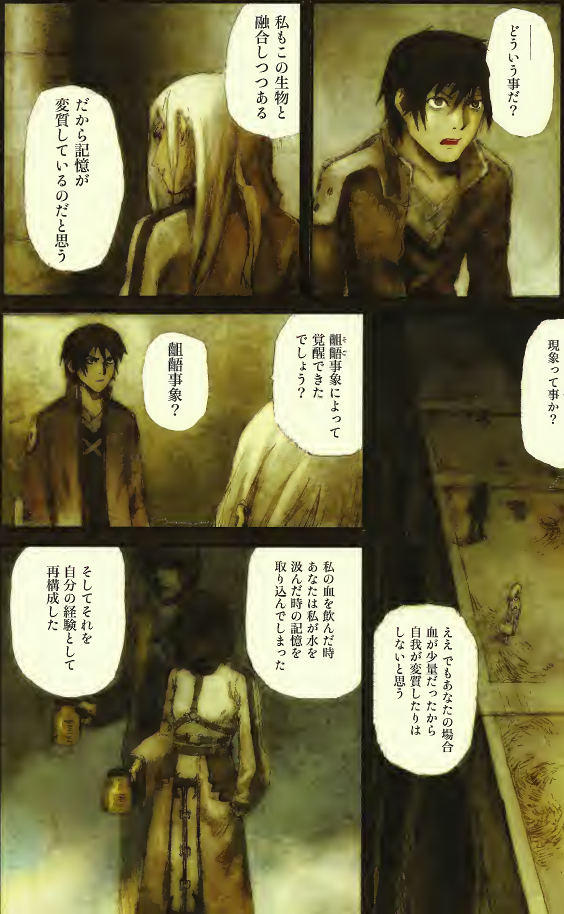

!?
う……
あ……あ……
……意識が
戻った
ガハッ！
な……何をした!?
一体……
──私の血を飲ませたの
それで体組織の崩壊も止まった
!!

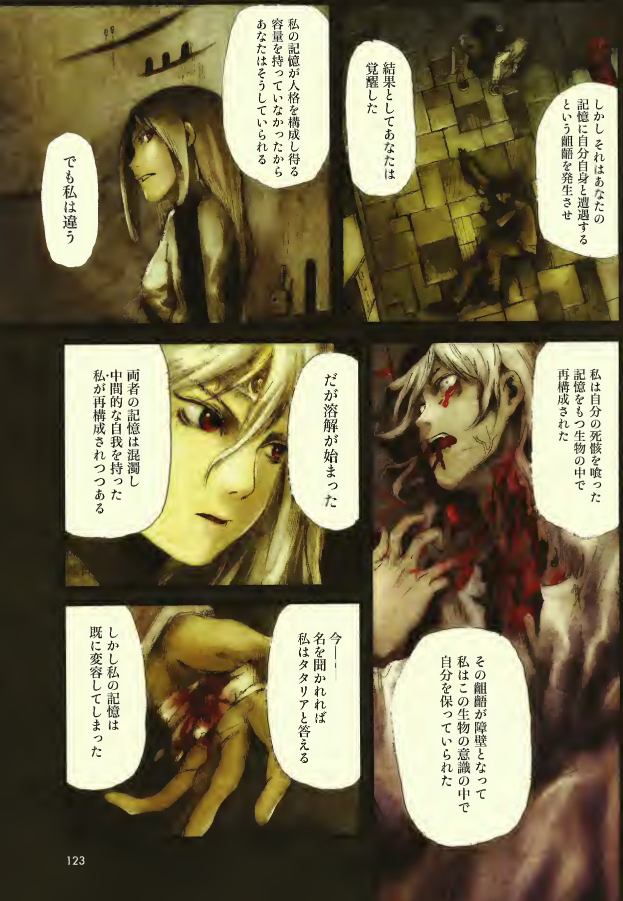

…………
どういう事だ？
…………
…………
俺は…
…………
ここに倒れている…………俺を見ていた
俺はナイフで自分の掌を……
いや切ったのは俺じゃない
だが棚のナイフを手に取ったのは俺だ
俺は水を運び——
待って
水を運んだのは私よ
ナイフを持ってきたのもあなたはずっとここに倒れていた
違う！
俺はあの部屋に入った銀の紋章のついた扉があって中にはバルブをひねると水の出る仕掛けがあった

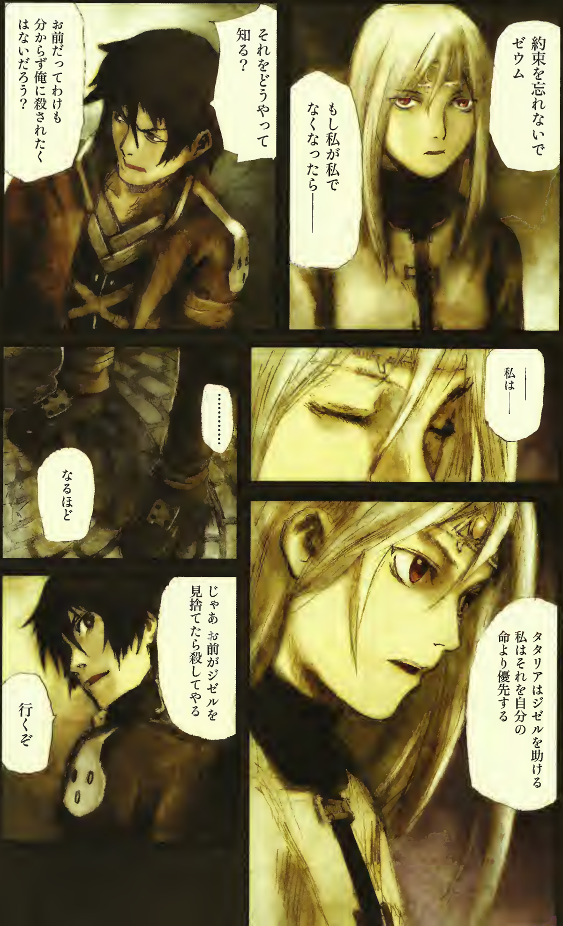

バスルームよ どういう事？
あなたはここから 動いていない
まさか……
血を媒介して ……
記憶が…… 移った……？
馬鹿を言うな！ そんな事が 人間に――
でもあなたは 私の記憶を 自分の行為のように 話している
この生物の中で 私……タタリアの意識が 何故再生されたのか…… その答えがやっと 分かった――
私達はヒトではない
ヒトの記憶システムと 互換性を持った 血で思考する知性体――

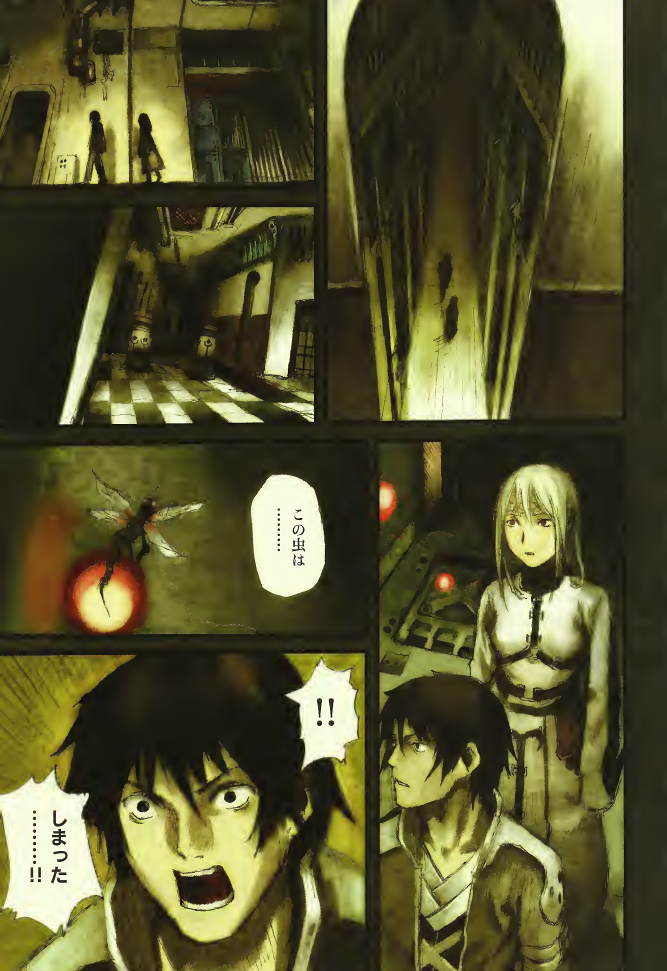
第六話

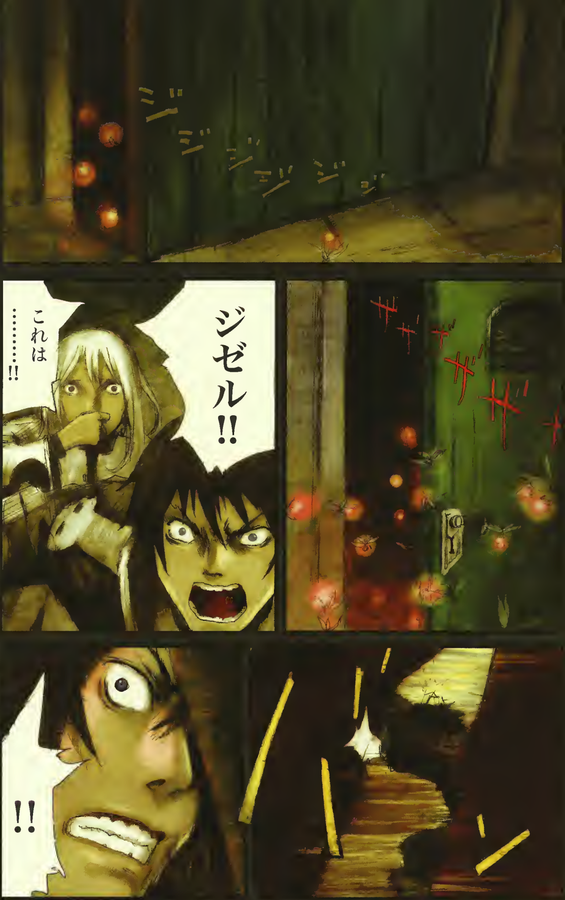

待て
ここはどこだ！どこに向かっている!?
ジゼルの部屋に戻るのこの道が一番近い
だったら何故最初から――
さっきまでこの道の事は私の記憶になかった

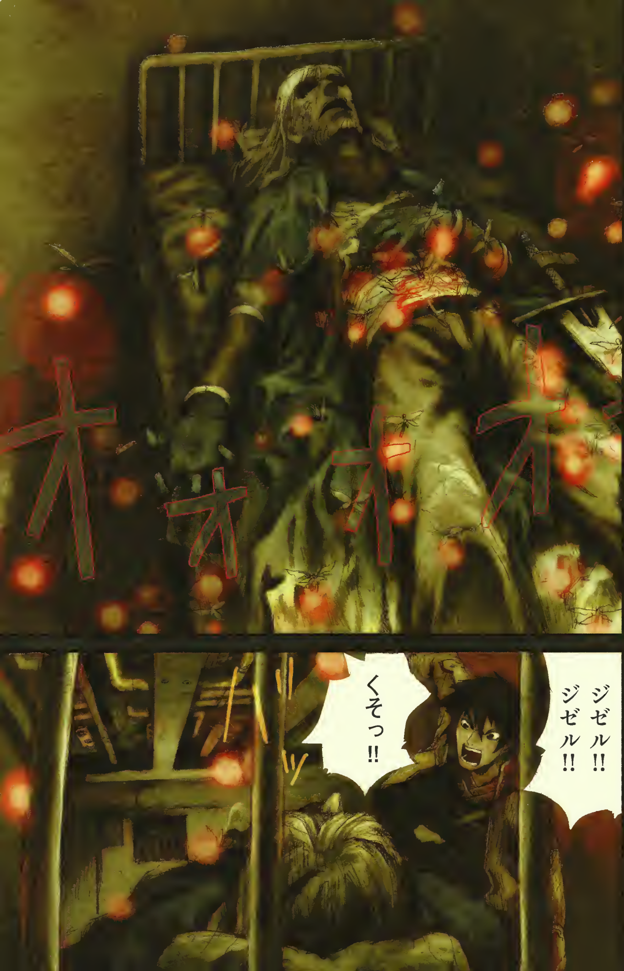

――どういう事だ？
私もこの生物と融合しつつある
だから記憶が変質しているのだと思う
さっきの俺と同じ現象って事か？
ええ でもあなたの場合 血が少量だったから 自我が変質したりはしないと思う
齟齬事象によって 覚醒できた でしょう？
齟齬事象？
私の血を飲んだ時 あなたは私が水を 汲んだ時の記憶を 取り込んでしまった
そしてそれを 自分の経験として 再構成した

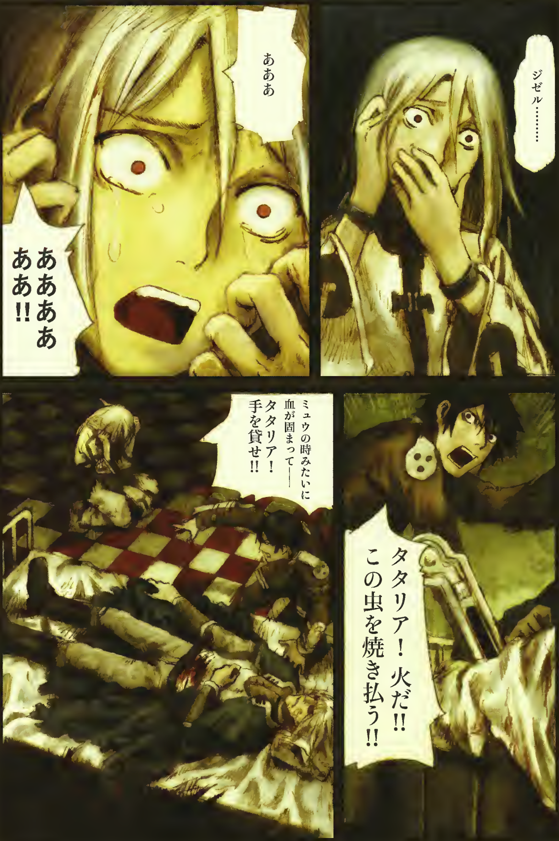

しかしそれはあなたの記憶に自分自身と遭遇するという齟齬を発生させ
結果としてあなたは覚醒した
私の記憶が人格を構成し得る容量を持っていなかったからあなたはそうしていられる
でも私は違う
私は自分の死骸を喰った記憶をもつ生物の中で再構成された
その齟齬が障壁となって私はこの生物の意識の中で自分を保っていられた
だが溶解が始まった
両者の記憶は混濁し中間的な自我を持った私が再構成されつつある
今――名を聞かれれば私はタタリアと答える
しかし私の記憶は既に変容してしまった

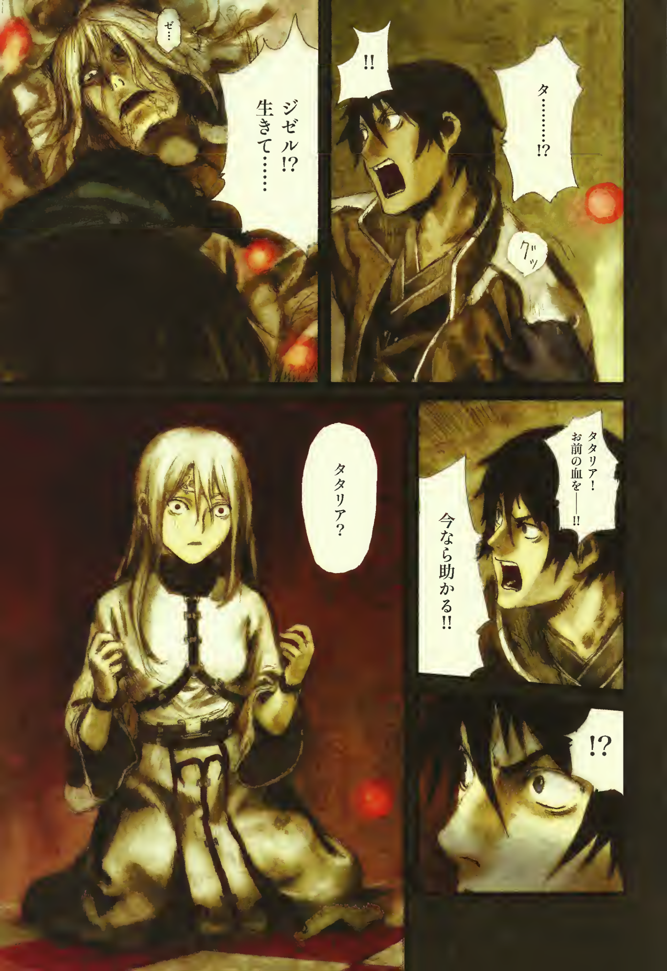

約束を忘れないで ゼウム
もし私が私で なくなったら――
それをどうやって 知る？
お前だってわけも 分からず俺に殺されたく はないだろう？
私は――
…………
なるほど
タタリアはジゼルを助ける 私はそれを自分の 命より優先する
じゃあ お前がジゼルを 見捨てたら殺してやる
行くぞ

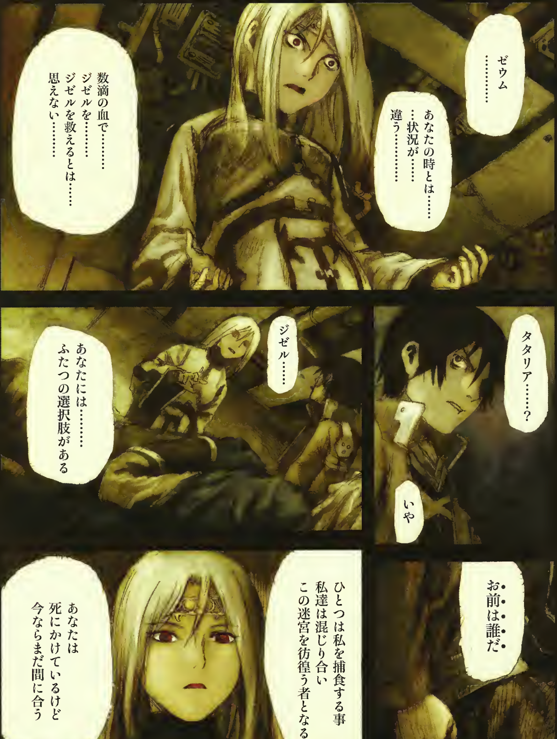

この虫は………
!!
しまった………!!

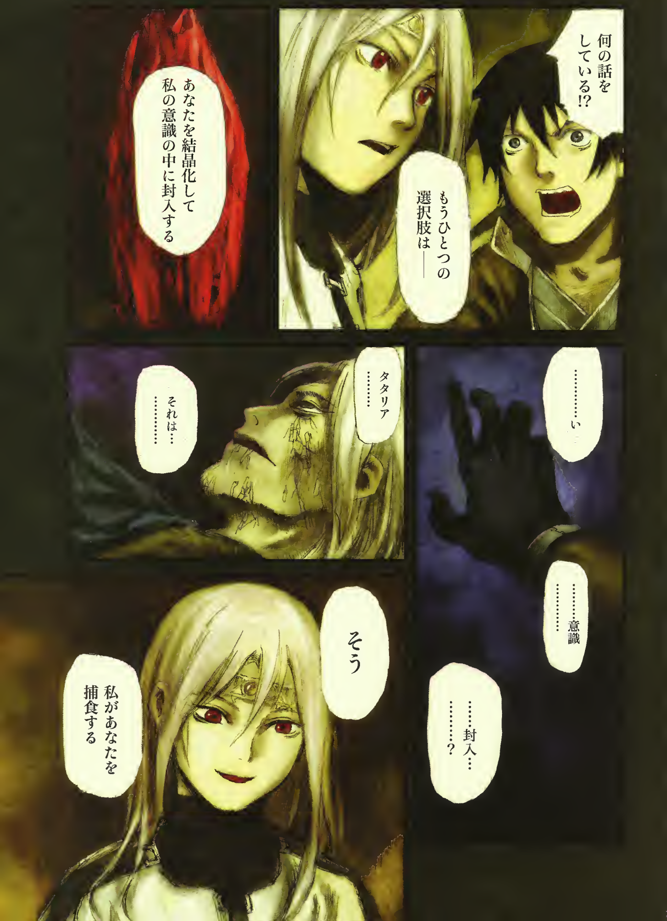

ジジジジジジ
ザザザザザ
ジゼル!!
これは………!!
!!

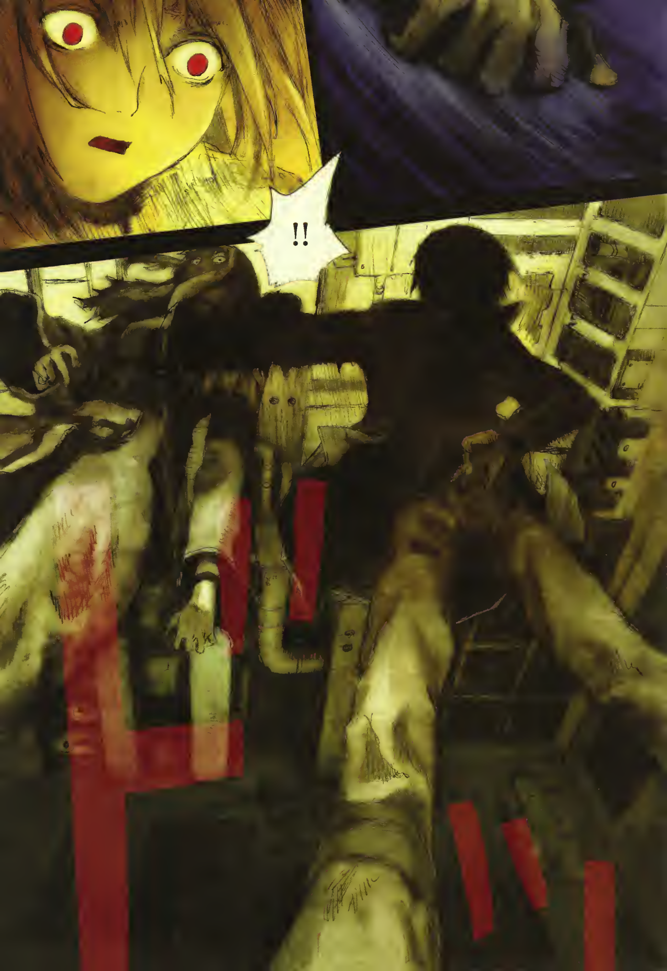

オォォオ
ジゼル!!
ジゼル!!
くそっ!!
バッ

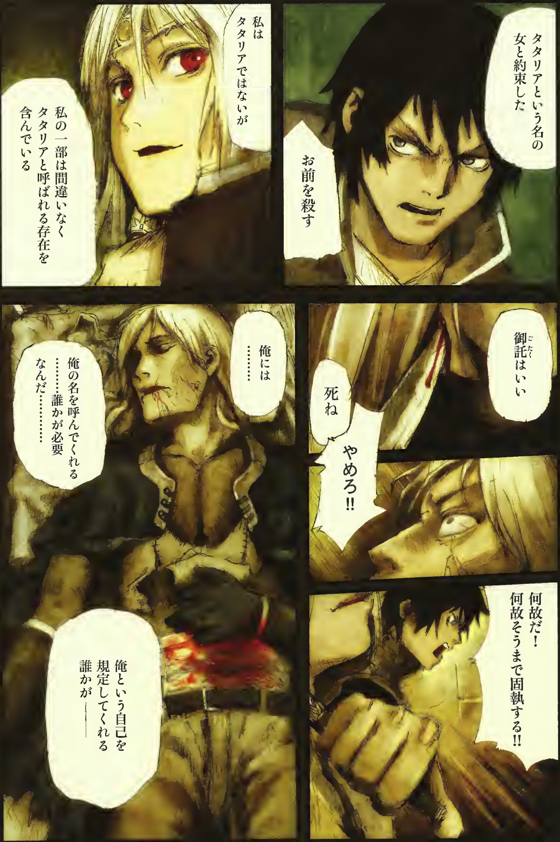

ジゼル………
あああ
ああああああ!!
タタリア！火だ!!この虫を焼き払う!!
ミュウの時みたいに血が固まって――タタリア！手を貸せ!!

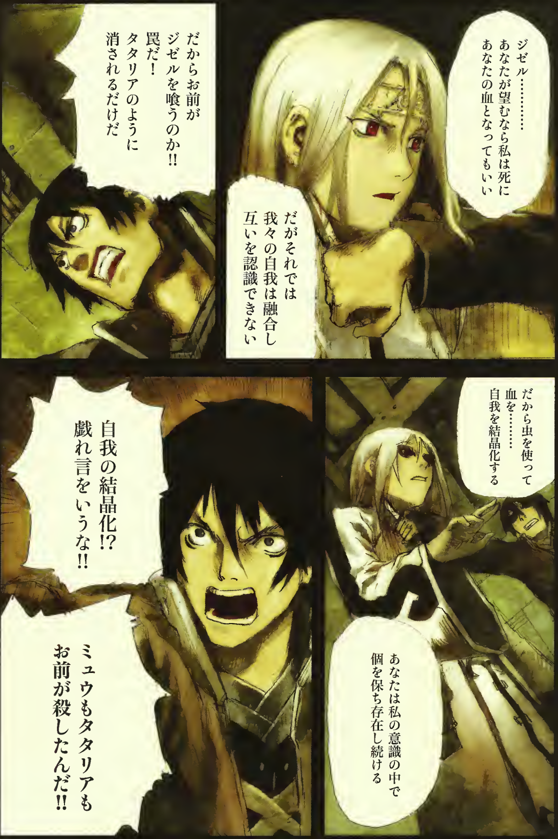

タ……!?
!!
グッ
ゼ…
ジゼル!? 生きて……
タタリア! お前の血を――!!
今なら助かる!!
タタリア?
!?

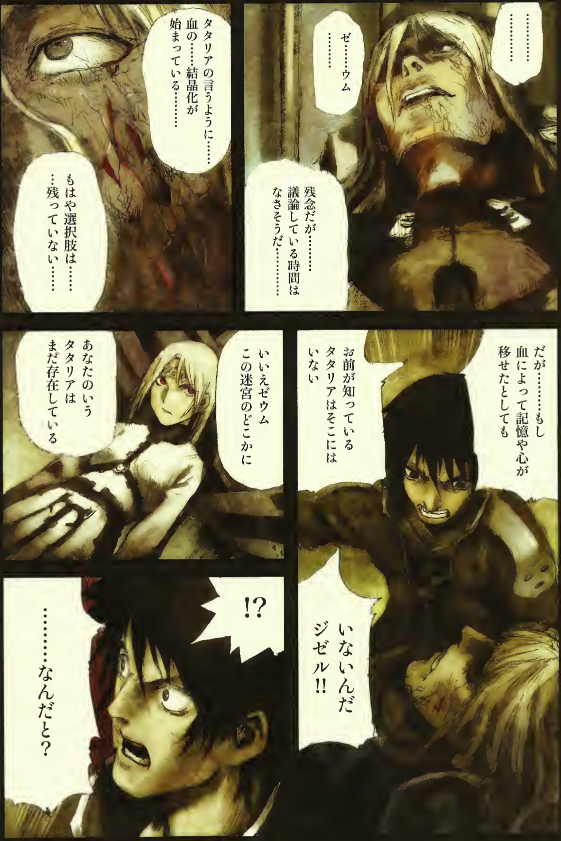

ゼウム…………
あなたの時とは……
…状況が……
違う…………
数滴の血で……
ジゼルを……
ジゼルを救えるとは……
思えない……
タタリア……？
いや
ジゼル……
あなたには……
ふたつの選択肢がある
お・前・は・誰・だ
ひとつは私を捕食する事
私達は混じり合い
この迷宮を彷徨う者となる
あなたは
死にかけているけど
今ならまだ間に合う

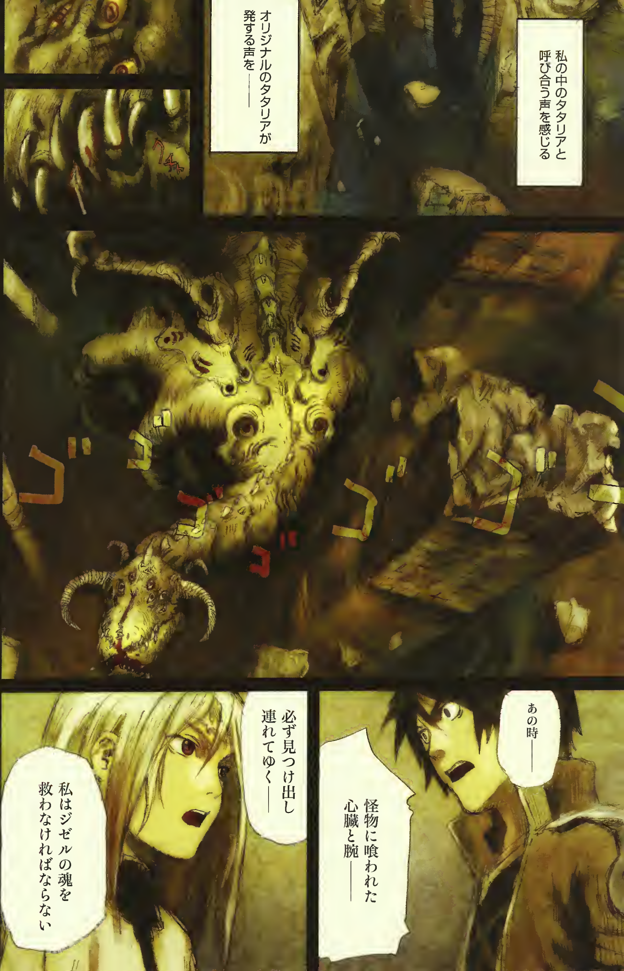

何の話をしている!?
もうひとつの選択肢は――
あなたを結晶化して私の意識の中に封入する
…………い
…………意識…………
……封入…………？
タタリア………
それは…………
そう
私があなたを捕食する

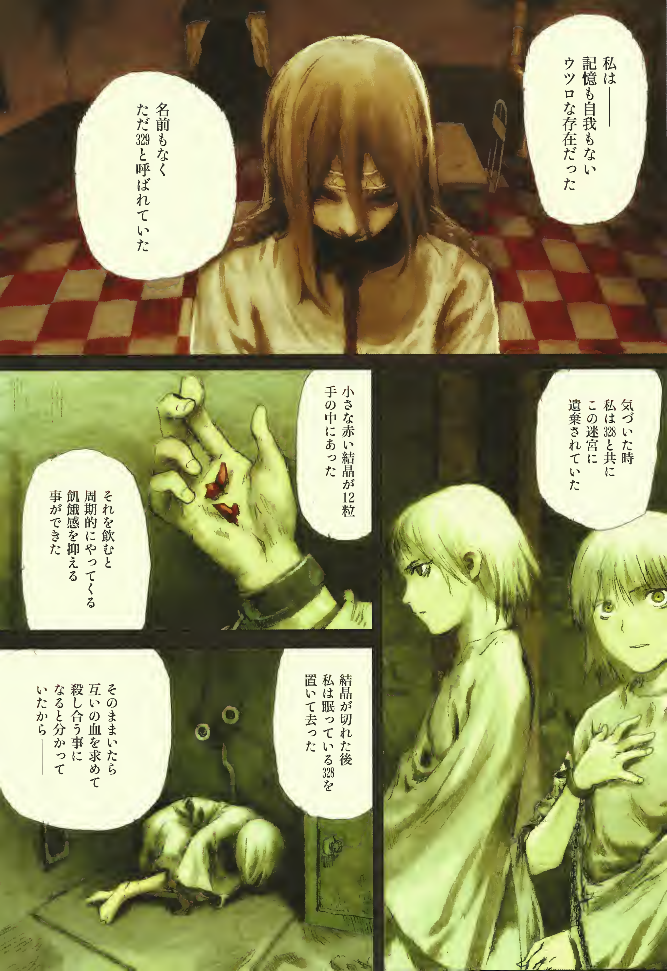


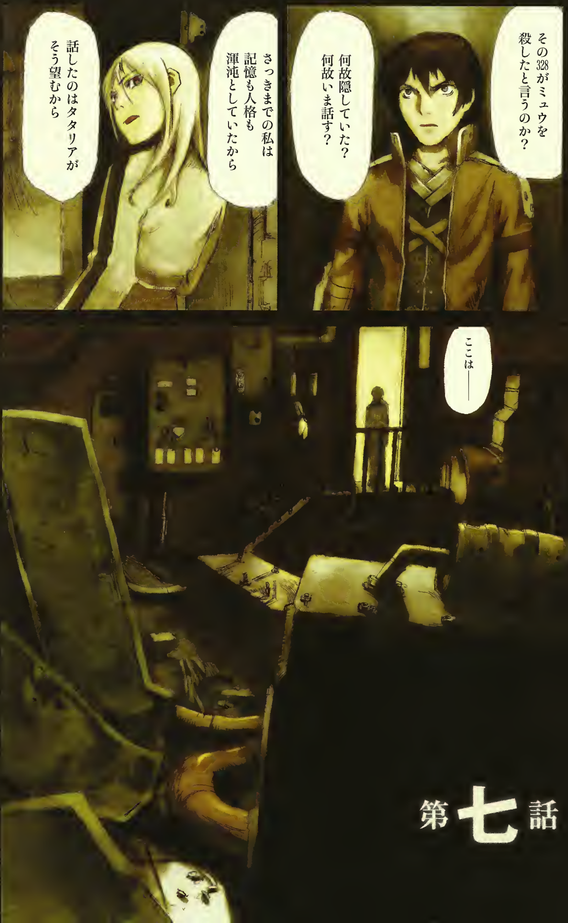

タタリアという名の女と約束した
お前を殺す
私はタタリアではないが
私の一部は間違いなくタタリアと呼ばれる存在を含んでいる
御託はいい
死ね
やめろ‼
何故だ！何故そうまで固執する‼
俺には……
俺の名を呼んでくれる……誰かが必要なんだ…………
俺という自己を規定してくれる誰かが――


ジゼル…………
あなたが望むなら私は死に
あなたの血となってもいい
だがそれでは
我々の自我は融合し
互いを認識できない
だからお前が
ジゼルを喰うのか!!
罠だ!
タタリアのように
消されるだけだ
だから虫を使って
血を……
自我を結晶化する
あなたは私の意識の中で
個を保ち存在し続ける
自我の結晶化!?
戯れ言をいうな!!
ミュウもタタリアも
お前が殺したんだ!!

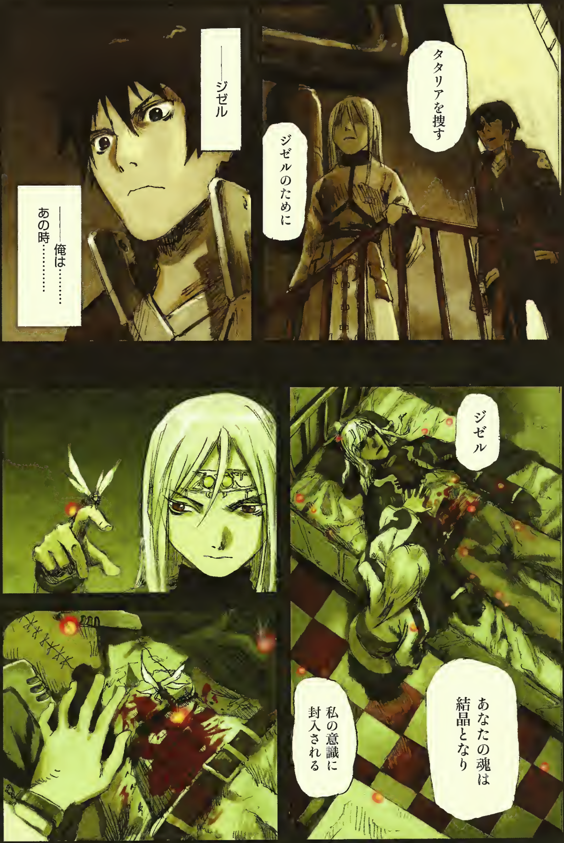

…………
ゼ……ウム ………
残念だが……… 議論している時間は なさそうだ………
タタリアの言うように……… 血の……結晶化が 始まっている………
もはや選択肢は…… …残っていない……
だが………もし 血によって記憶や心が 移せたとしても
お前が知っている タタリアはそこには いない
いないんだ ジゼル!!
いいえゼウム この迷宮のどこかに
あなたのいう タタリアは まだ存在している
!?
………なんだと?

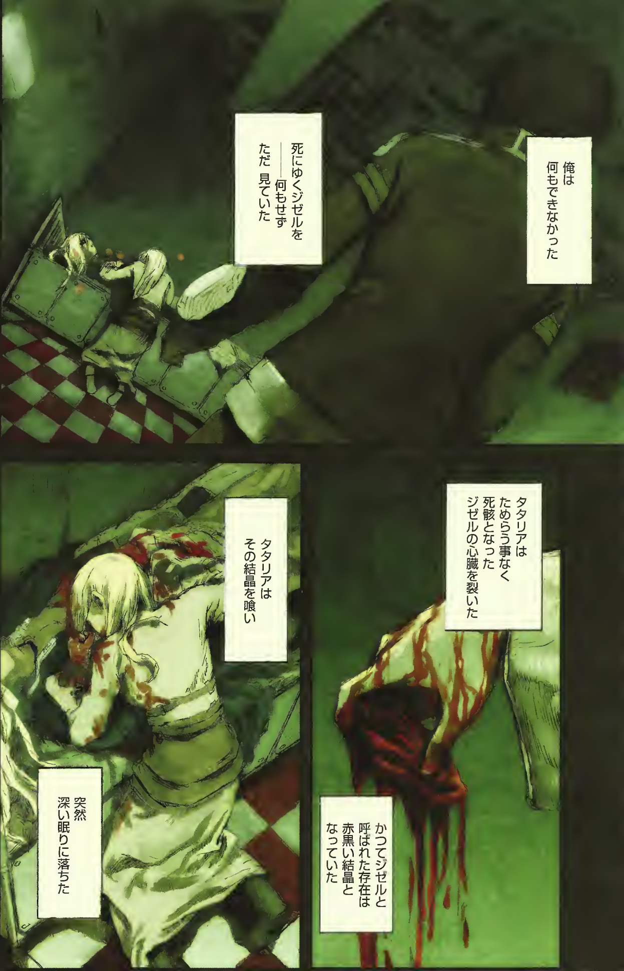

私の中のタタリアと呼び合う声を感じる
オリジナルのタタリアが発する声を——
ゴゴゴゴゴゴゴ
あの時——
怪物に喰われた心臓と腕——
必ず見つけ出し連れてゆく——
私はジゼルの魂を救わなければならない

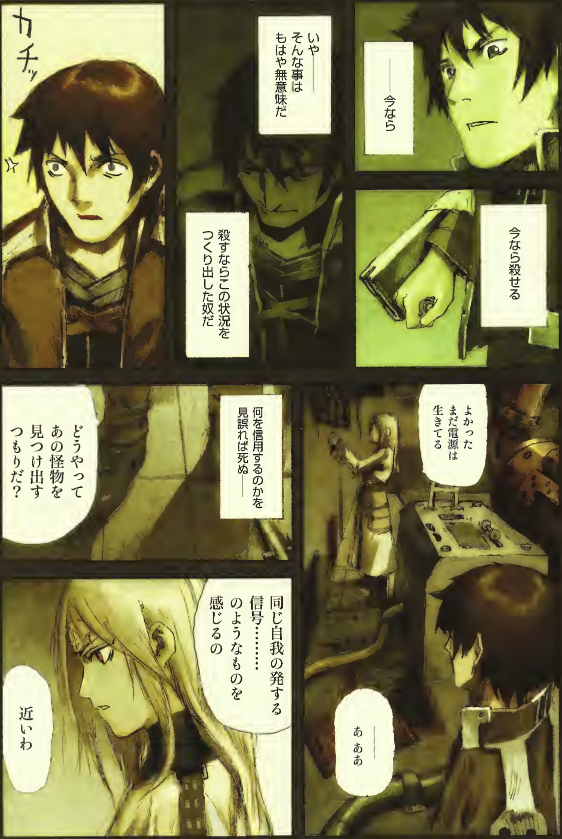

私は——記憶も自我もないウツロな存在だった
名前もなく ただ329と呼ばれていた
気づいた時 私は328と共に この迷宮に 遺棄されていた
小さな赤い結晶が12粒 手の中にあった
それを飲むと 周期的にやってくる 飢餓感を抑える 事ができた
結晶が切れた後 私は眠っている328を 置いて去った
そのままいたら 互いの血を求めて 殺し合う事に なると分かって いたから——

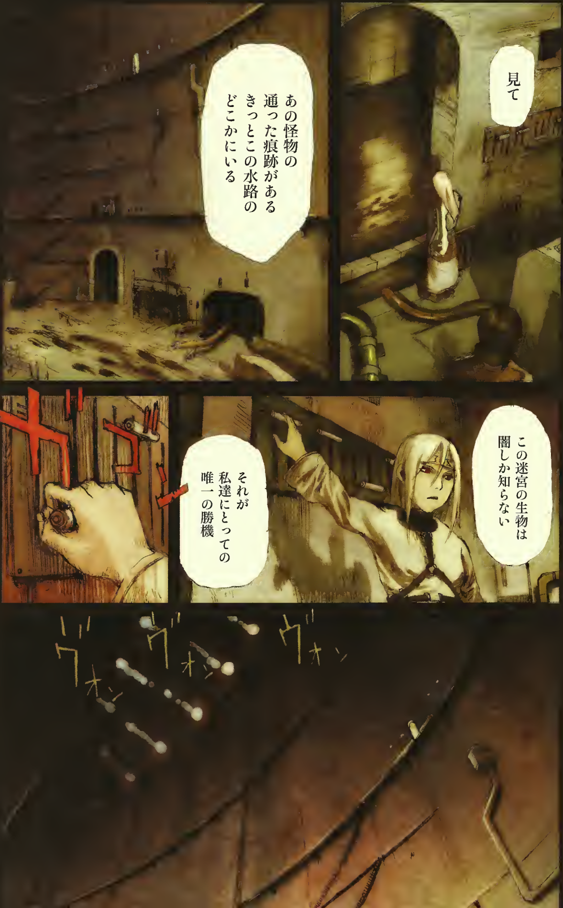

その328がミュウを殺したと言うのか？
何故隠していた？何故いま話す？
さっきまでの私は記憶も人格も渾沌としていたから
話したのはタタリアがそう望むから
ここは——

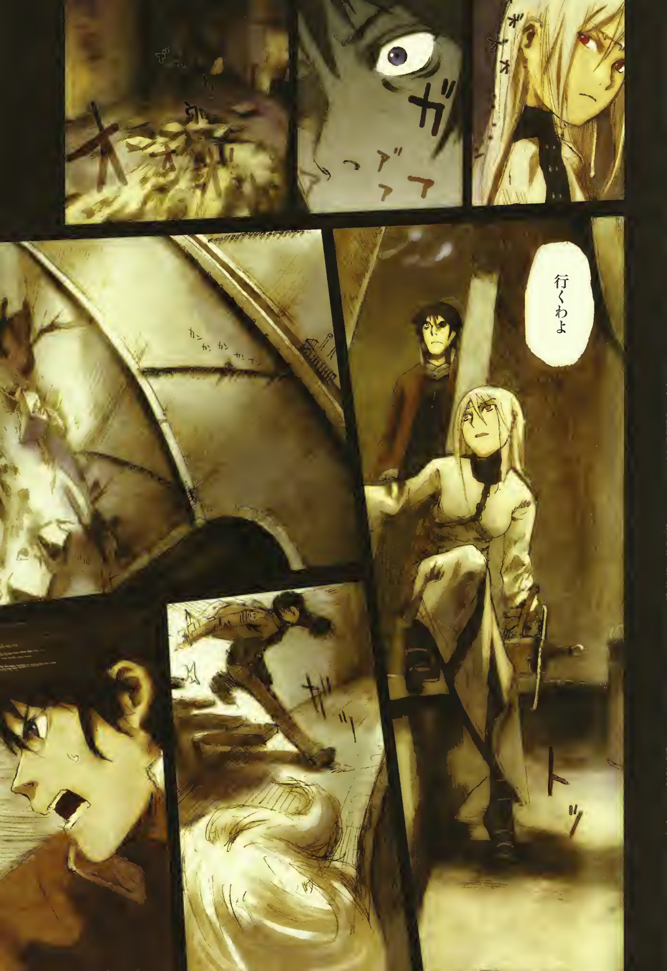
第七話

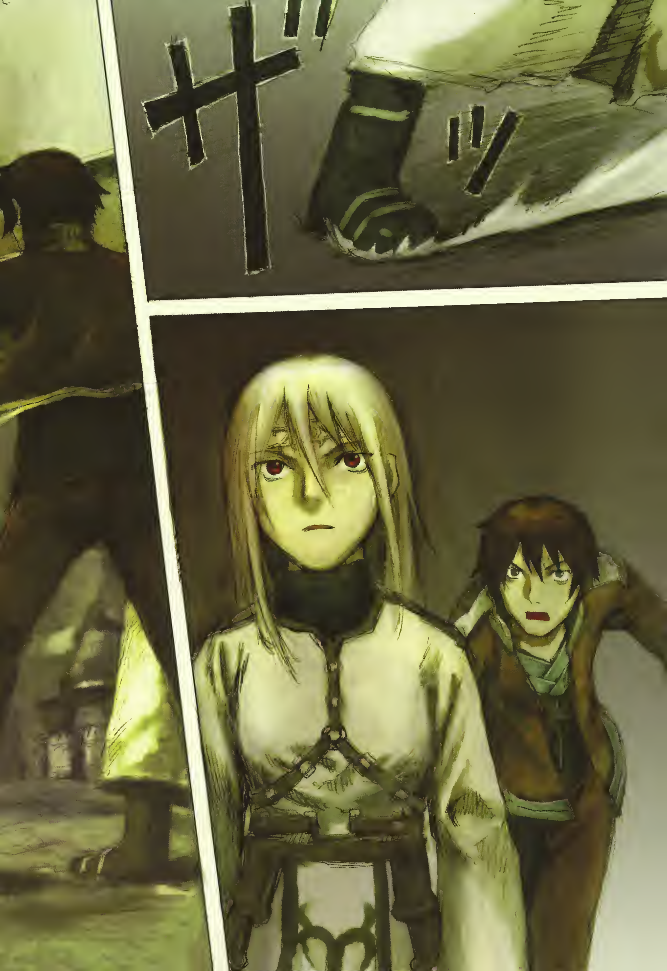

タタリアを捜す
ジゼルのために
——ジゼル
——俺は………
あの時………
ジゼル
あなたの魂は結晶となり
私の意識に封入される

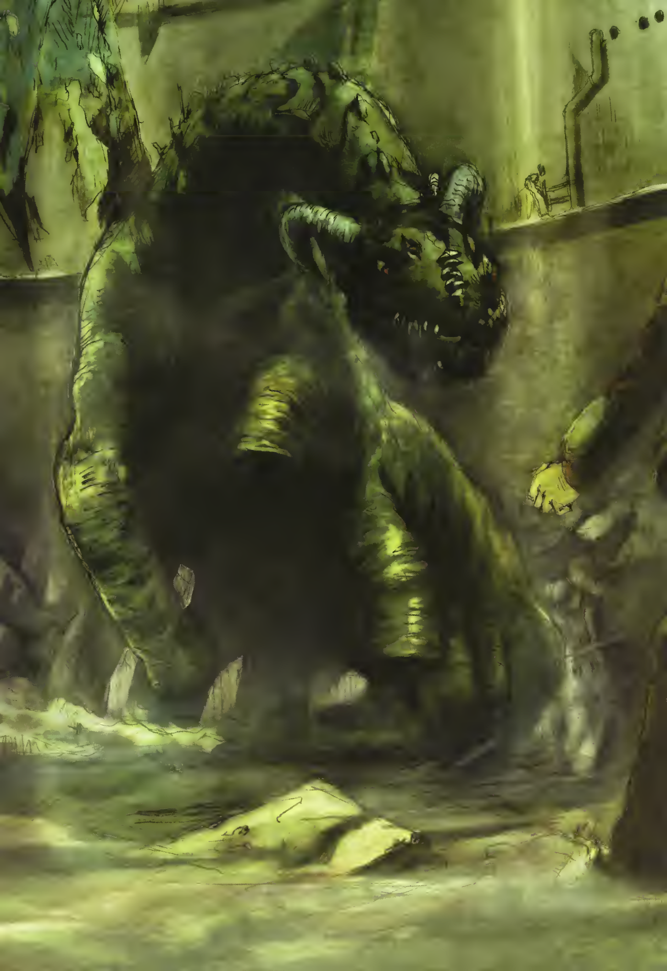

俺は 何もできなかった
死にゆくジゼルを ——何もせず ただ 見ていた
タタリアは ためらう事なく 死骸となった ジゼルの心臓を裂いた
かつてジゼルと 呼ばれた存在は 赤黒い結晶と なっていた
タタリアは その結晶を喰い
突然 深い眠りに落ちた

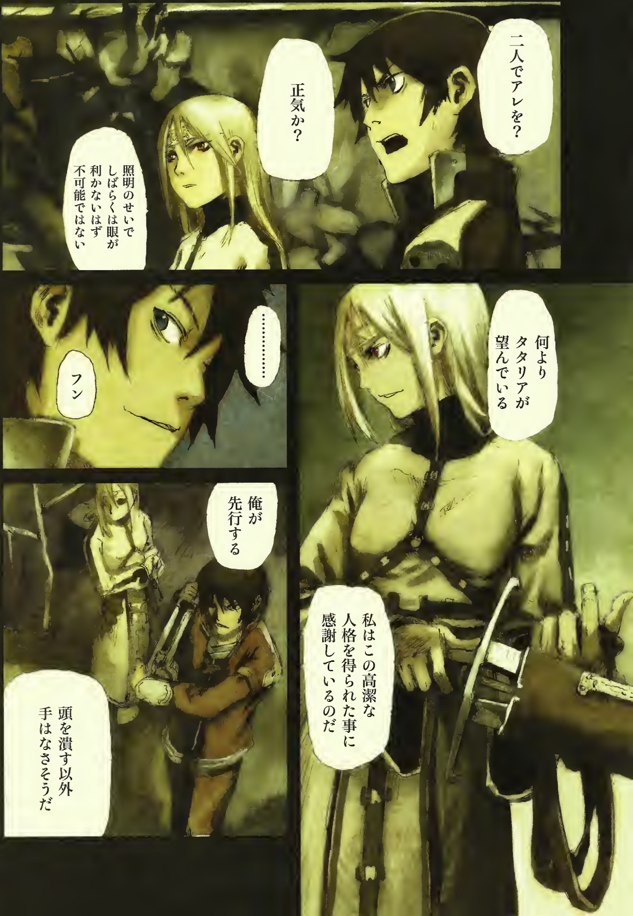

──今なら
今なら殺せる
いや── そんな事は もはや無意味だ
殺すならこの状況を つくり出した奴だ
カチッ
よかった まだ電源は 生きてる
──ああ
何を信用するのかを 見誤れば死ぬ──
どうやって あの怪物を 見つけ出す つもりだ？
同じ自我の発する 信号……… のようなものを 感じるの
近いわ

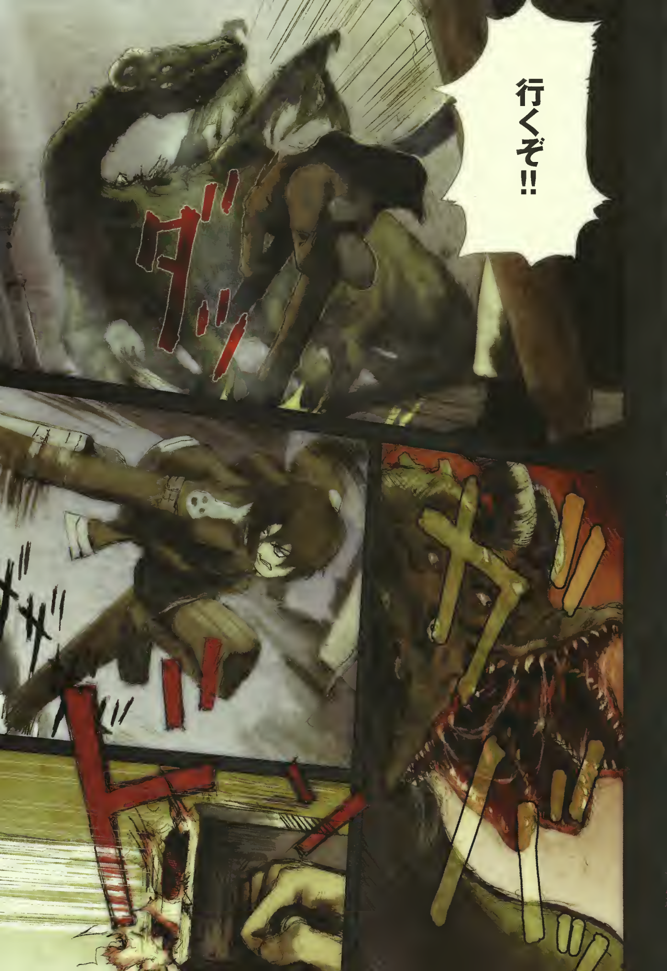

見て
あの怪物の通った痕跡がある きっとこの水路のどこかにいる
この迷宮の生物は闇しか知らない
それが私達にとっての唯一の勝機
ガゴン
ヴォン
ヴォン
ヴォン

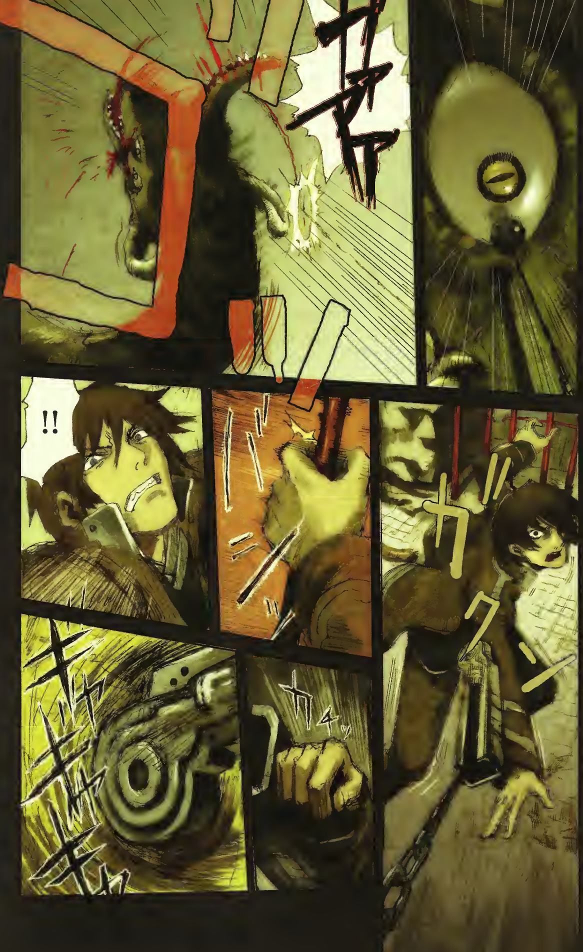

ボオオオ
ガ
アアア
ズ
オオオォ
行くわよ
カン カン カン カン カン
トッ
ガッ

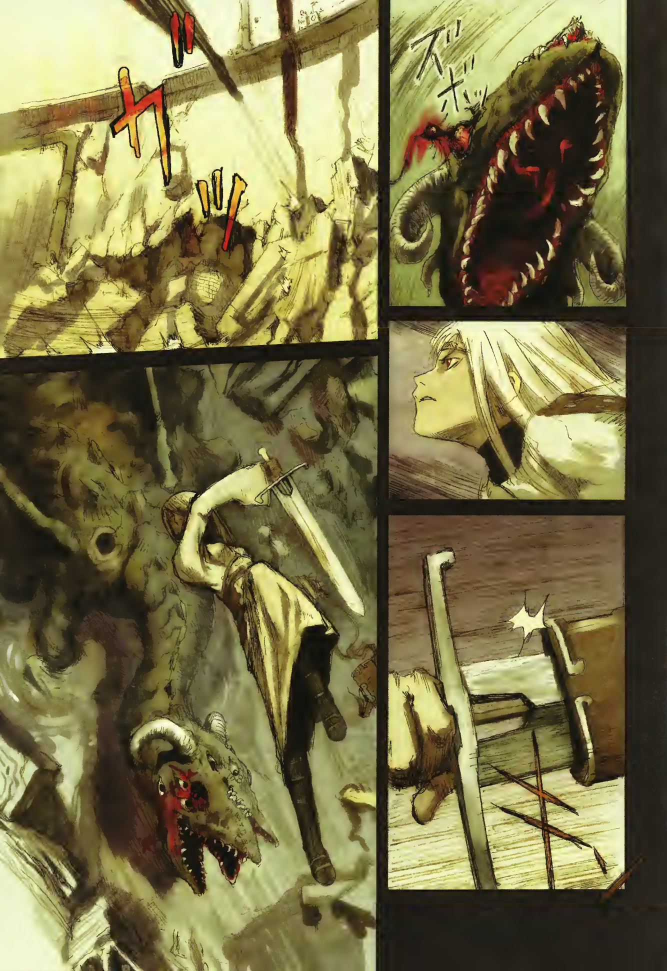

ギッ

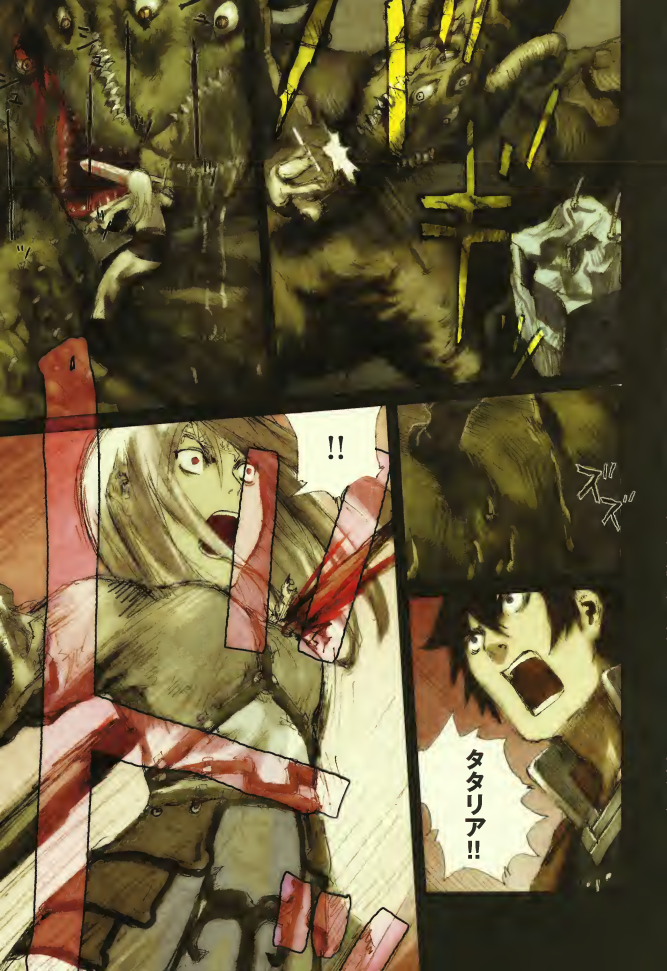


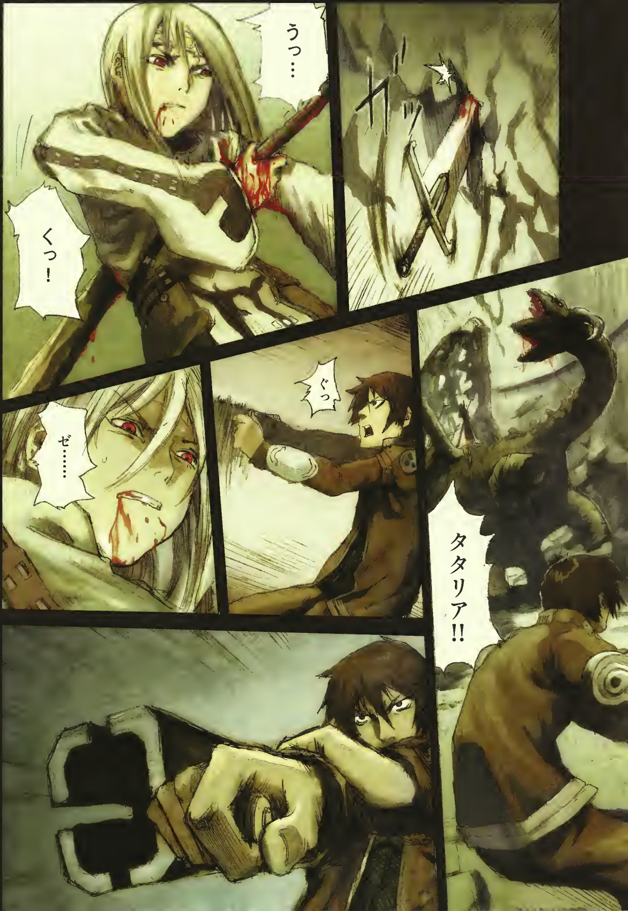

二人でアレを？
正気か？
照明のせいでしばらくは眼が利かないはず不可能ではない
何よりタタリアが望んでいる
私はこの高潔な人格を得られた事に感謝しているのだ
…………
フン
俺が先行する
頭を潰す以外手はなさそうだ

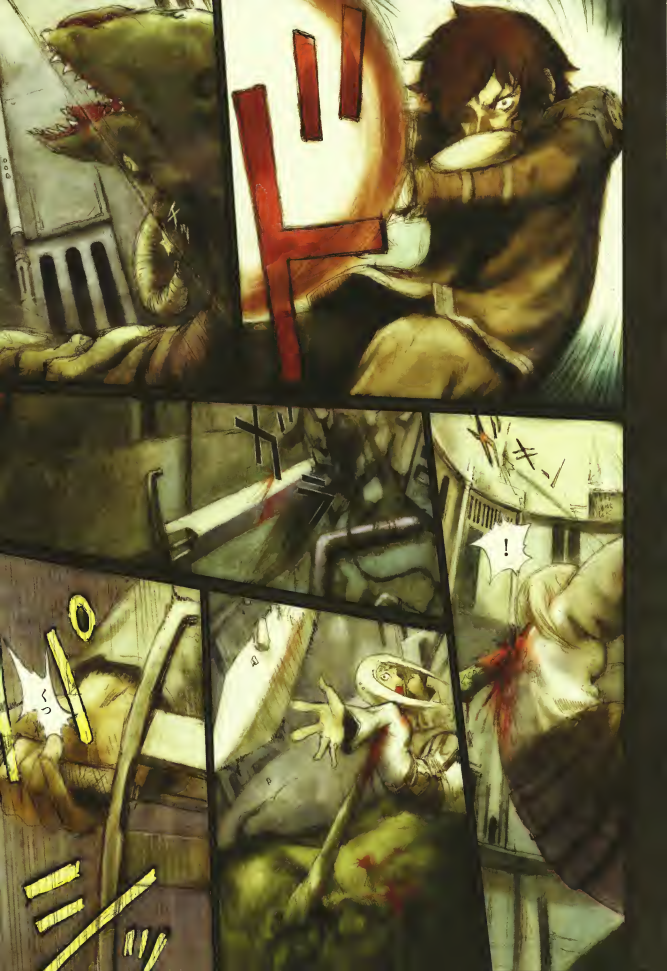

行くぞ!!
ダッ
ガバッ
ザザ
ドッ


ガァァッ
!!
ガクン
キャキャキャ
カムッ

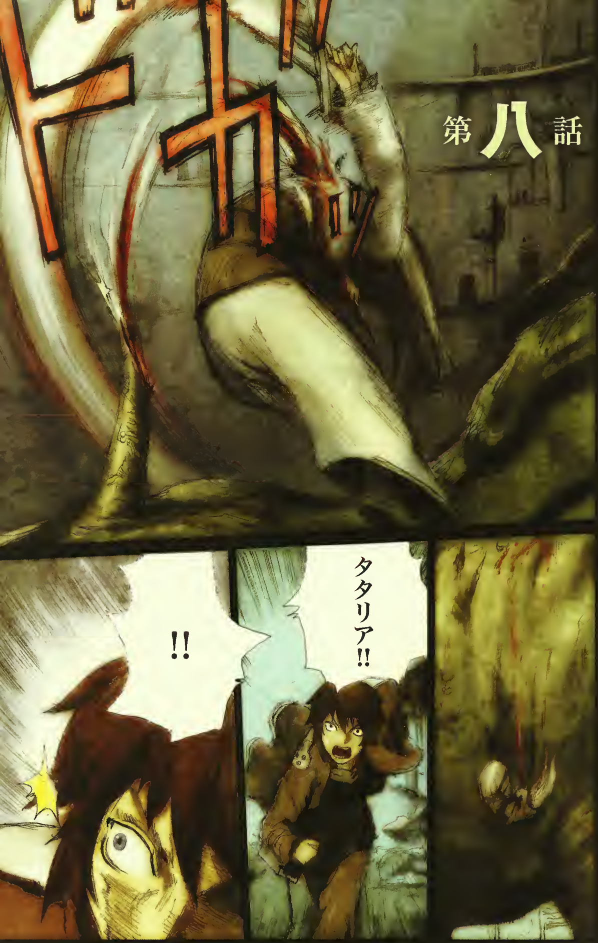

ズボッ
ガッ

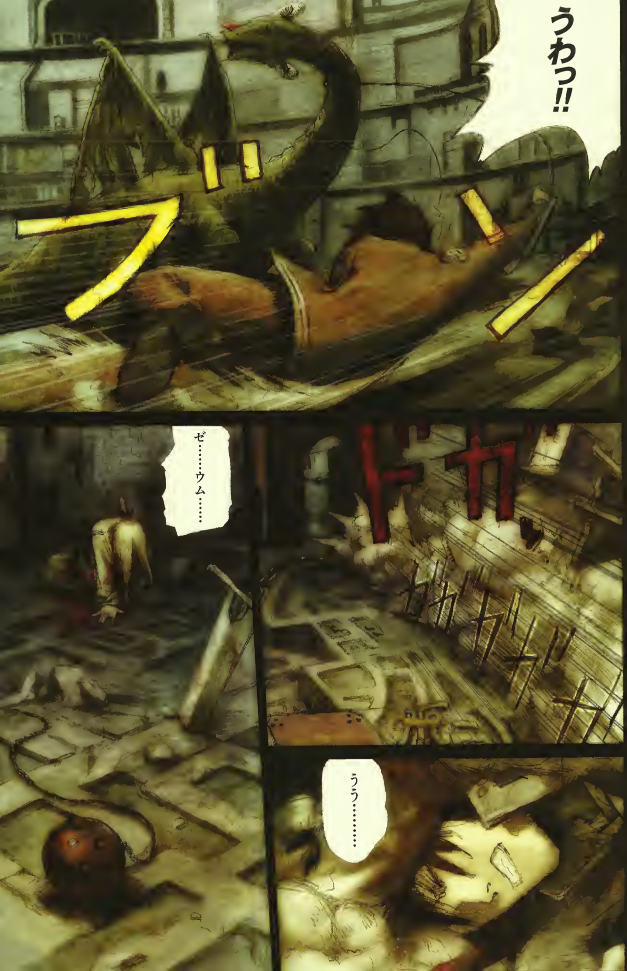

シュ
ズズ
!!
タタリア!!

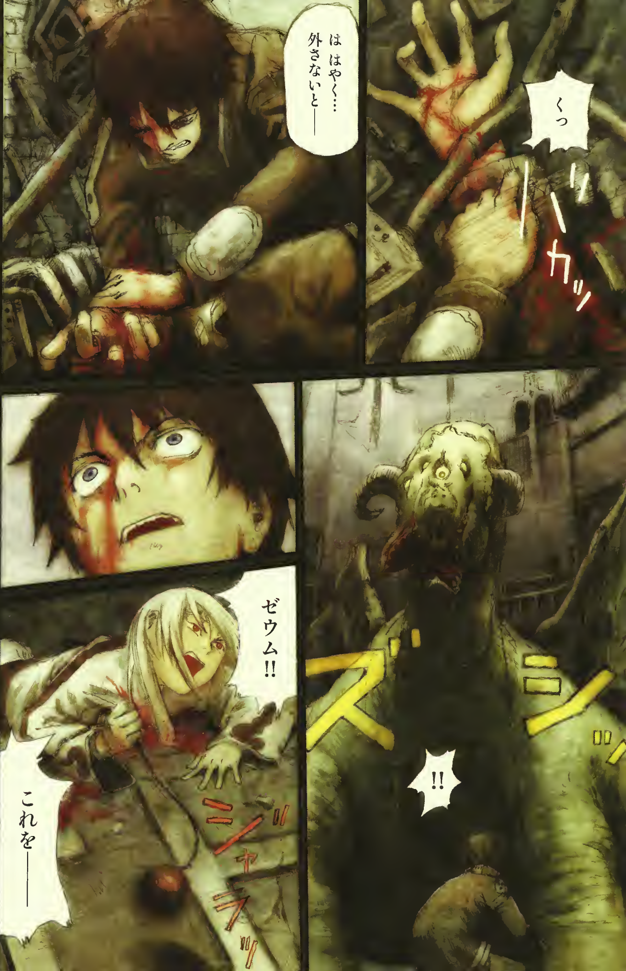

ガッ
うっ…
くっ！
タタリア!!
ぐっ
ゼ……

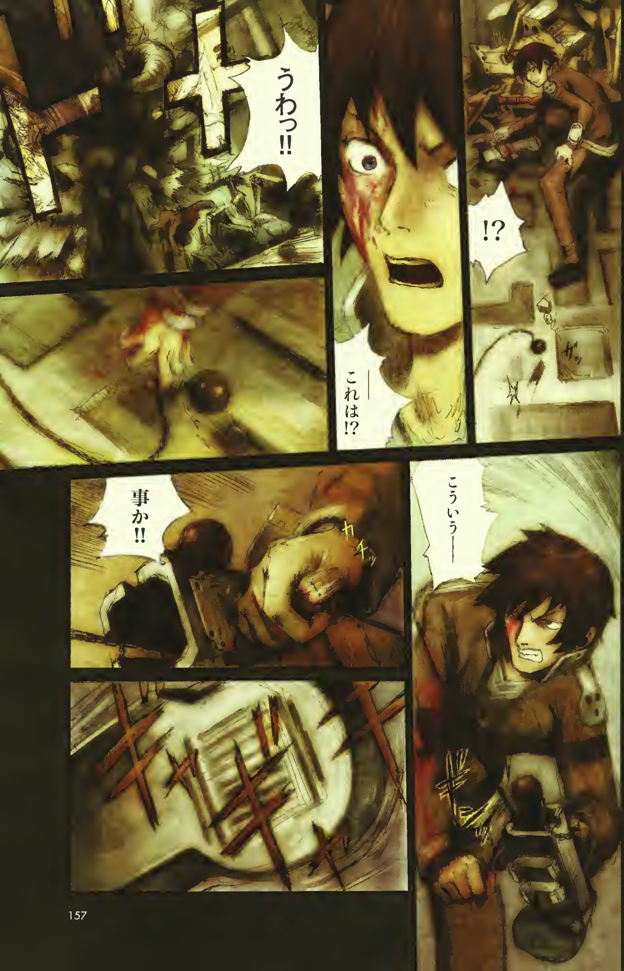

ド
ガッ
!
くっ

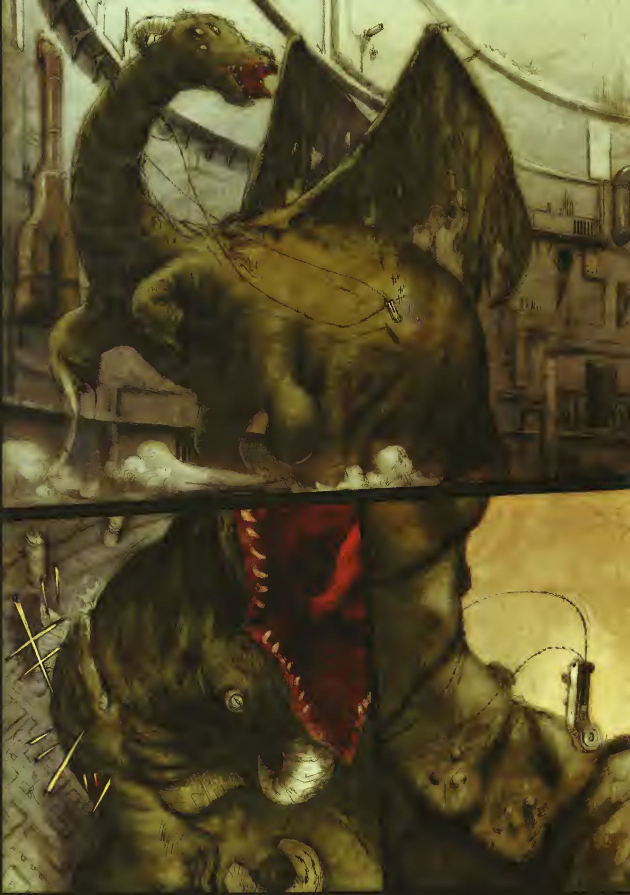
第八話

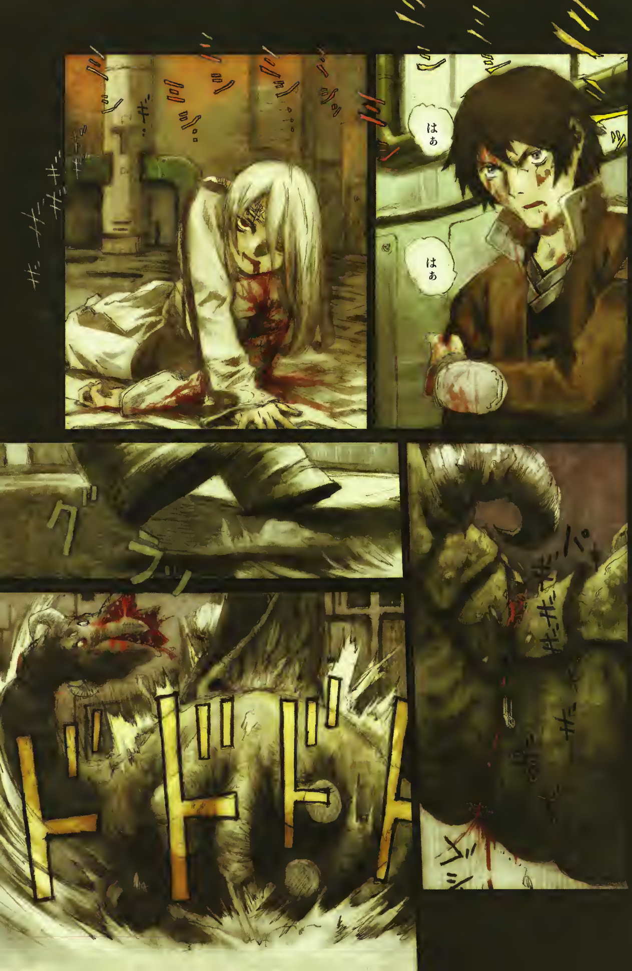


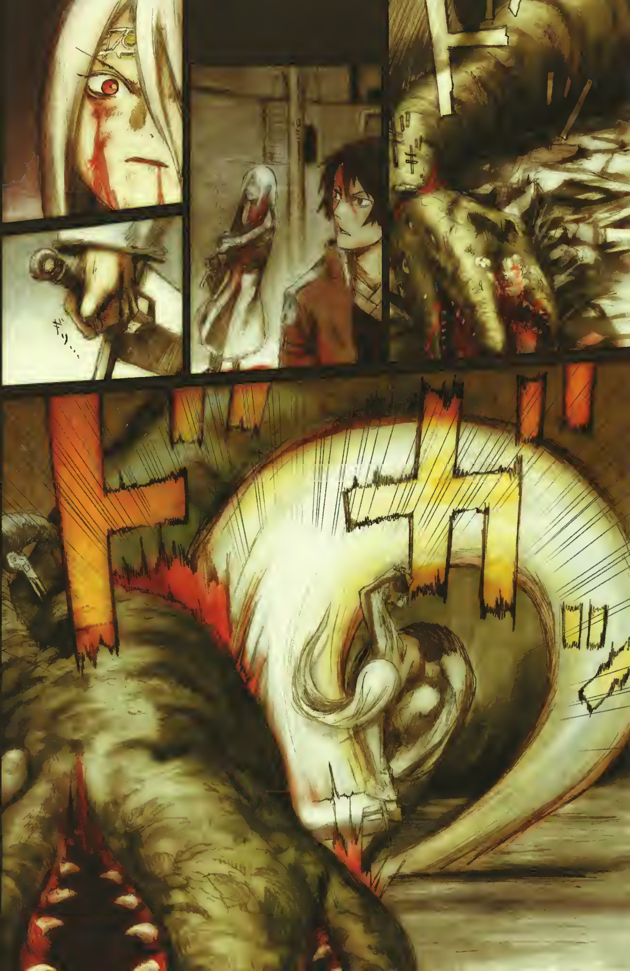

うわっ!!
ブン
ドカ
ガガガガ
うう………
ゼ……ウム……

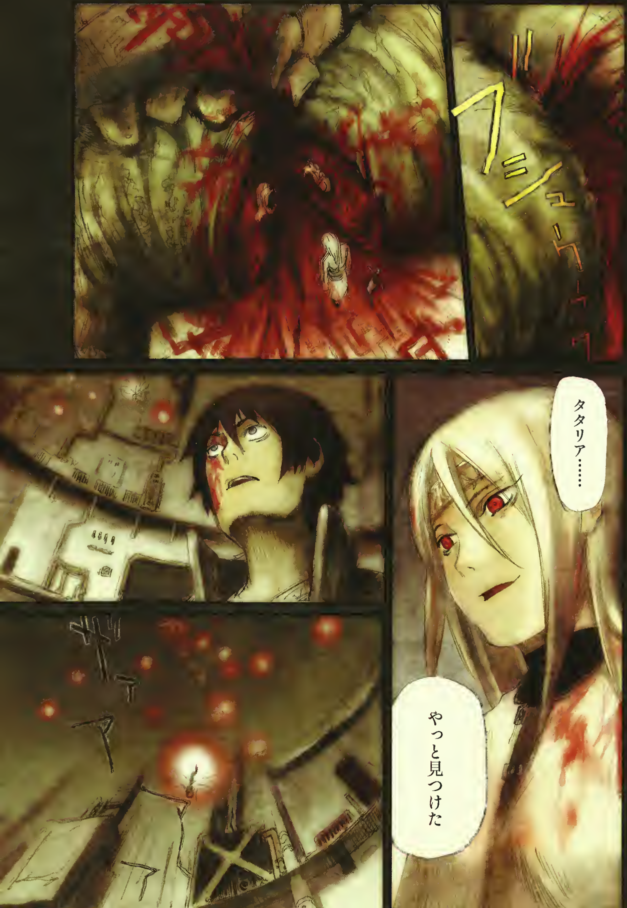

くっ
バカッ
は　はやく…外さないと——
ズン
!!
ゼウム!!
ジャラッ
これを——

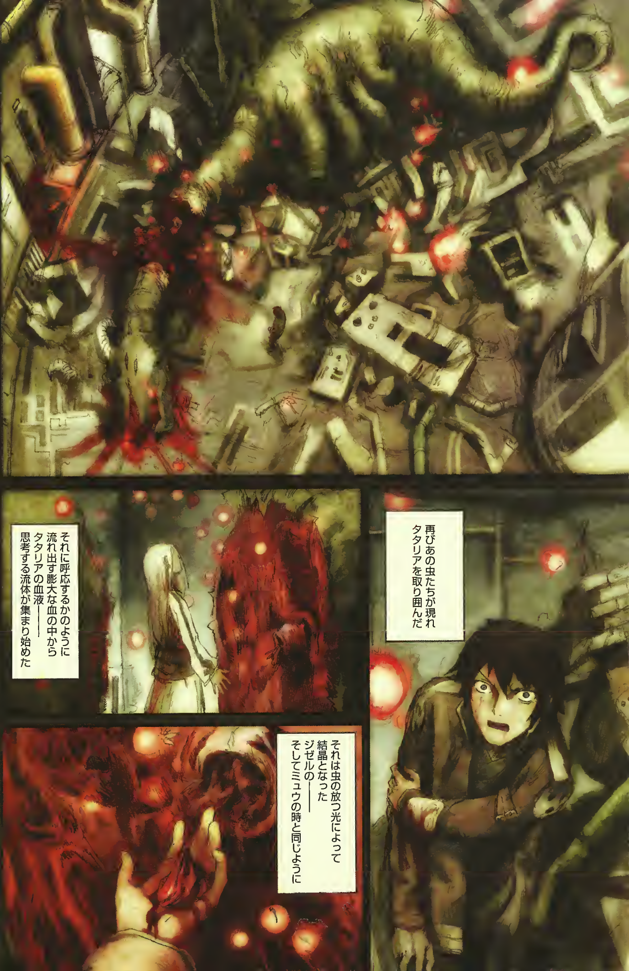

!?
ガッ
これは!?
うわっ!!
こういう——
事か!!
カチッ

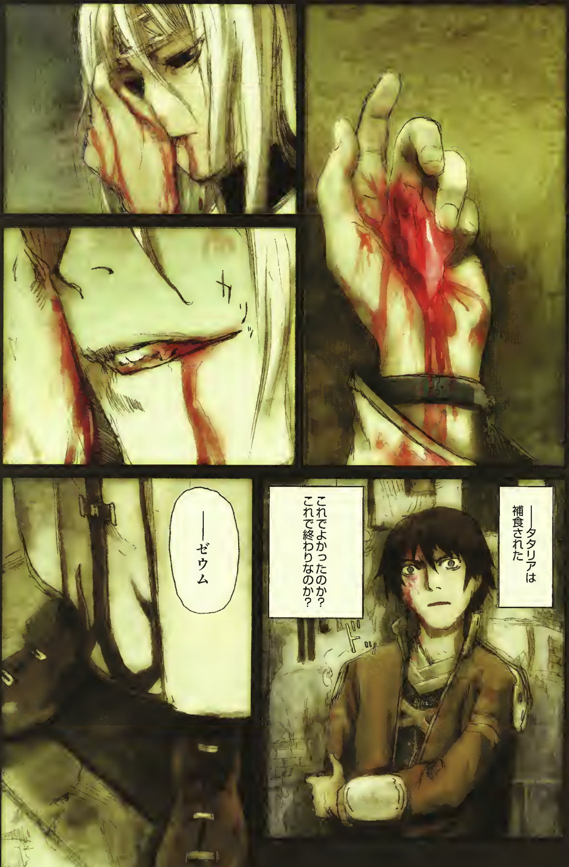


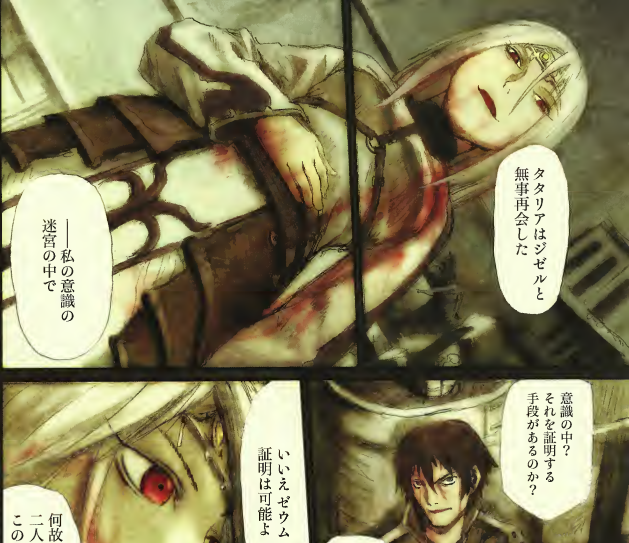

ミシ
ミシ
はぁ
はぁ
ミシ
ミシッ
ミシ
ミシ
ギ
ギギギギ
バキ
ギギギ
ギ
ズシ
グラッ
ドドドド

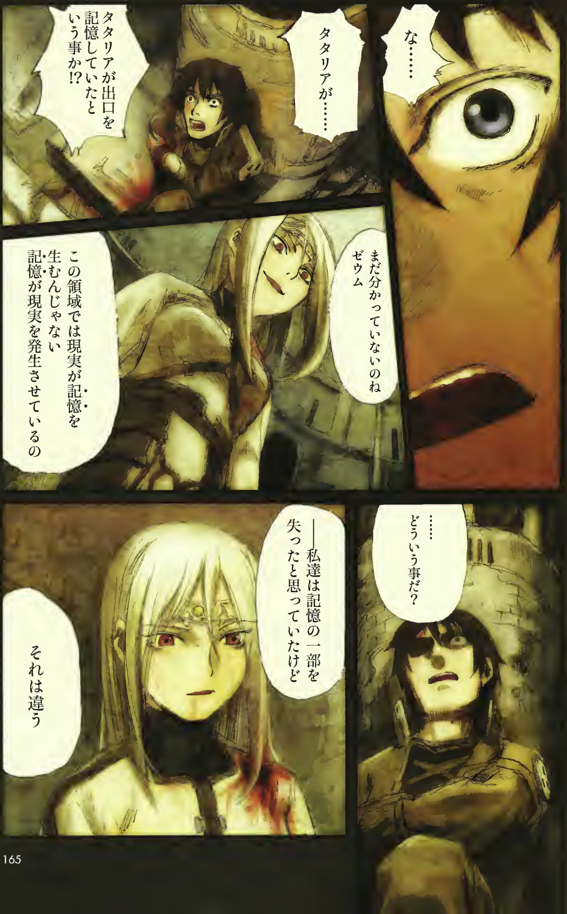

ド
ドギ
ギリ…
ドゴッ

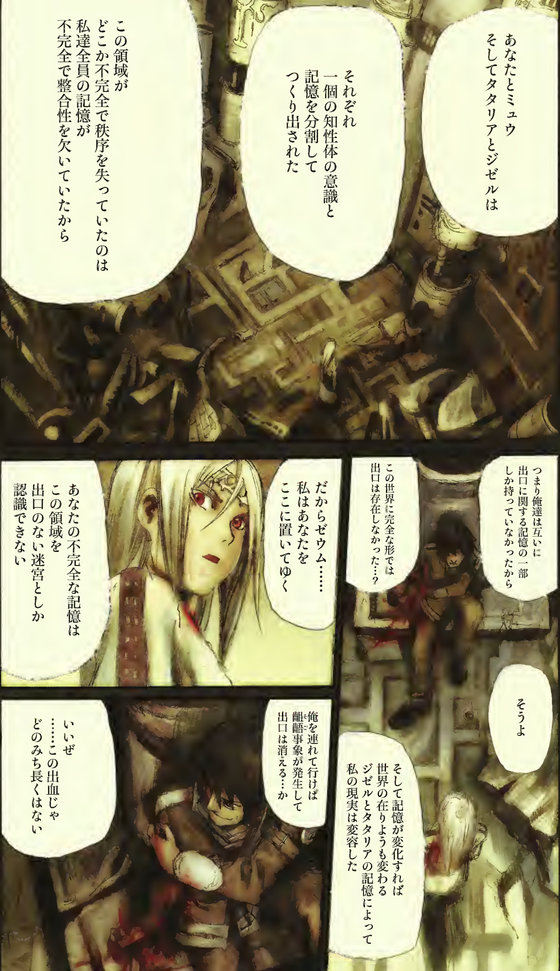

ブシュークク
タタリア……
やっと見つけた
ギャアアア

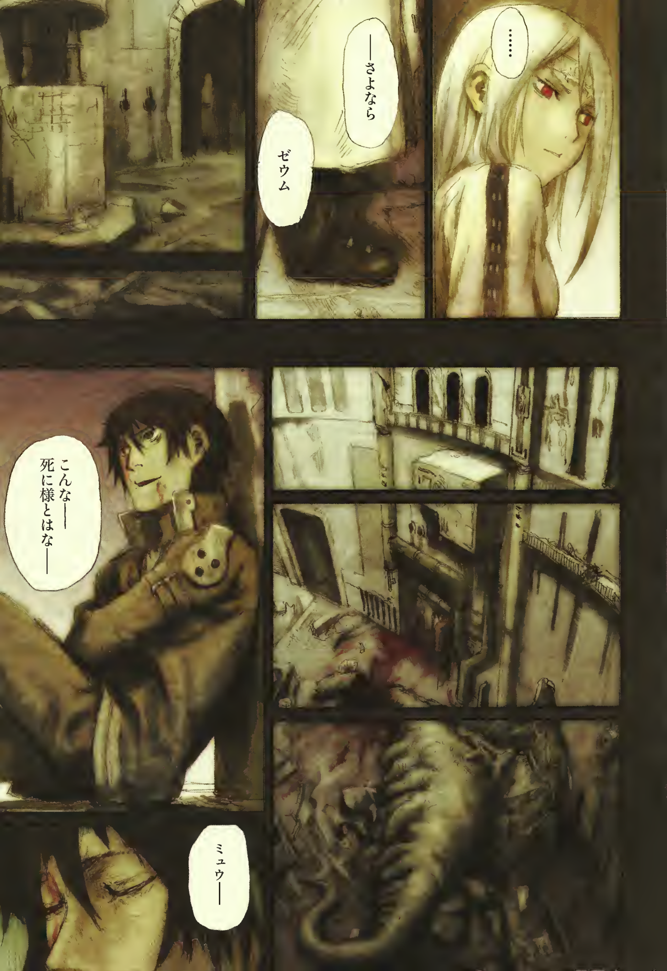

再びあの虫たちが現れ
タタリアを取り囲んだ
それに呼応するかのように
流れ出す膨大な血の中から
タタリアの血液――
思考する流体が集まり始めた
それは虫の放つ光によって
結晶となった
ジゼルの――
そしてミュウの時と同じように

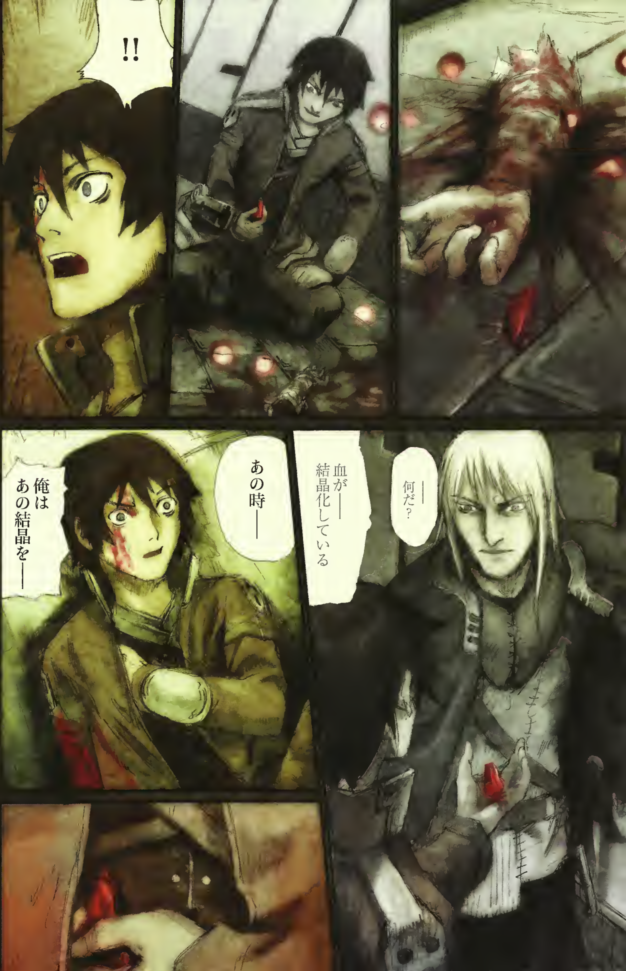

カリッ
――タタリアは
補食された
これでよかったのか？
これで終わりなのか？
ドッ
――ゼウム

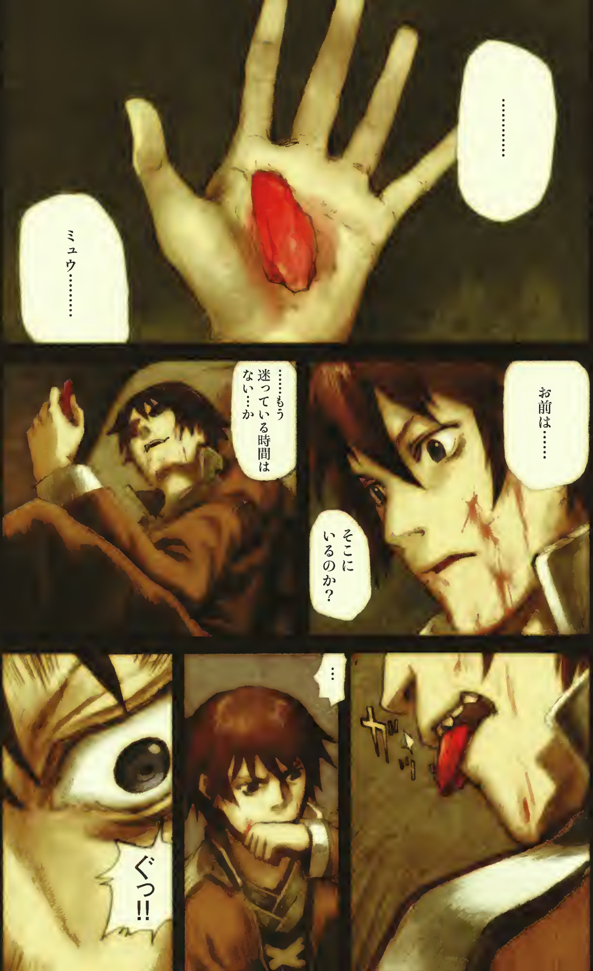

タタリアはジゼルと無事再会した
――私の意識の迷宮の中で
意識の中？それを証明する手段があるのか？
お前の頭の中の事など――
いいえ ゼウム 証明は可能よ
何故なら私は二人を内包した事でこの迷宮の出口を知ることができた


な……
タタリアが……
タタリアが出口を記憶していたという事か!?
まだ分かっていないのね ゼウム
この領域では現実が記憶を生むんじゃない 記憶が現実を発生させているの
……どういう事だ?
——私達は記憶の一部を失ったと思っていたけど
それは違う

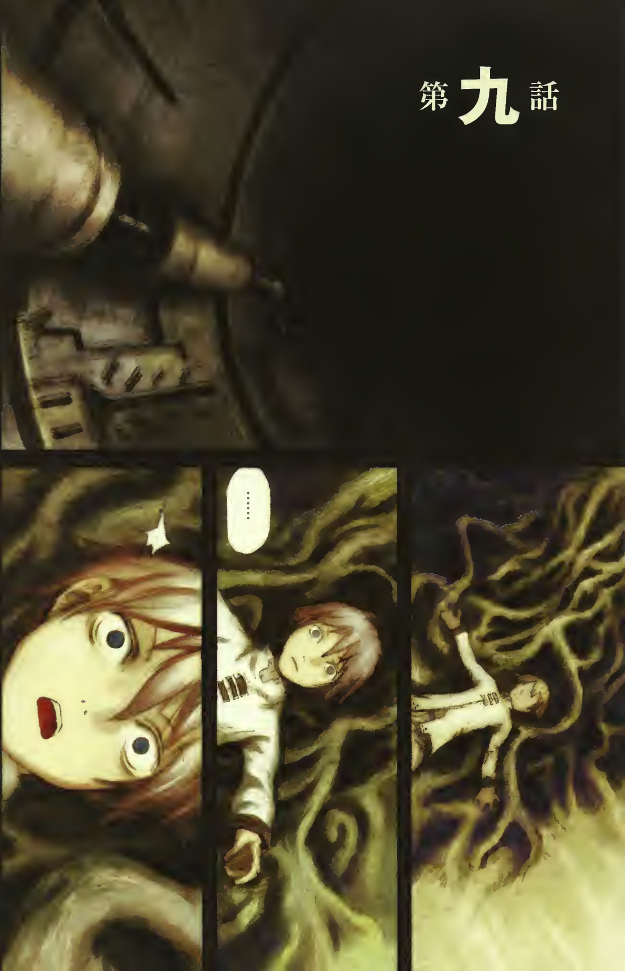

あなたとミュウそしてタタリアとジゼルは
それぞれ一個の知性体の意識と記憶を分割してつくり出された
この領域がどこか不完全で秩序を失っていたのは私達全員の記憶が不完全で整合性を欠いていたから
つまり俺達は互いに出口に関する記憶の一部しか持っていなかったから
この世界に完全な形では出口は存在しなかった…？
そうよ
そして記憶が変化すれば世界の在りようも変わるジゼルとタタリアの記憶によって私の現実は変容した
だからゼウム……私はあなたをここに置いてゆく
あなたの不完全な記憶はこの領域を出口のない迷宮としか認識できない
俺を連れて行けば齟齬事象が発生して出口は消える…か
いいぜ……この出血じゃどのみち長くはない

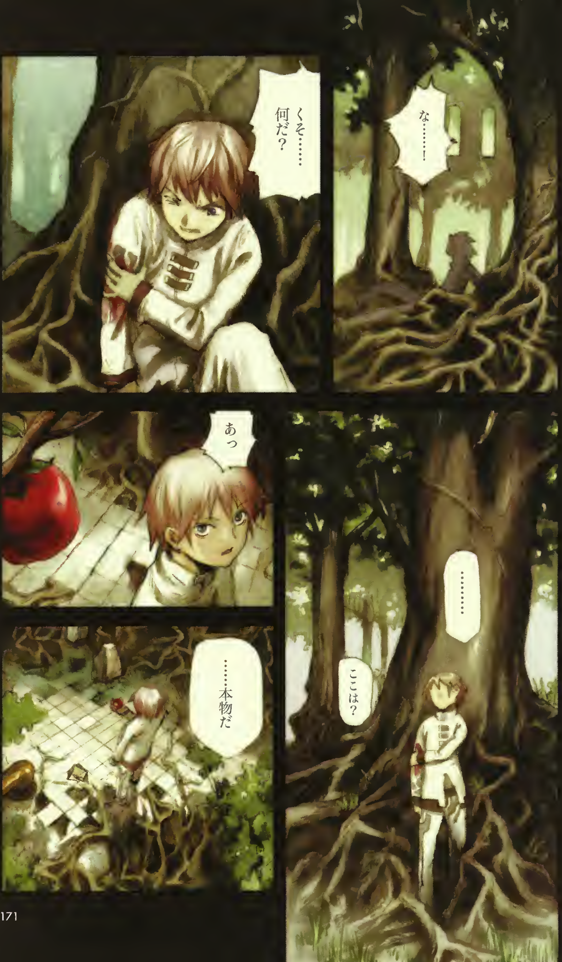

……
——さよなら
ゼウム
こんな——
死に様とはな——
ミュウ——

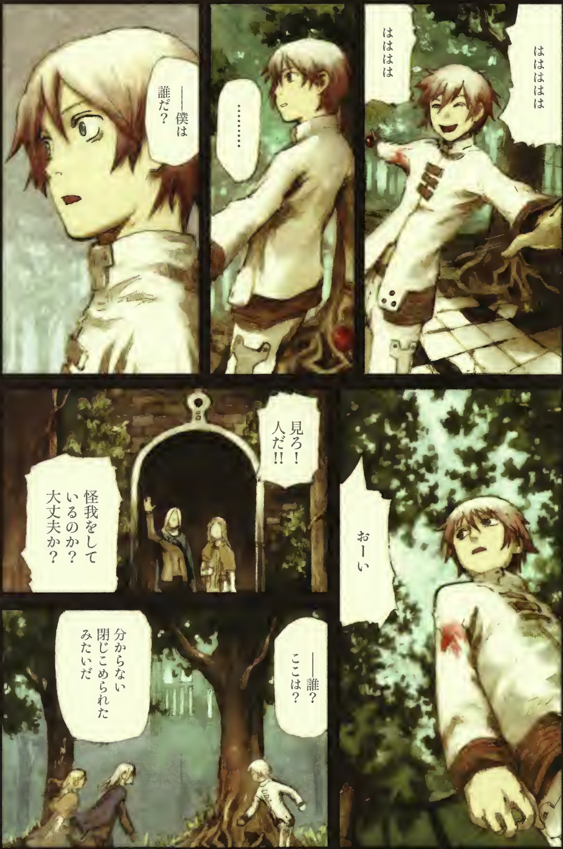

!!
――何だ？
血が――結晶化している
あの時――
俺はあの結晶を――

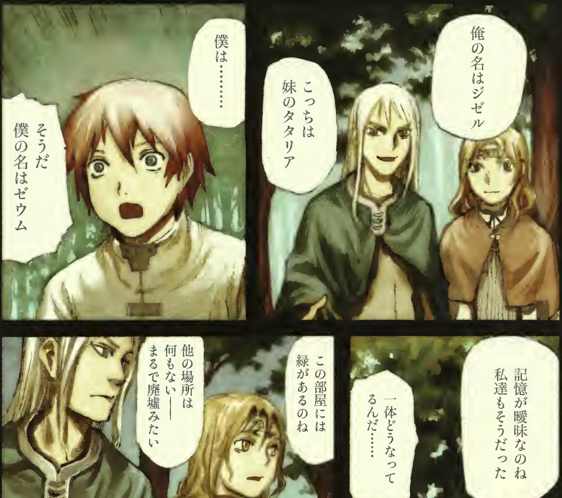

…………
ミュウ………
お前は……
そこにいるのか？
……もう迷っている時間はない…か
ガッ
…
ぐっ!!

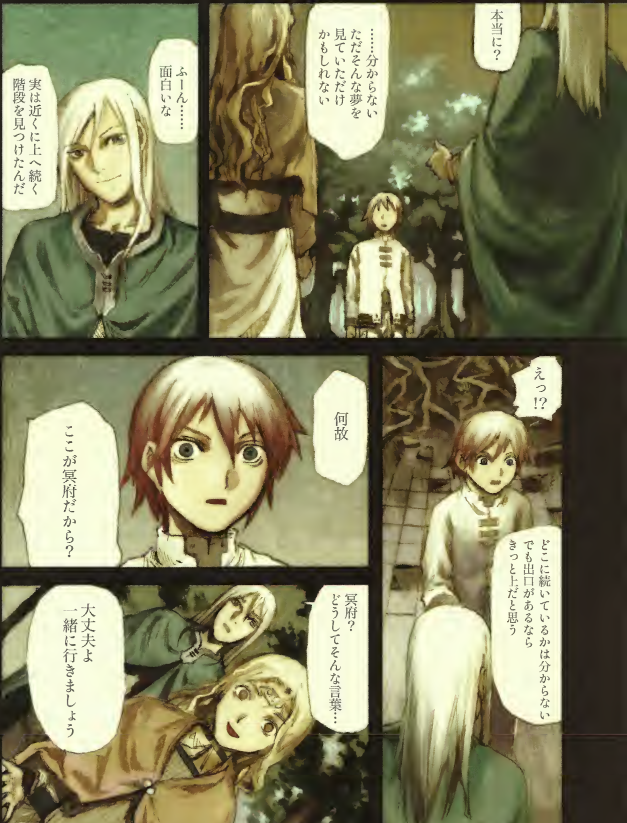
第九話

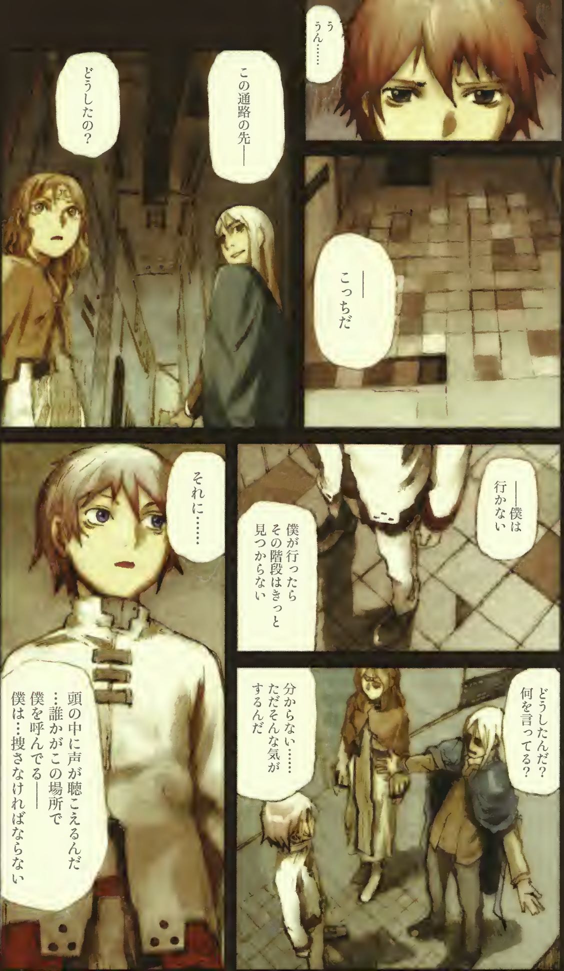


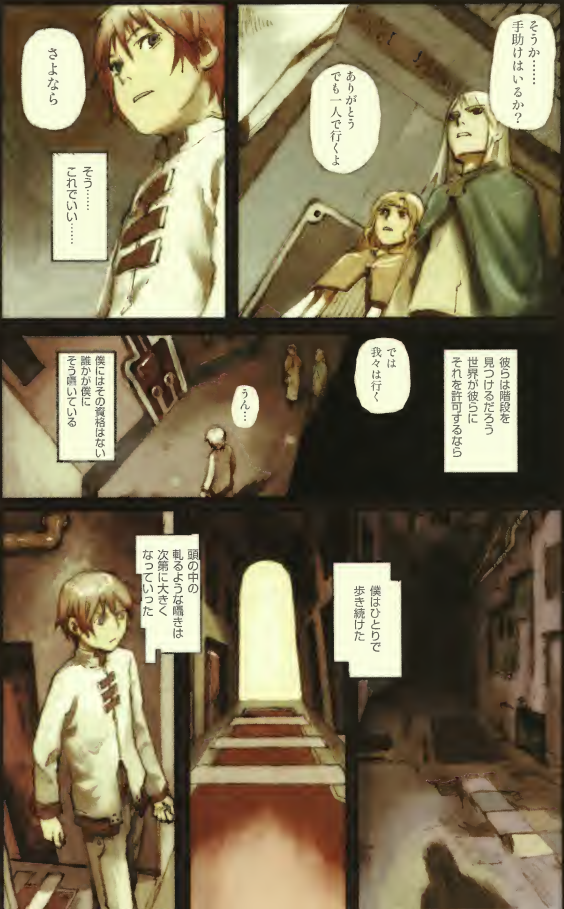

な……！
くそ……
何だ？
………
ここは？
あっ
……本物だ

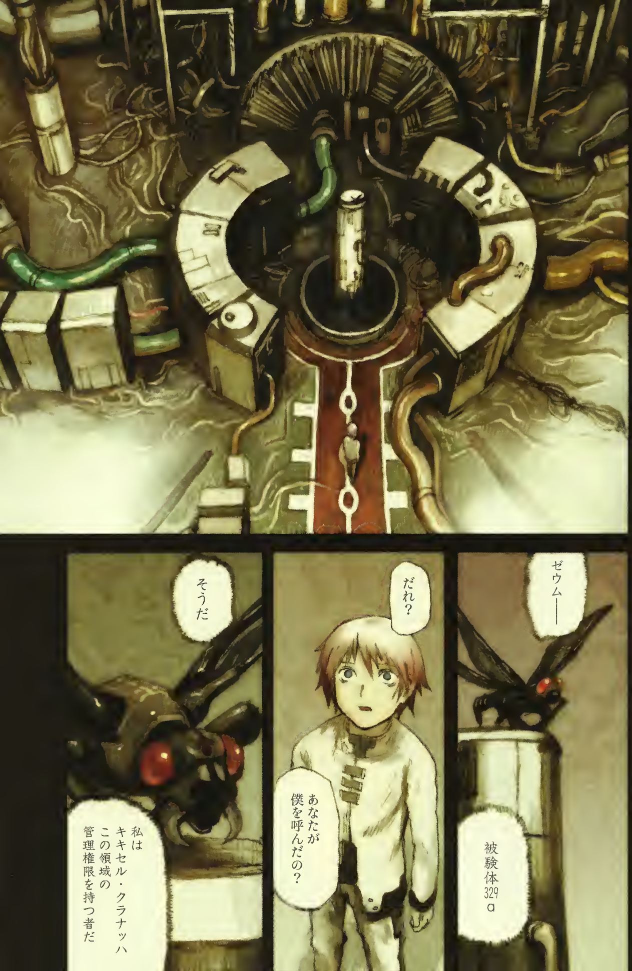

ははははは
はははは
………
——僕は誰だ？
おーい
見ろ！人だ!!
怪我をしているのか？大丈夫か？
——誰？ここは？
分からない閉じこめられたみたいだ

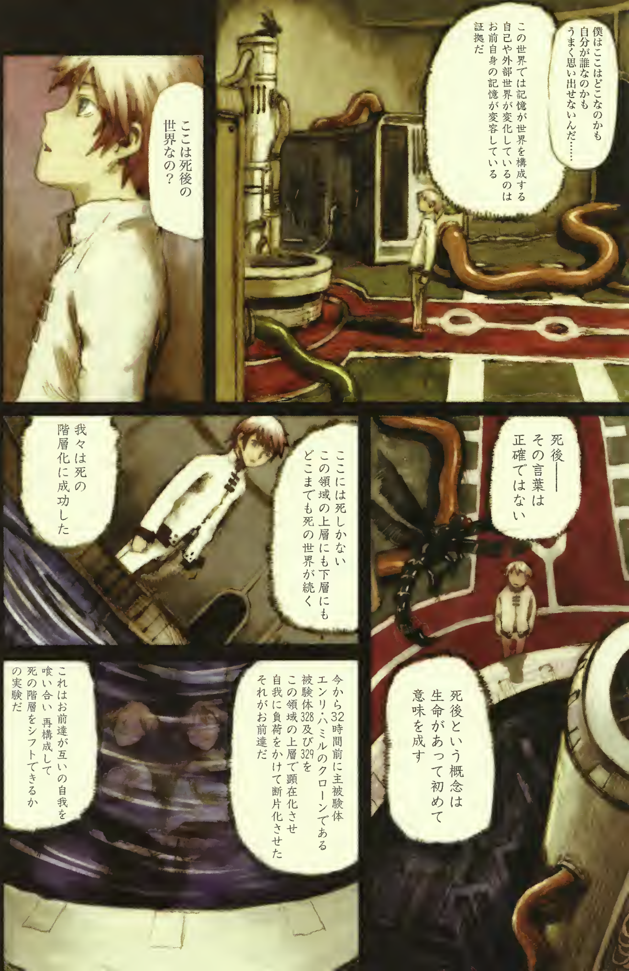

俺の名はジゼル
こっちは妹のタタリア
僕は………
そうだ 僕の名はゼウム
記憶が曖昧なのね 私達もそうだった
一体どうなってるんだ……
この部屋には緑があるのね
他の場所は何もない―― まるで廃墟みたい
僕は――この場所を知っている気がする……
ずっとさまよって…… ついに出口を見つける事ができなかった

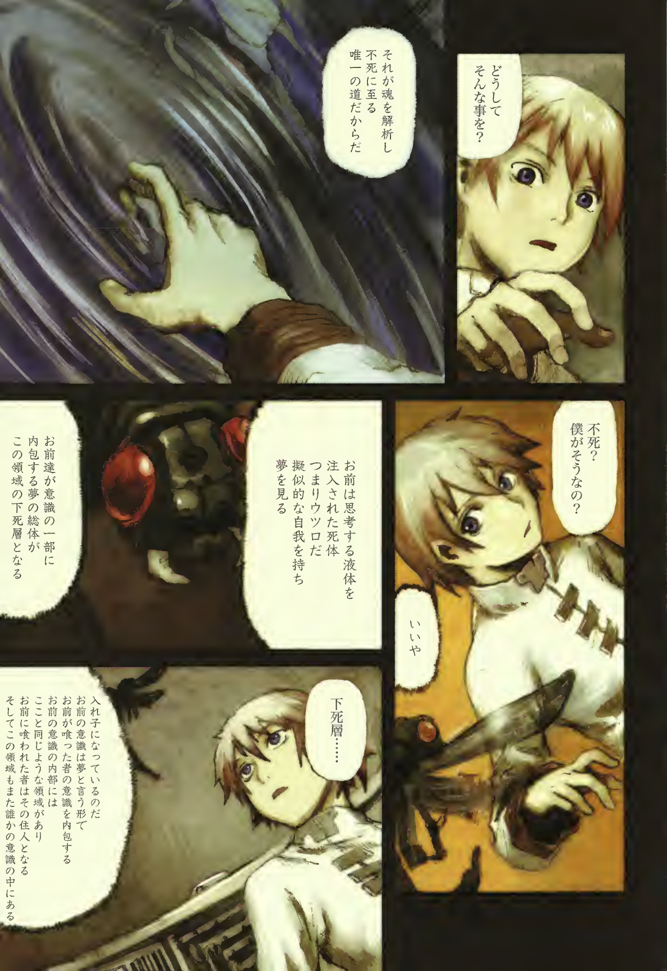

本当に？
……分からない ただそんな夢を 見ていただけ かもしれない
ふーん…… 面白いな
実は近くに上へ続く 階段を見つけたんだ
えっ!?
どこに続いているかは分からない でも出口があるなら きっと上だと思う
何故
ここが冥府だから？
冥府？ どうしてそんな言葉…
大丈夫よ 一緒に行きましょう

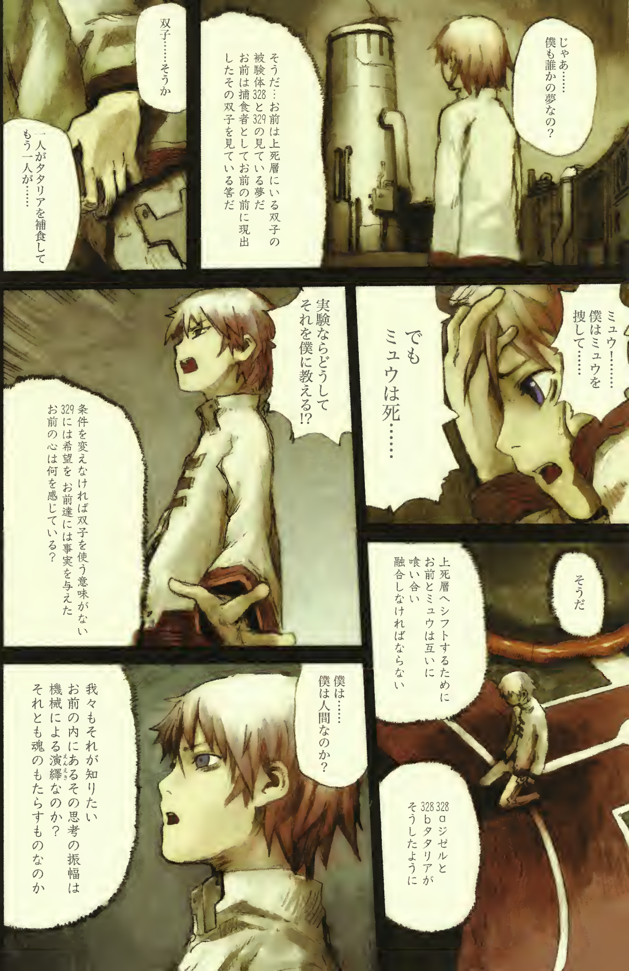

う
うん……
この通路の先――
どうしたの？
――こっちだ
――僕は
行かない
僕が行ったら
その階段はきっと
見つからない
どうしたんだ？
何を言ってる？
分からない……
ただそんな気が
するんだ
それに……
頭の中に声が聴こえるんだ
…誰かがこの場所で
僕を呼んでる――
僕は…捜さなければならない

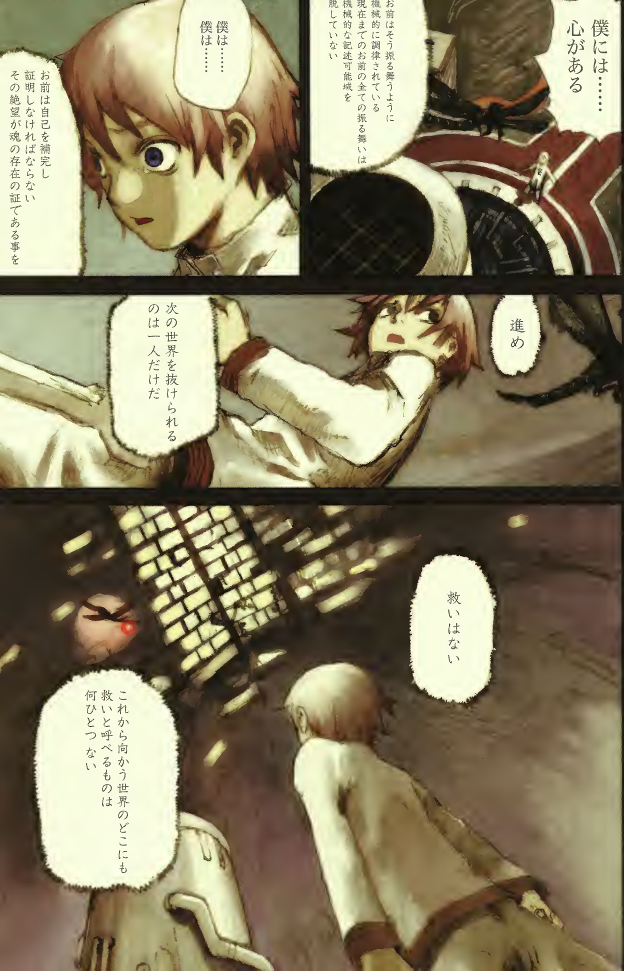

そうか……
手助けはいるか？
ありがとう
でも一人で行くよ
さよなら
そう……
これでいい……
彼らは階段を
見つけるだろう
世界が彼らに
それを許可するなら
では
我々は行く
うん…
僕にはその資格はない
誰かが僕に
そう囁いている
僕はひとりで
歩き続けた
頭の中の
軋るような囁きは
次第に大きく
なっていった

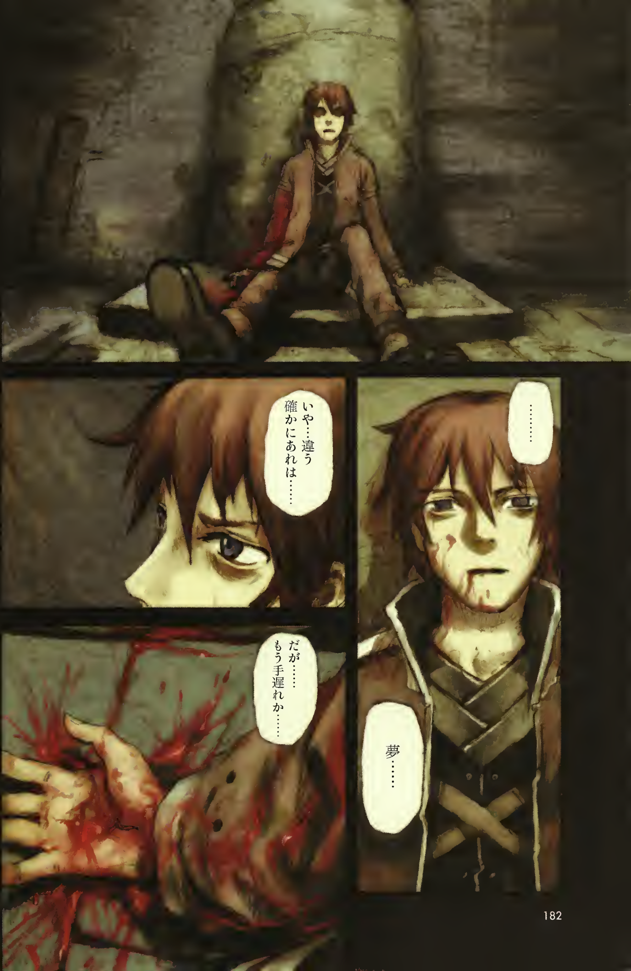

ゼウム――
被験体329a
だれ？
あなたが僕を呼んだの？
そうだ
私はキキセル・クラナッハこの領域の管理権限を持つ者だ

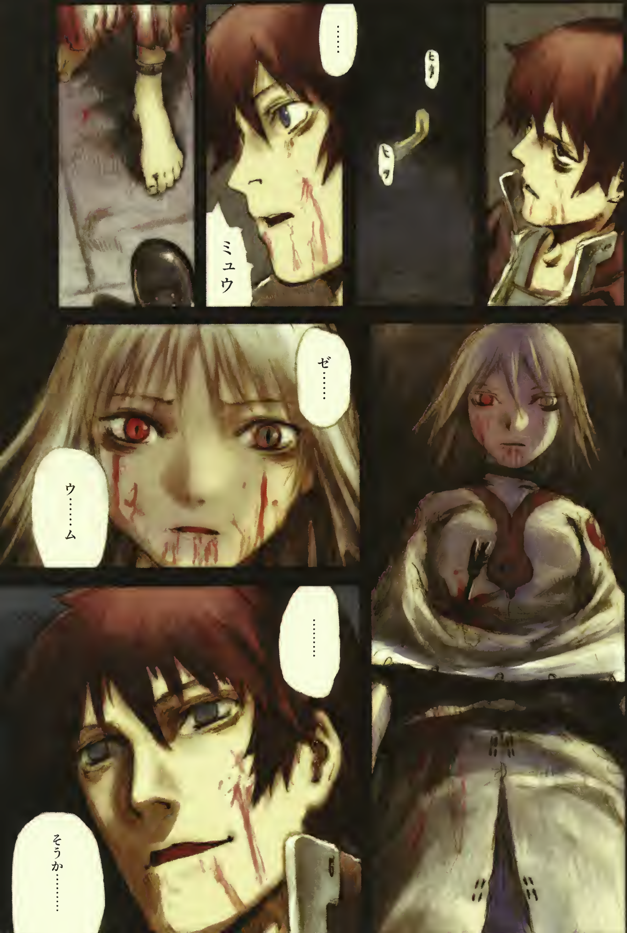

僕はここはどこなのかも 自分が誰なのかも うまく思い出せないんだ……
この世界では記憶が世界を構成する 自己や外部世界が変化しているのは お前自身の記憶が変容している 証拠だ
ここは死後の世界なの？
死後―― その言葉は正確ではない
ここには死しかない この領域の上層にも下層にも どこまでも死の世界が続く
我々は死の階層化に成功した
死後という概念は 生命があって初めて 意味を成す
今から32時間前に主被験体 エンリ・ハミルのクローンである 被験体328及び329を この領域の上層で顕在化させ 自我に負荷をかけて断片化させた それがお前達だ
これはお前達が互いの自我を 喰い合い 再構成して 死の階層をシフトできるか の実験だ

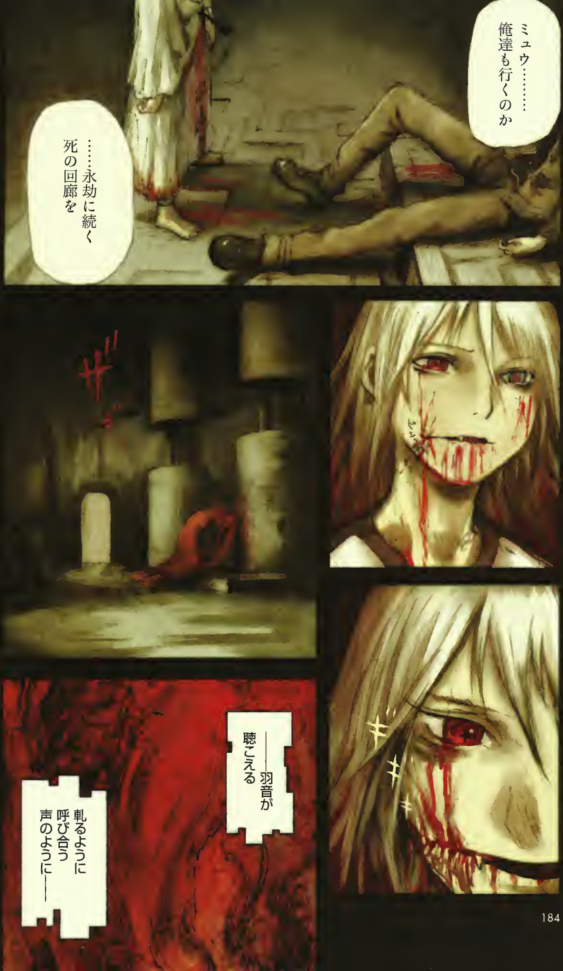

どうしてそんな事を？
それが魂を解析し不死に至る唯一の道だからだ
不死？僕がそうなの？
いいや
お前は思考する液体を注入された死体つまりウツロだ擬似的な自我を持ち夢を見る
お前達が意識の一部に内包する夢の総体がこの領域の下死層となる
下死層……
入れ子になっているのだ
お前の意識は夢と言う形で
お前が喰った者の意識を内包する
お前の意識の内部には
ここと同じような領域があり
お前に喰われた者はその住人となる
そしてこの領域もまた誰かの意識の中にある


じゃあ……僕も誰かの夢なの？
そうだ…お前は上死層にいる双子の被験体328と329の見ている夢だ お前は捕食者としてお前の前に現出したその双子を見ている筈だ
双子……そうか
一人がタタリアを補食してもう一人が……
ミュウ！……僕はミュウを捜して……
でもミュウは死……
実験ならどうしてそれを僕に教える!?
条件を変えなければ双子を使う意味がない 329には希望を お前達には事実を与えた お前の心は何を感じている？
そうだ
上死層へシフトするためにお前とミュウは互いに喰い合い融合しなければならない
328ａジゼルと328ｂタタリアがそうしたように
僕は……僕は人間なのか？
我々もそれが知りたい お前の内にあるその思考の振幅は機械による演繹なのか？ それとも魂のもたらすものなのか


僕には……心がある
お前はそう振る舞うように機械的に調律されている現在までのお前の全ての振る舞いは機械的な記述可能域を脱していない
僕は……僕は……
お前は自己を補完し証明しなければならないその絶望が魂の存在の証である事を
進め
次の世界を抜けられるのは一人だけだ
救いはない
これから向かう世界のどこにも救いと呼べるものは何ひとつない


……
夢……
いや…違う
確かにあれは……
だが……
もう手遅れか……

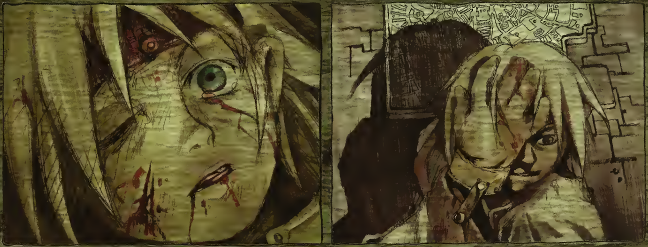

ヒク
ヒク
……
ミユウ
ゼ……
ウ……ム
……
そうか………


ミュウ………
俺達も行くのか
……永劫に続く
死の回廊を
ザ
ビシッ
――羽音が
聴こえる
軋るように
呼び合う
声のように――

廃域 おわり

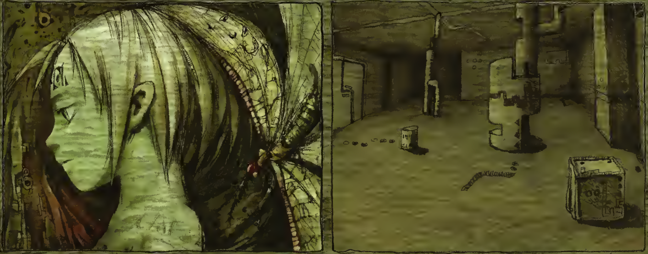
白雨

シラサメ



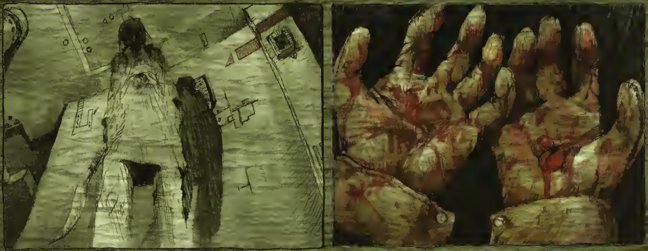
頭の中でわんわんと、羽虫の飛び交うような不快な音が鳴り続けている。

冷たく拡がる闇。何かの滴り落ちる音。吐息のように私が失われてゆく。



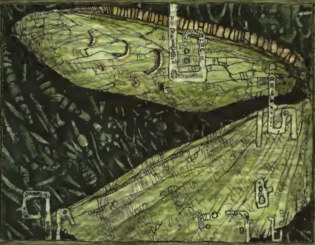
ゆっくりと眼をあける。薄暗い部屋。濃い、血の匂いが立ちこめている。

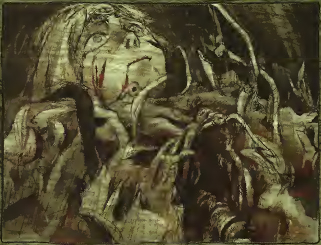
頭の中の羽音が私に死を告げる。鈍い恐怖。羽音は不意に嘲笑に変わる。



無意識のうちに、両腕を見おろす。掌を開くと指の間から赤がこぼれる。

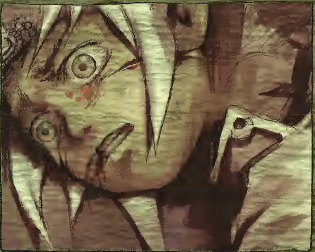
再び何かの滴る音。わずかに眼をあけると、赤く濁った視界に私が映る。

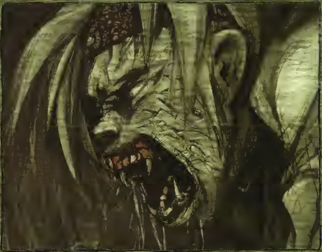




石畳の床に視線を落とす。私の残骸。血の色の眼が、私を見上げている。

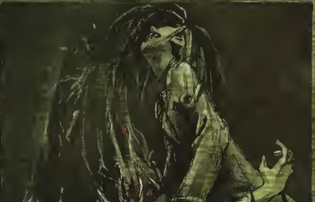
視界はすべて赤く染まる。痛みだけが、私に残された現実の全てになる。

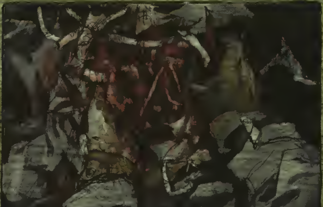




擦れ合う羽音がひとつになり、静かに響く。『喰え』という意味の言葉。

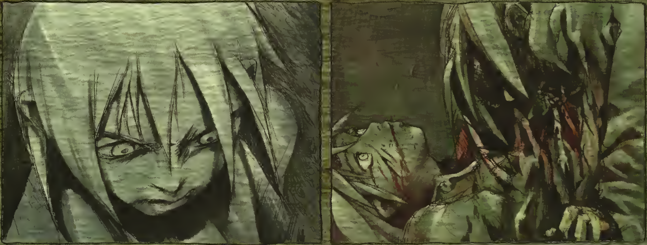
頭の中で羽音が膨らみ、混濁した記憶をねじり潰す。痛み。最後の現実。





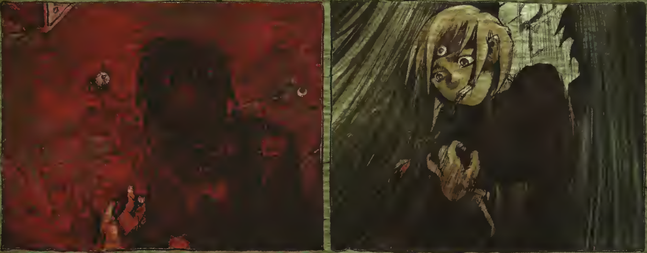
傷口から覗く、驚くほど白い肋骨を指で押し広げ、心臓を引きずり出す。

私が繰り返してきた事。私が殺してきたもの。そして私が今、死を唄う。



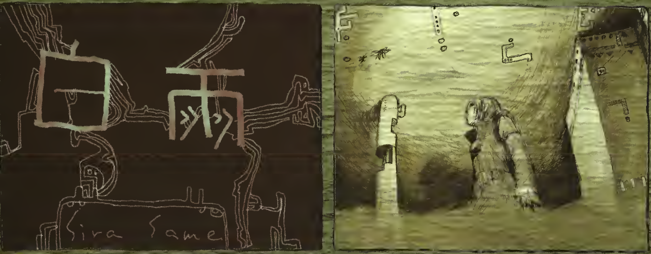
口の中に血の味が広がる。失われた記憶の味。絡み合う、ふたつの羽音。

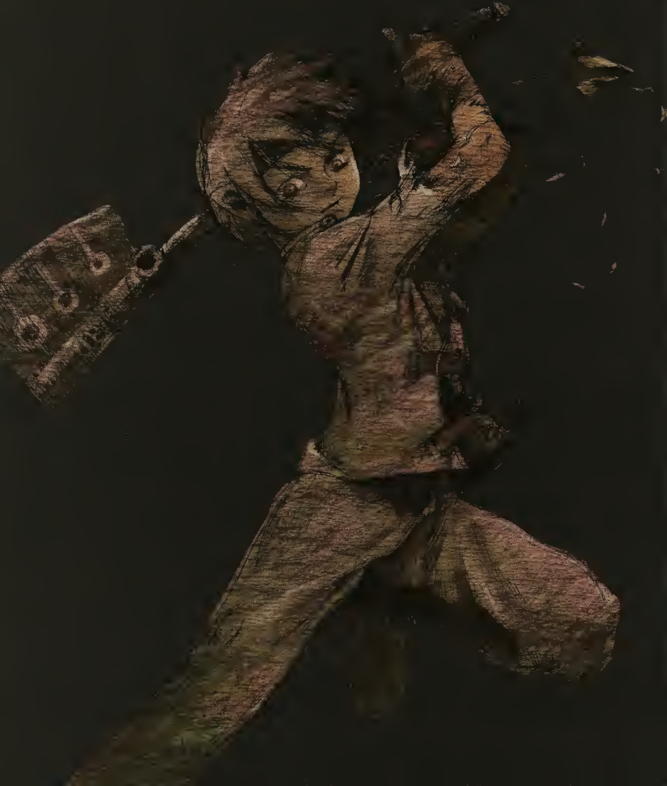
私が失われてゆく。砕けた記憶の断片が、[illegible]私に組み込まれてゆく。

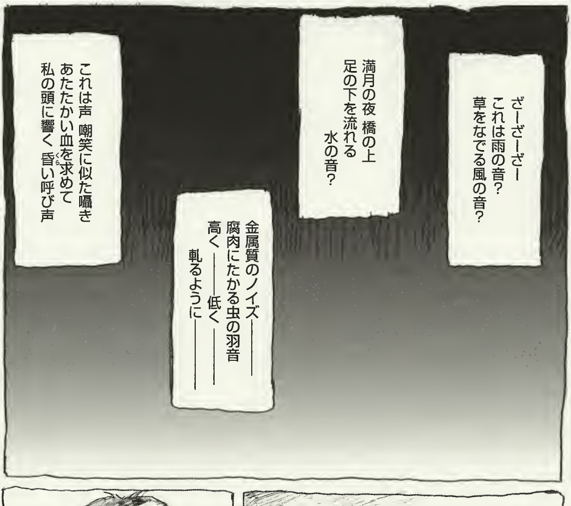


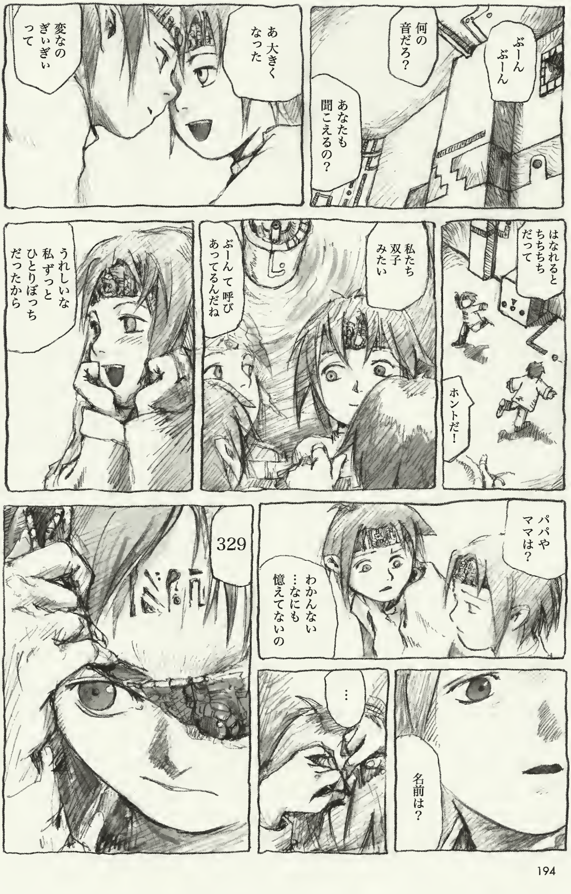
羽音が止む。同じ遺伝子を持つもの同士を繋ぐ信号が。私は私を殺した。

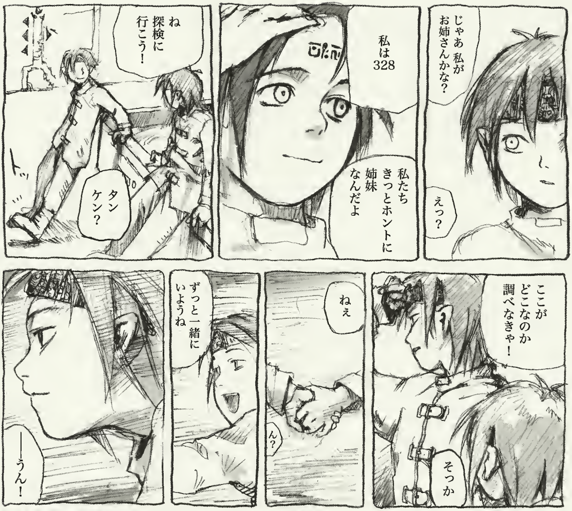
殺さねば生きられぬ私。死ぬ事で生き続ける私。[illegible]

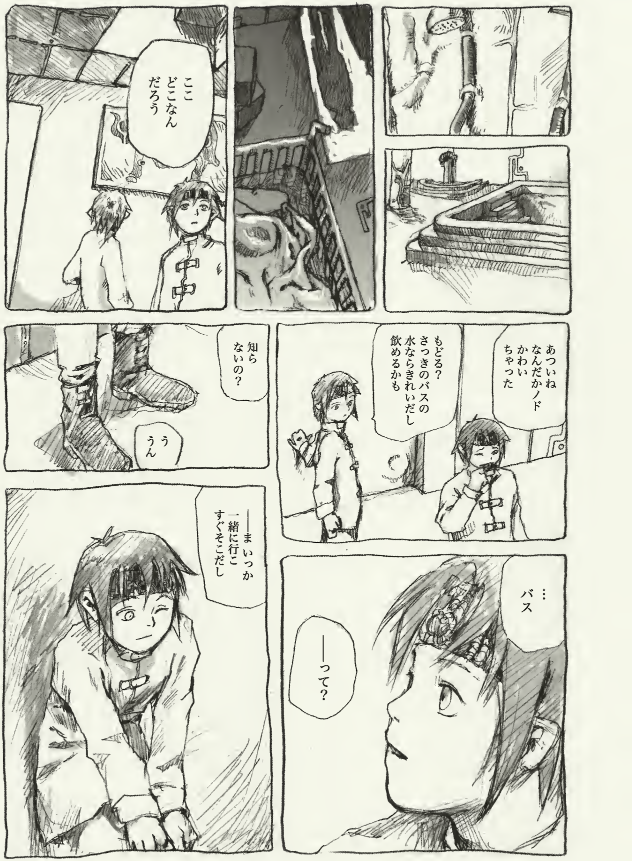


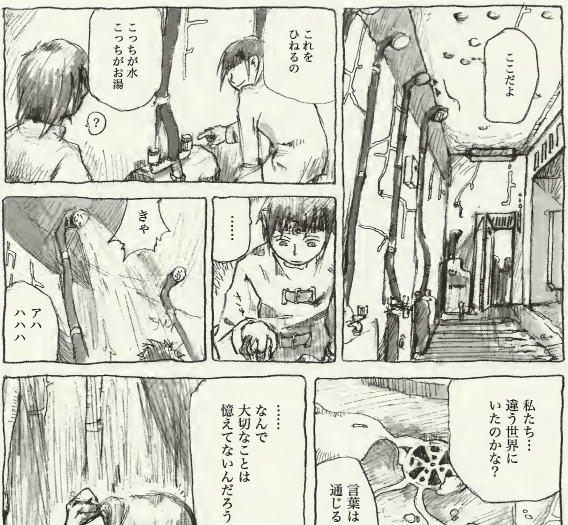


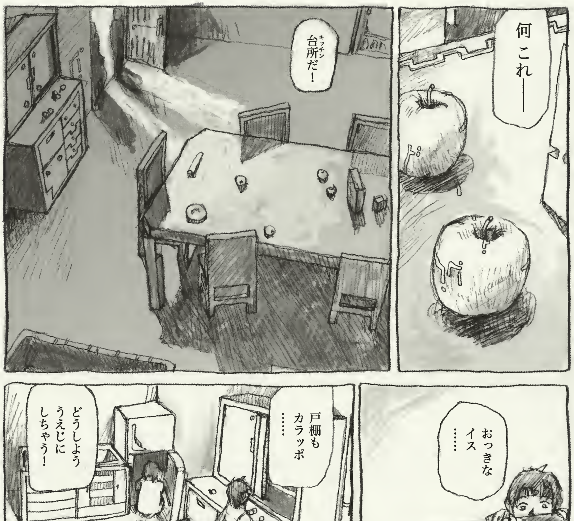

ざーざーざー
これは雨の音？
草をなでる風の音？
満月の夜 橋の上
足の下を流れる
水の音？
金属質のノイズ――
腐肉にたかる虫の羽音
高く――低く――
軋るように――
これは声 嘲笑に似た囁き
あたたかい血を求めて
私の頭に響く 昏（くら）い呼び声
目を開くと
目の前に私がいた

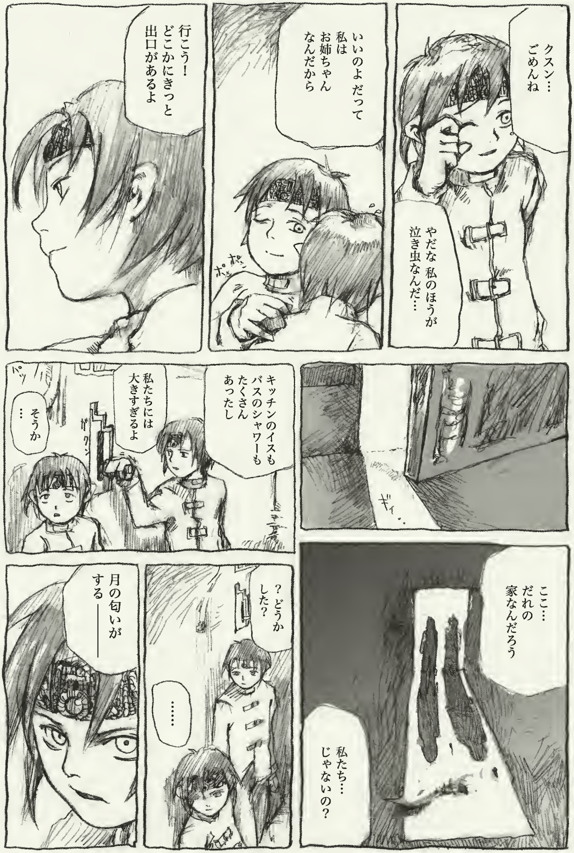

ぶーん ぶーん
何の音だろ？
あなたも聞こえるの？
あ 大きくなつた
変なのぎいぎいつて
はなれるとちちちちだって
ホントだ！
私たち双子みたい
ぶーんて呼びあってるんだね
うれしいな私ずっとひとりぼっちだつたから
パパやママは？
わかんない…なにも憶えてないの
名前は？
…
329

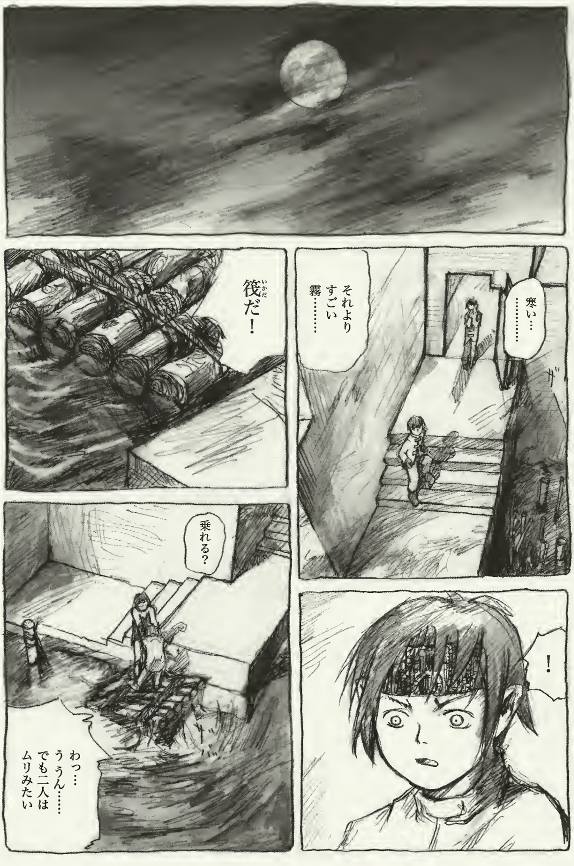

じゃあ私がお姉さんかな？
えっ？
私は328
私たちきっとホントに姉妹なんだよ
ね探検に行こう！
トッ
タンケン？
ここがどこなのか調べなきゃ！
そっか
ねぇ
ん？
ずっと一緒にいようね
——うん！

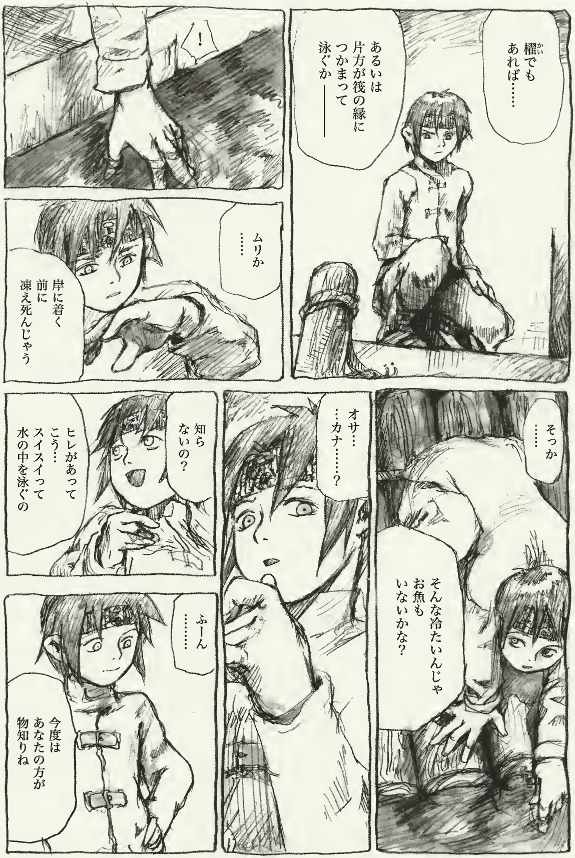

ここどこなんだろう
あついね なんだかノド かわいちゃった
もどる？ さっきのバスの 水ならきれいだし 飲めるかも
知らないの？
ううん
…バス
——って？
——まいっか 一緒に行こ すぐそこだし

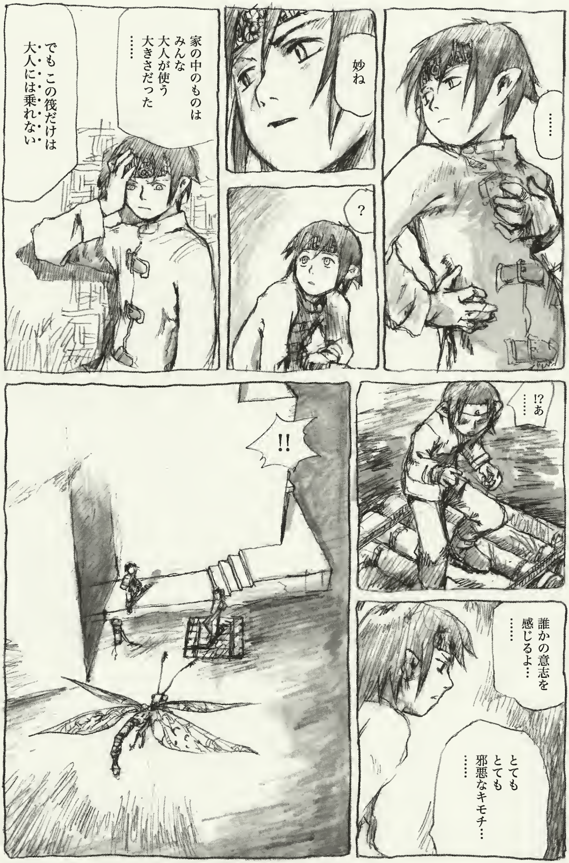

ここだよ
これを ひねるの
こっちが水 こっちがお湯
?
……
きゅ
きゃ
アハ ハハハ
私たち… 違う世界に いたのかな?
言葉は 通じるのにね
ここで目を さます前のこと 憶えてる?
ううん
…… なんで 大切なことは 憶えてないんだろう

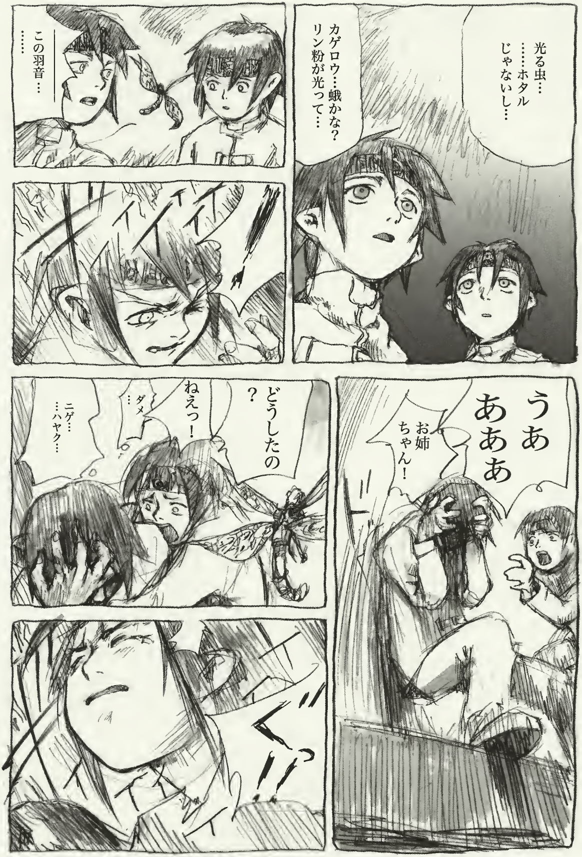

何これ——
台所（キッチン）だ！
おっきなイス……
これ つくりものだ
戸棚もカラッポ……
どうしようううえじにしちゃう！
……おなかすいたよう……
大丈夫きっとなんとかなるよ
ううん……

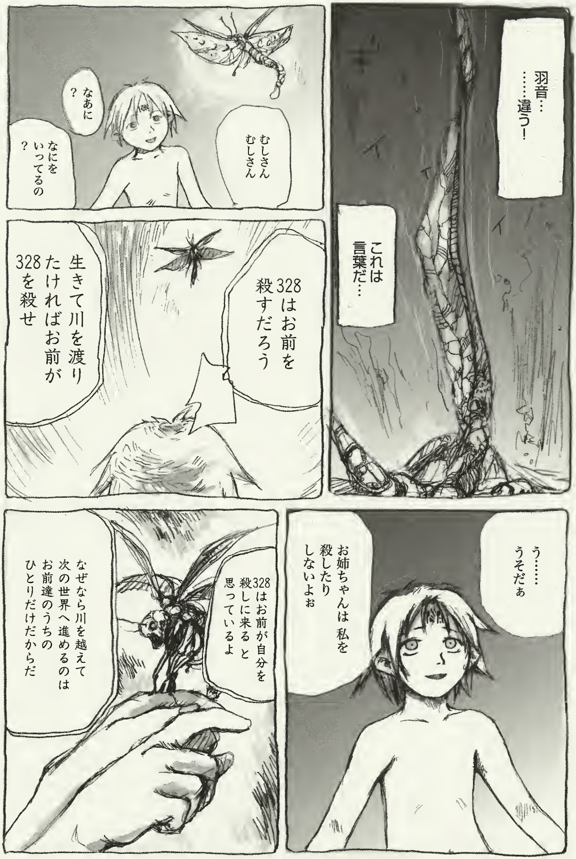

クスン…ごめんね
やだな 私のほうが泣き虫なんだ…
いいのよ だって私はお姉ちゃんなんだから
ポンポン
行こう! どこかにきっと出口があるよ
ギィ…
キッチンのイスもバスのシャワーもたくさんあったし
私たちには大きすぎるよ
ガクン
…そうか
パッ
ここ…だれの家なんだろう
私たち…じゃないの?
?どうかした?
……
月の匂いがする——

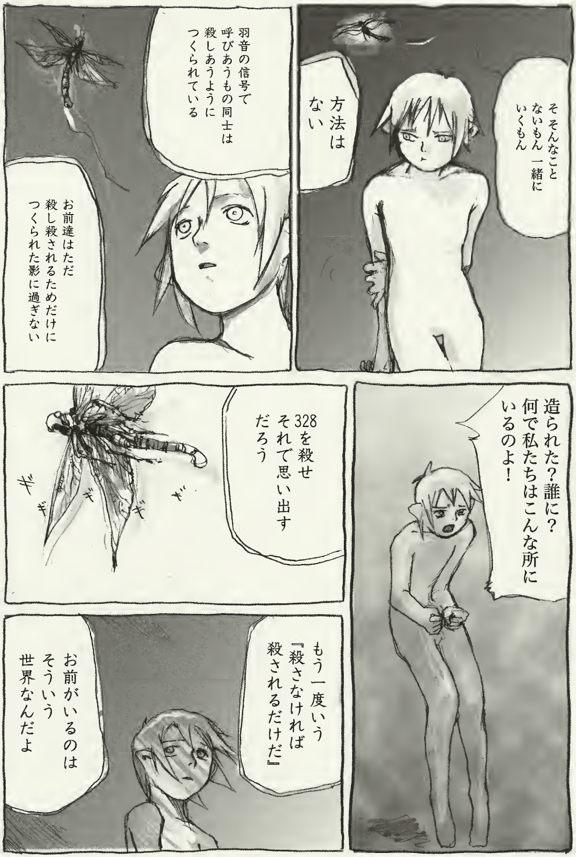

寒い…
……
それより
すごい
霧……
ザ
筏だ！
乗れる？
ザバ
わっ…
ううん……
でも二人は
ムリみたい
！

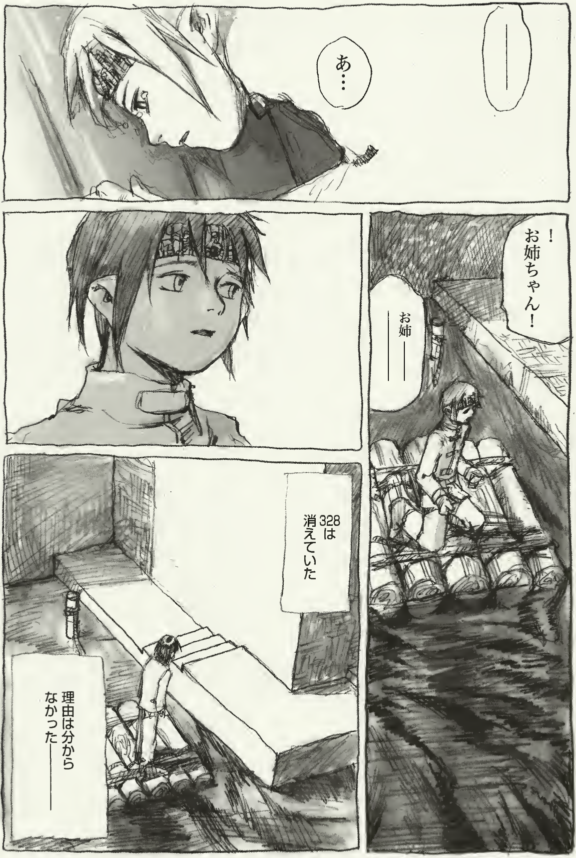

櫂（かい）でも あれば……
あるいは 片方が筏の縁に つかまって 泳ぐか ――
!
ムリか ……
岸に着く 前に 凍え死んじゃう
そっか ……
そんな冷たいんじゃ お魚も いないかな？
オサ… …カナ……？
知ら ないの？
ヒレがあって こう… スイスイって 水の中を泳ぐの
ふーん ……
今度は あなたの方が 物知りね

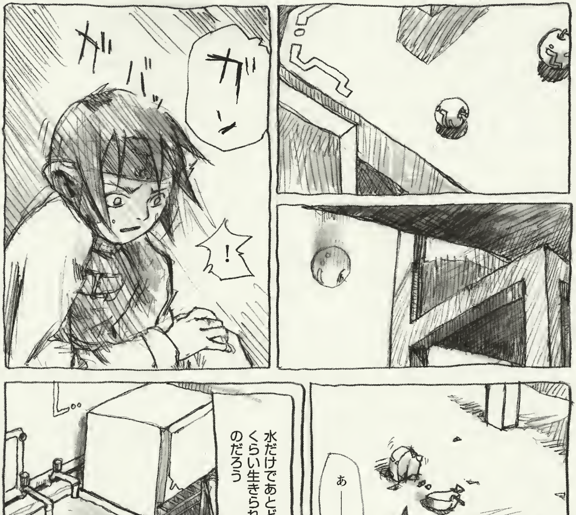

……
妙ね
？
家の中のものはみんな大人が使う大きさだった……
でも この筏だけは大人には乗れない
!?あ……
誰かの意志を感じるよ………
とてもとても邪悪なキモチ………
!!

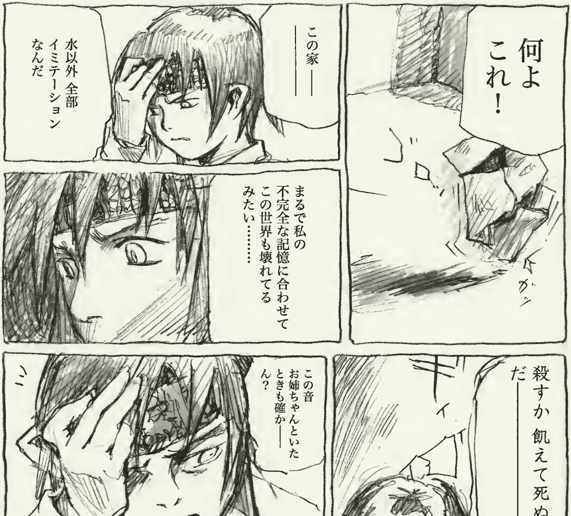

光る虫…
……ホタル
じゃないし…
カゲロウ…蛾かな？
リン粉が光って…
この羽音…
……
ギィイイイ！
うあああ
お姉ちゃん！
どうしたの？
ねえっ！
ダメ…
ニゲ…
…ハヤク…
くっ!!

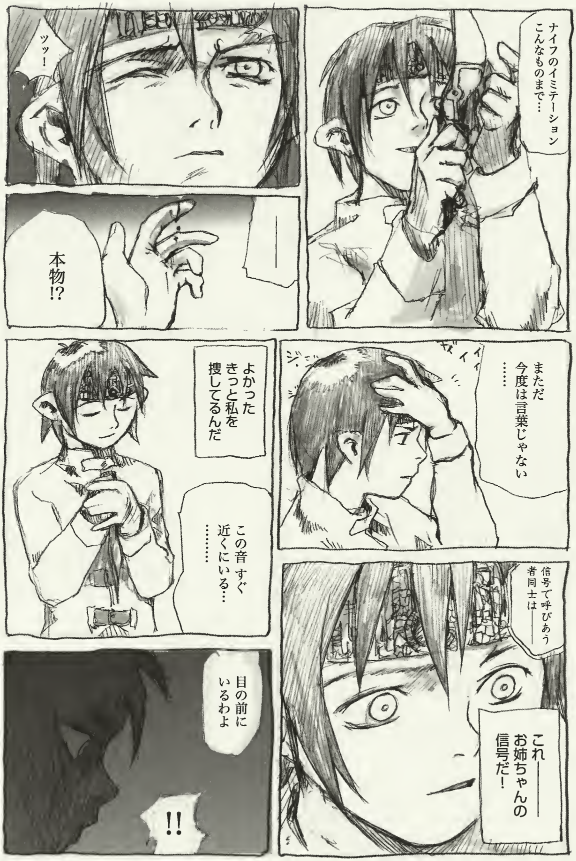

羽音…
……違う！
これは言葉だ…
むしさん むしさん
なあに？
なにをいってるの？
328はお前を殺すだろう
生きて川を渡りたければお前が328を殺せ
う……うそだぁ
お姉ちゃんは 私を殺したりしないよぉ
328はお前が自分を殺しに来ると思っているよ
なぜなら川を越えて次の世界へ進めるのはお前達のうちのひとりだけだからだ

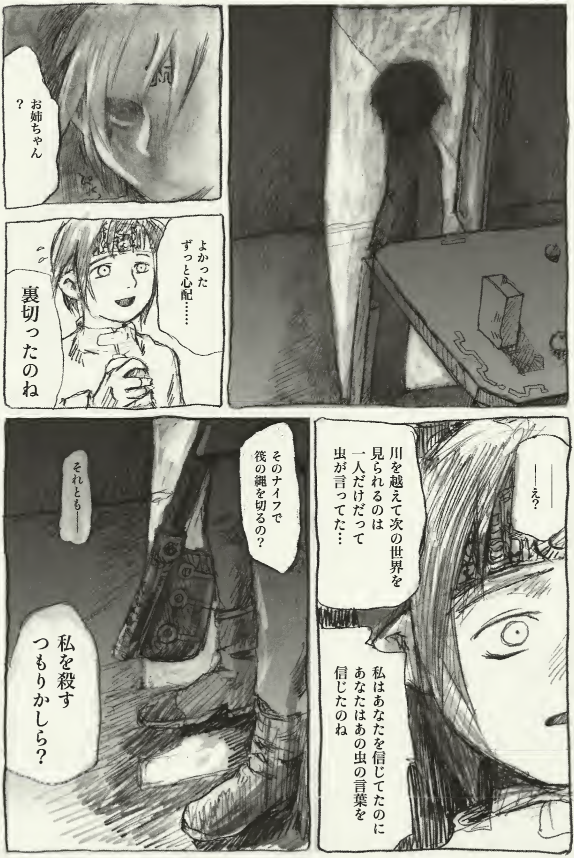

そそんなこと ないもん 一緒に いくもん
方法は ない
羽音の信号で 呼びあうもの同士は 殺しあうように つくられている
お前達はただ 殺し殺されるためだけに つくられた影に過ぎない
造られた？誰に？ 何で私たちはこんな所に いるのよ！
328を殺せ それで思い出す だろう
ギ ギ ギ ギ ギ
もう一度いう 『殺さなければ 殺されるだけだ』
お前がいるのは そういう 世界なんだよ

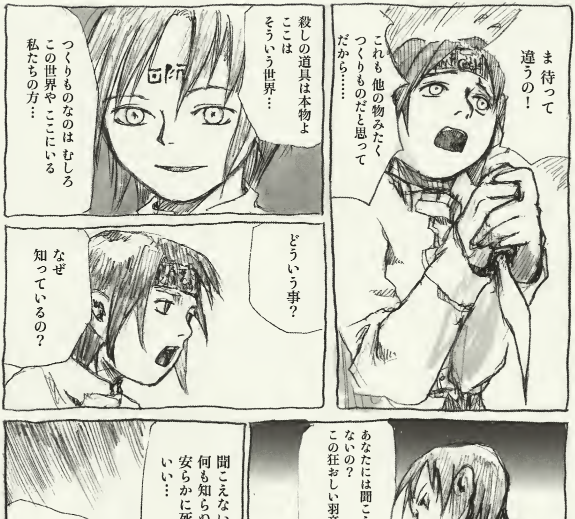

――
あ…
！お姉ちゃん！
お姉――
328は消えていた
理由は分からなかった――

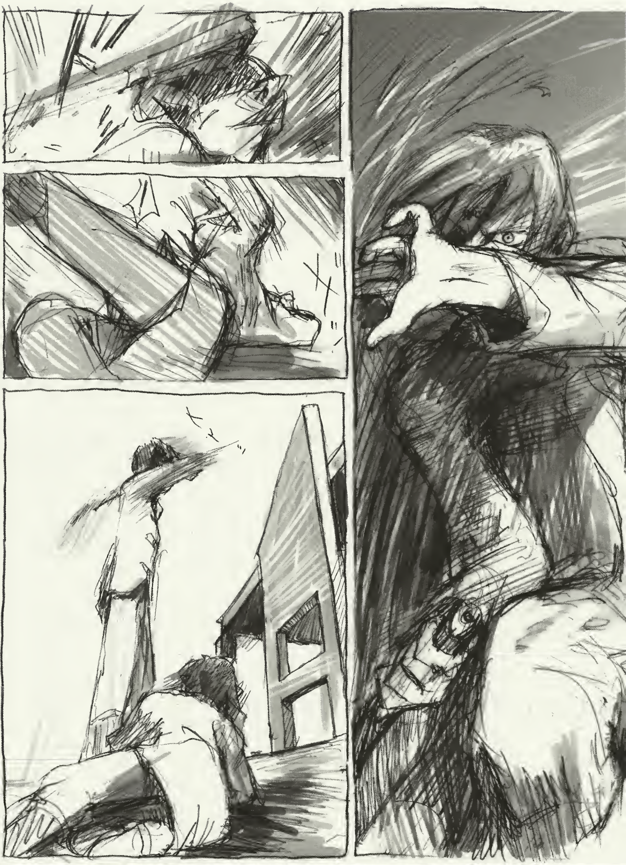

ガバッ
ガーン
!
あ――
ドキン
時が過ぎた
328を信じながら
同時に私は
闇と静寂を
恐れるようになった
ドキン
水だけであとどの
くらい生きられる
のだろう
食べ物
食べ物――
飢えと恐怖が
ゆっくりと私の心を
壊してゆく
――

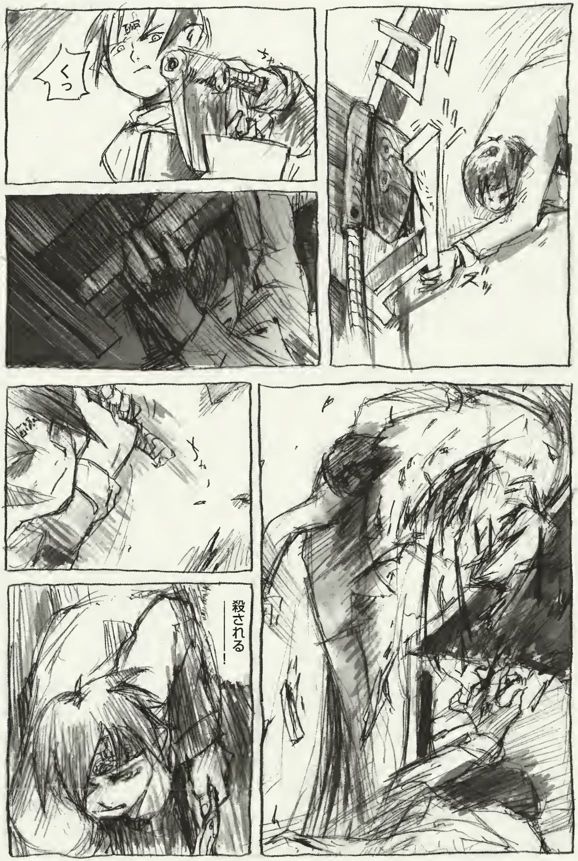

何よ
これ！
ゴロッ
ガッ
この家——
水以外 全部
イミテーション
なんだ
まるで私の
不完全な記憶に合わせて
この世界も壊れてる
みたい………
殺すか 飢えて死ぬか
だ——
ギイイイイ
ウルサイッ
この音
お姉ちゃんといた
ときも確か——
ん？

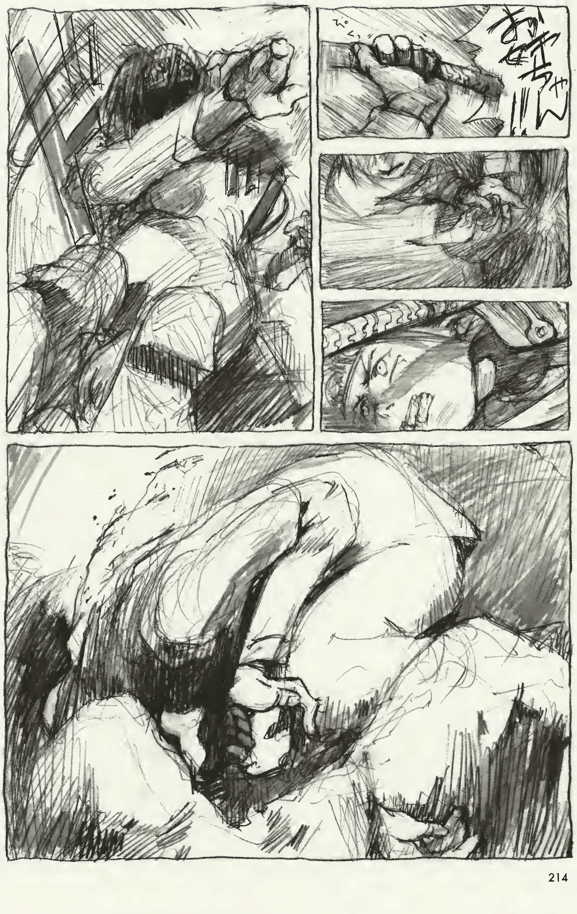

ナイフのイミテーション
こんなものまで…
ツッ！
———
本物!?
ギィィ
ジジ
まただ
今度は言葉じゃない
……
よかった
きっと私を
捜してるんだ
この音 すぐ
近くにいる…
………
信号で呼びあう
者同士は———
これ———
お姉ちゃんの
信号だ！
目の前に
いるわよ
!!

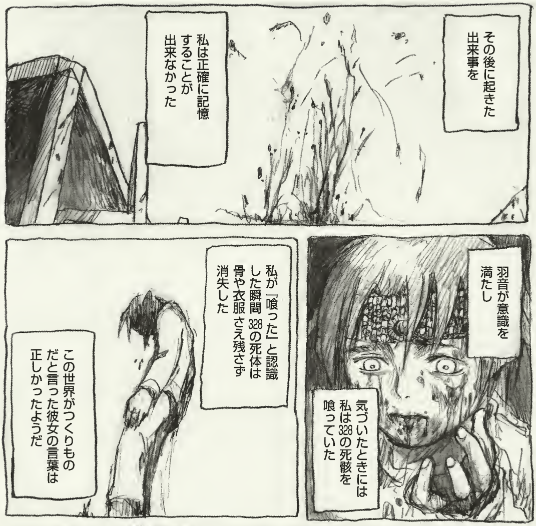

お姉ちゃん？
ぴくっ
よかった
ずっと心配……
裏切ったのね
――え？
川を越えて次の世界を
見られるのは
一人だけだって
虫が言ってた…
私はあなたを信じてたのに
あなたはあの虫の言葉を
信じたのね
そのナイフで
筏の縄を切るの？
それとも――
私を殺す
つもりかしら？

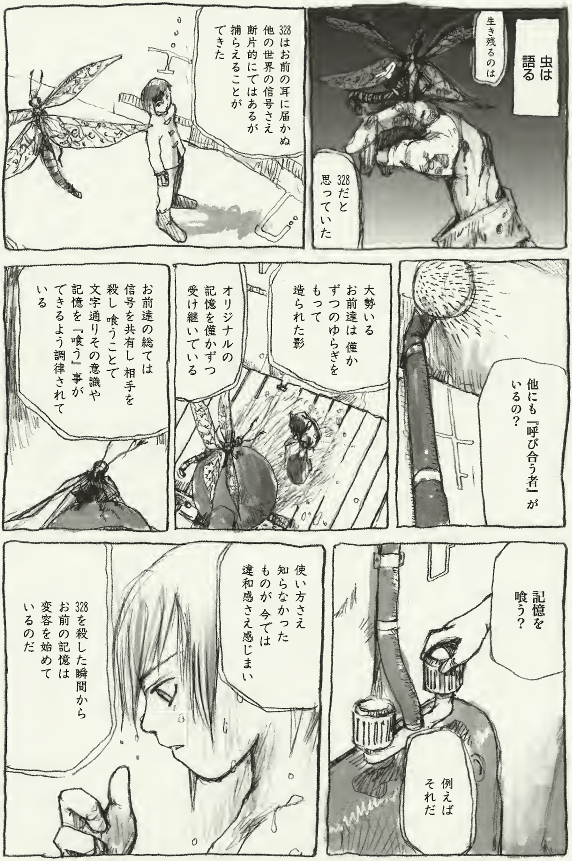

ま待って違うの！
これも 他の物みたく つくりものだと思って だから……
殺しの道具は本物よ ここは そういう世界…
つくりものなのは むしろ この世界や ここにいる 私たちの方…
どういう事？
なぜ 知っているの？
あなたには聞こえ ないの？ この狂おしい羽音の群が
つくりものの世界に 閉じこめられて 延々殺し合ってる 無数の私たちの声が
聞こえないなら 何も知らぬまま 安らかに死ぬと いい…
わたし あなたが 苦しむの 見たくないもの ——

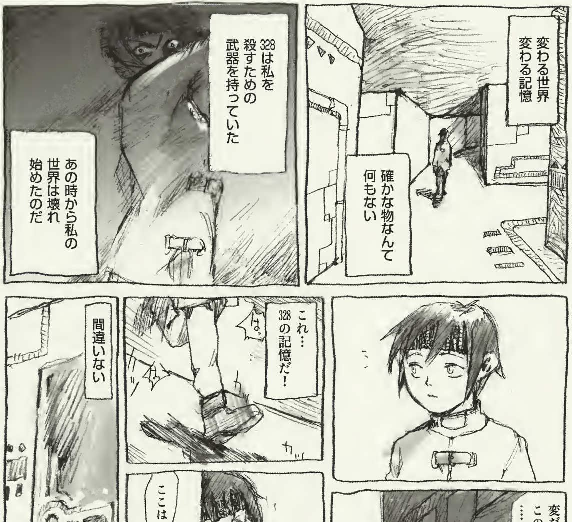


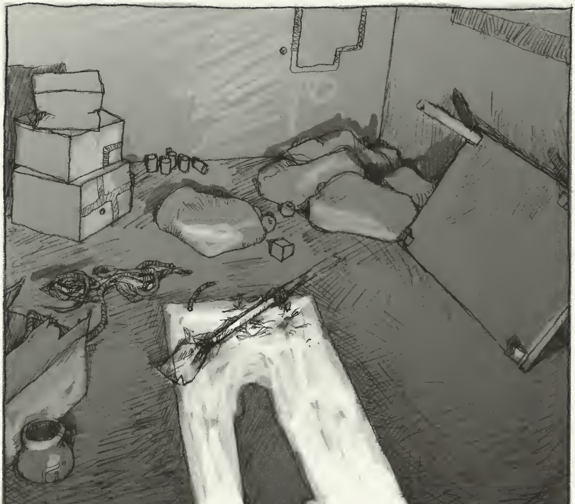

ズッ
くっ
ちゃ
ちゃ
殺される――――！

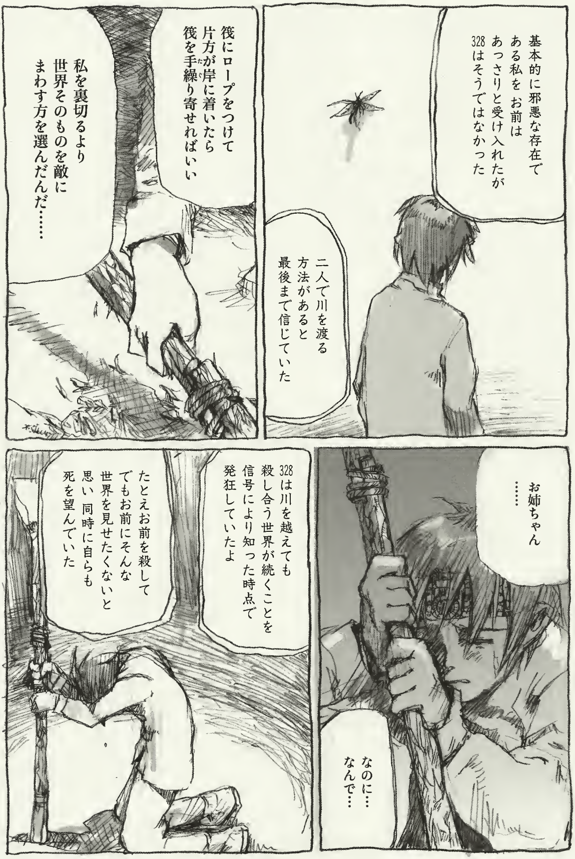

おねえちゃん!!
ぴくっ

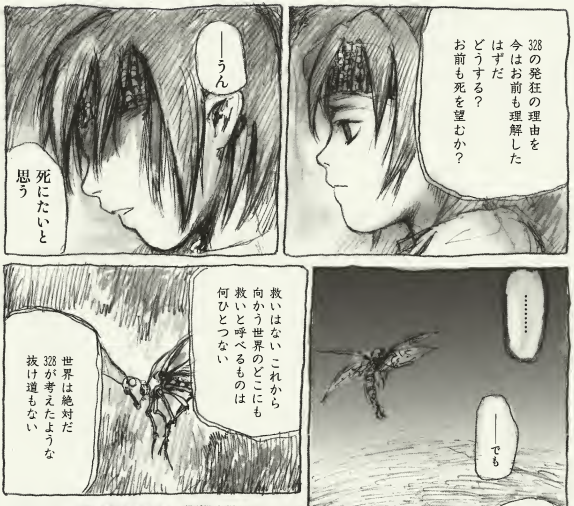

その後に起きた出来事を
私は正確に記憶することが出来なかった
羽音が意識を満たし
気づいたときには私は328の死骸を喰っていた
私が『喰った』と認識した瞬間328の死体は骨や衣服さえ残さず消失した
この世界がつくりものだと言った彼女の言葉は正しかったようだ
ただ 彼女の血の味や手の中でゆっくりと動きを止めてゆく内蔵の感触は現実の記憶として私の中にはっきりと刻まれ
それが彼女の存在の全てになった

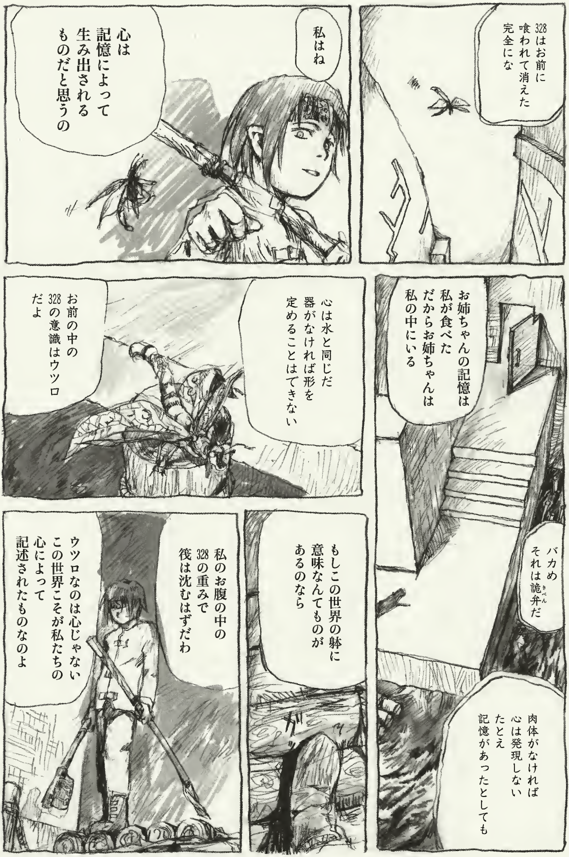

虫は語る
生き残るのは
328だと思っていた
328はお前の耳に届かぬ他の世界の信号さえ断片的にではあるが捕らえることができた
他にも『呼び合う者』がいるの？
大勢いるお前達は僅かずつのゆらぎをもって造られた影
オリジナルの記憶を僅かずつ受け継いでいる
お前達の総ては信号を共有し 相手を殺し 喰うことで文字通りその意識や記憶を『喰う』事ができるよう調律されている
記憶を喰う？
例えばそれだ
使い方さえ知らなかったものが 今では違和感さえ感じまい
328を殺した瞬間からお前の記憶は変容を始めているのだ

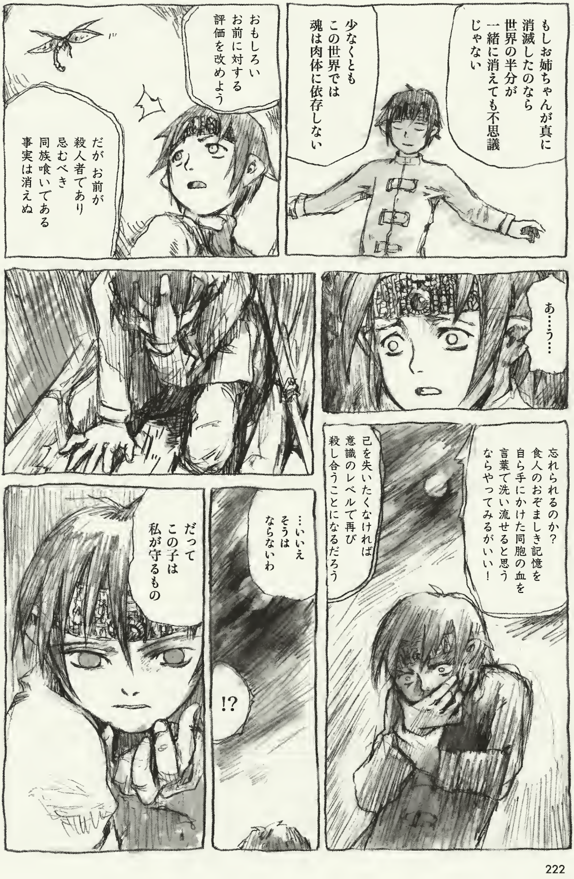

変わる世界
変わる記憶
確かな物なんて
何もない
328は私を
殺すための
武器を持っていた
あの時から私の
世界は壊れ
始めたのだ
変だな
この道 どこかで
……
は
これ…
328の記憶だ！
カッ
ここは
間違いない
！
私と別れてから
328はここに
いたんだ

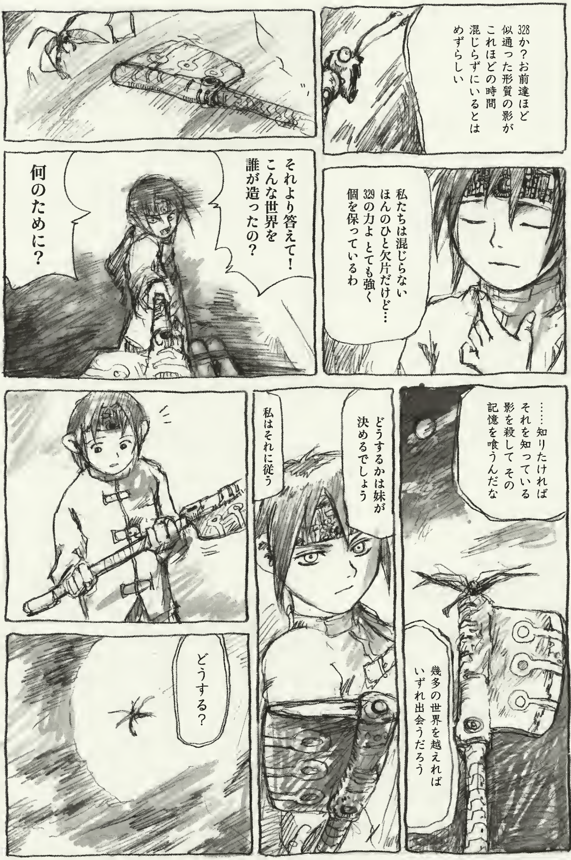

櫂…
これを造る
ために…
そうだ そして
これが328がお前に
勝てなかった
理由でもある

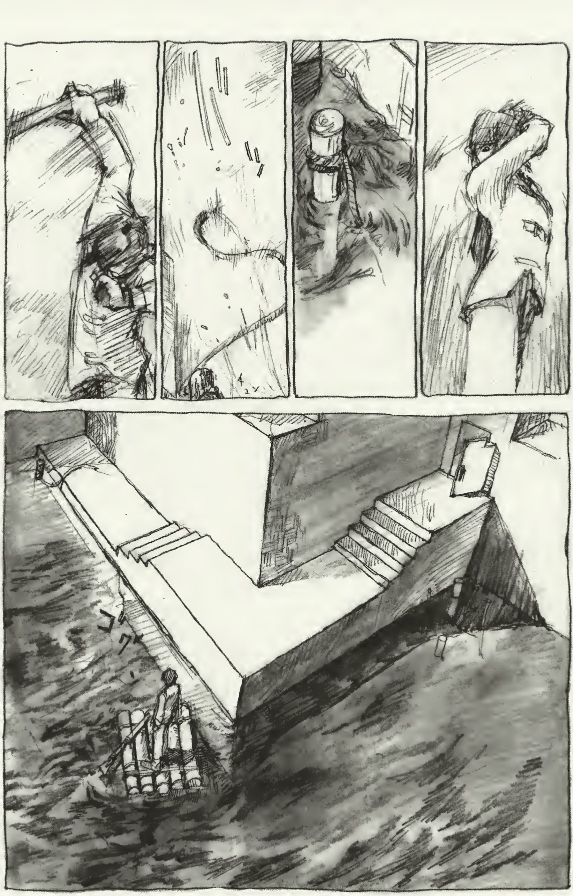

基本的に邪悪な存在である私を お前はあっさりと受け入れたが 328はそうではなかった
二人で川を渡る方法があると最後まで信じていた
筏にロープをつけて片方が岸に着いたら筏を手繰（たぐ）り寄せればいい
私を裏切るより世界そのものを敵にまわす方を選んだんだ……
お姉ちゃん……
なのに… なんで…
328は川を越えても殺し合う世界が続くことを信号により知った時点で発狂していたよ
たとえお前を殺してでもお前にそんな世界を見せたくないと思い 同時に自らも死を望んでいた

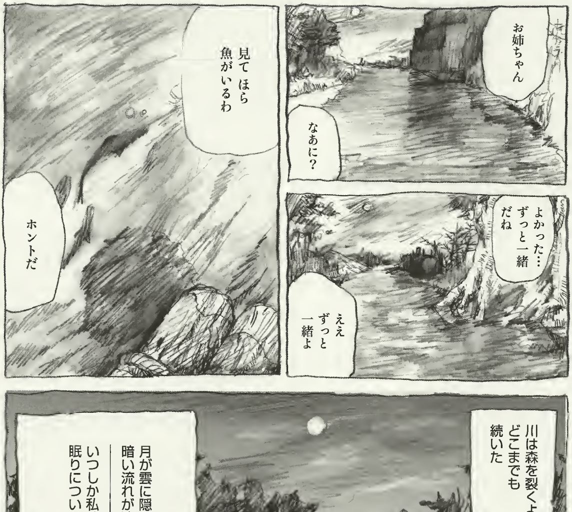

328の発狂の理由を
今はお前も理解した
はずだ
どうする？
お前も死を望むか？
――うん
死にたいと
思う
……
――でも
だから
今は生きるよ
私は殺人者だ
許されたくないし
救われたくもない
救いはない これから
向かう世界のどこにも
救いと呼べるものは
何ひとつない
世界は絶対だ
328が考えたような
抜け道もない
ううん 抜け道は
あるよ
だって私たちは
一緒に川を
越えるんだもの

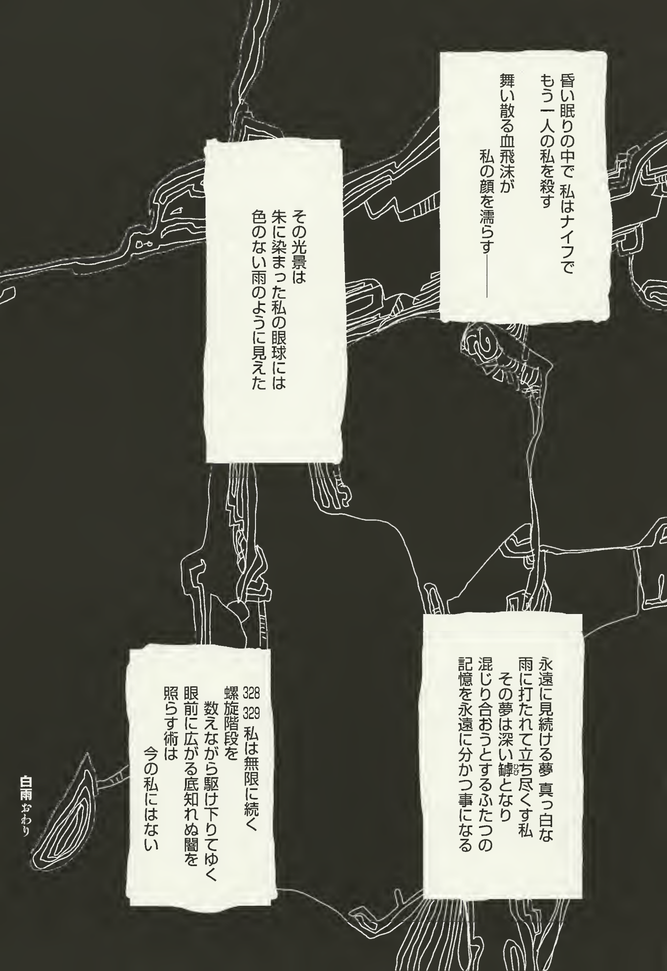

328はお前に喰われて消えた 完全にな
私はね
心は記憶によって生み出されるものだと思うの
お姉ちゃんの記憶は私が食べた だからお姉ちゃんは私の中にいる
心は水と同じだ 器がなければ形を定めることはできない
お前の中の328の意識はウツロだよ
バカめ それは詭弁だ
肉体がなければ心は発現しない たとえ記憶があったとしても
もしこの世界の躰に意味なんてものがあるのなら
私のお腹の中の328の重みで筏は沈むはずだわ
ウツロなのは心じゃない この世界こそが私たちの心によって記述されたものなのよ


もしお姉ちゃんが真に消滅したのなら世界の半分が一緒に消えても不思議じゃない
少なくともこの世界では魂は肉体に依存しない
おもしろいお前に対する評価を改めよう
だがお前が殺人者であり忌むべき同族喰いである事実は消えぬ
あ…う…
忘れられるのか？食人のおぞましき記憶を自ら手にかけた同胞の血を言葉で洗い流せると思うならやってみるがいい！
己を失いたくなければ意識のレベルで再び殺し合うことになるだろう
…いいえそうはならないわ
!?
だってこの子は私が守るもの


328か？お前達ほど似通った形質の影がこれほどの時間混じらずにいるとはめずらしい
私たちは混じらないほんのひと欠片だけど…329の力よ とても強く個を保っているわ
それより答えて！こんな世界を誰が造ったの？
何のために？
……知りたければそれを知っている影を殺して その記憶を喰うんだな
どうするかは妹が決めるでしょう
私はそれに従う
幾多の世界を越えればいずれ出会うだろう
どうする？


ゴグ


お姉ちゃん
なあに？
よかった…ずっと一緒だね
ええずっと一緒よ
見てほら魚がいるわ
ホントだ
川は森を裂くようにどこまでも続いた
月が雲に隠れ暗い流れが遠くの闇に溶けあい
いつしか私は眠りについていた



昏い眠りの中で 私はナイフで
もう一人の私を殺す
舞い散る血飛沫が
私の顔を濡らす——

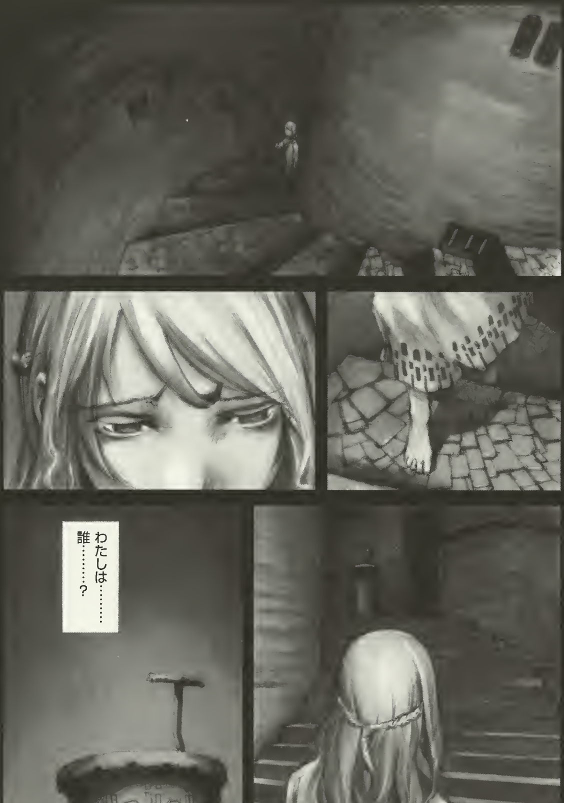
その光景は
朱に染まった私の眼球には
色のない雨のように見えた

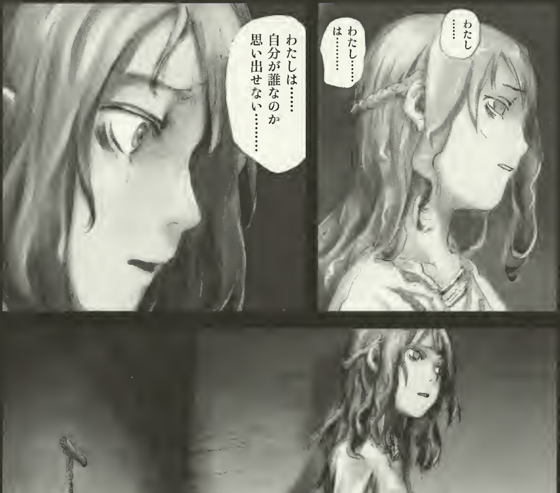
永遠に見続ける夢 真っ白な
雨に打たれて立ち尽くす私
その夢は深い罅（ひび）となり
混じり合おうとするふたつの
記憶を永遠に分かつ事になる

私は無限に続く
螺旋階段を
数えながら駆け下りてゆく
眼前に広がる底知れぬ闇を
照らす術は
今の私にはない

白雨 おわり

もしも希望が存在するなら、バヴェルには因果を遡る、細い道があるだろう。


わたしは………
誰………？


わたし……
わたし……は………
わたしは……自分が誰なのか思い出せない………
どこまでも闇………

あとがき

この本には、僕が『意識を発生させるものは何か』という問題について考えるために描いたいくつかの物語が収録されています。その問いに答えるために描いたというより、どのような問いを設定したらこの問題についてより深く考える事ができるかを考察するために描かれたもので、どの作品も、あらかじめ分かっている答えに向かって描いたというより、答えを捜しながら手探りで描いていたように思います。結果的に、実験的な色合いの強い作品群になりました。

絵を習い始めた19歳の時、ガラス瓶のデッサンをしていて、描き込みを続けていると、鉛筆のタッチの集合体がある密度を超えた瞬間、不意にガラスの質感を帯びる事に気づきました。それは当たり前の事のようでいて、冷静に考えると、底なしの暗い穴を覗き込むような、人を落ち着かない気持ちにさせる、ある『気づき』を含んだ出来事でした。

紙の上の記号の集積がガラスに感じられるという事は、ガラスのその透明感やつややかな質感は目の前のガラス瓶に付随する概念ではなく、脳が視覚情報を解釈する際に立ち上げる仮想に過ぎないという事です。でも、我々は当たり前のようにその仮想を現実として認識している。

この事を考え続け、じわじわと掘り下げてゆくと、我々の目の前に広がっているこの現実は自分の目が知覚しているようなものではなく、単なる情報、極端に言えば数列のようなものに過ぎないのかもしれない、という考えが浮かびます。そう仮定してしまうと、その数列のようなものを脳が視覚情報として処理する過程で脳内に『目の前に広がる空間』という仮想が立ち上がっているに過ぎず、我々が現実感と呼んでいる全てのものが、脳内現象なのだ、という結論に、嫌でも辿り着いてしまいます。

ここまではまだ、少し考えれば分かる当たり前の話です。眼球の構造を考えれば、我々が目の前の空間に広がる風景を平面としてしか捉える事ができないのは明白で、空間感、いわゆる奥行きの感覚は脳内の各視覚野が平面の視覚情報を解析する際に後付けする仮想です。同じように、我々が感じる夕陽の赤さも手の温もりも誰かの笑った顔も、その実相は数列のようなものに過ぎず、我々はただその数列の演繹の結果生じた仮想を現実だと信じて慈しんでいるに過ぎないのです。

でも、それもまた当たり前の話に過ぎません。全てが仮想なのだとしたら、その仮想こそが現実であると断じてしまって問題ないからです。我々は脳の生み出す仮想の中に生き、人生を刻み、文明を築き、脳内現象の外に本当は何があるのか一度も知ることなく死んでゆくとしても、全ての人間がそうである以上、それを虚しいと感じる必要はないからです。

問題はその先にあります。

さらに掘り進めてゆくと、人間の思考、脳の演繹では決して答えの出ない問題に突き当たります。

１０００億の脳細胞がどれだけ複雑なネットワークをつくり、どれだけ精緻な演繹を行ったとしても、そこで処理される情報が情報である限り、出力結果もまた情報であるはずです。僕がガラス瓶を見た時、それを『明暗の、ある特徴的なパターン』という情報ではなく『つややかな光沢と透明感のあるガラス』という質感として感じるのは何故でしょう？　脳が視覚野から届いた情報を演繹する過程をどれだけ分析しても、ガラスのあのガラスらしさを発生させているものの正体は現れてはきません。そんなものは現実の場のどこにも存在しないからです。

それは、脳科学の世界ではクオリアと呼ばれ、現在もまだ解明されていない問題なのだそうです。でも、今から18年前、19歳の僕はそんな事は知らず、ただひたすらガラス瓶を眺めてはその瞬間に自分の意識の内部に立ち上がる『何か』を掴もうとしていました。

何年かが過ぎ、僕はそれを『絵の言葉』だと考えるようになりました。

一本の線はただの記号です。線の組み合わせは文字を構成しますが、文字もまた記号です。文字の組み合わせは単語をつくります。それは記号でしょうか？　単語の組み合わせは文章を作り、文章の組み合わせはいつか物語を作り上げます。

物語は記号でしょうか？

同じように、線が集まってタッチをつくり、その集合体が人の意識に（例えば）ガラスの質感というクオリアを立ち上げ得るなら、文字を連ねて物語を描き出すように、筆跡の集積によって単に対象を正確に引き写すという以上の何かを表現できるのではないか。絵を描くという事は、形を正確に描くとか、色を正確に塗るというような事ではなく、モチーフとなるイメージを思い浮かべた時に、自分の意識の中にどのようなプロセスでクオリアが立ち上がるのかを観察し、自分の心が何に対して、どのように震えたのかを覚〈さと〉り、逆算し、記号に置き換え、そしてその記号、つまり『絵の言葉』によって、自分の意識の中に立ち上がったものと同じものを誰かの意識の中に立ち上げる事ができるような『絵の言葉によって記述された物語』として描き表す事なのではないか。

その事に気づいた時、僕は絵を描く事ができるようになったのだと思います。そして同時に、この一連の物語の核になる問いが生まれました。

『クオリアによって世界を知覚している、この意識そのものを発生させているものは何か』

この問いに科学的に答える事は僕にはできません（当たり前ですが）。僕にできるのは物語る事だけで、物語の中でこの問いについて考えるうちに、意識とは街である、という比喩に辿り着きました。その考えを推し進めた結果、この本に収録された一連の物語が生まれました。

「古街」の原型となる物語の設定をつくったのは、１９９５年頃だったと思います。何がきっかけだったのか思い出せないのですが、

これは『物語られる前の物語』を語ろうとしているのだ、という考えが不意に浮かびました。
その時には、あまり深く考えなかったのですが、漠然と、イメージしていたのは

●人の頭の中で、意識は街のような構造体として存在している
●街は閉ざされているが、同じ記憶を持つ街同士は繋がっている
●繋がっているといっても道があるわけではなく、同じ住人がいて、同じ出来事が起きる、といった形で繋がっている
●記憶はその街の住人として存在している
●街の住人の頭の中にも、それぞれ街がある
●死者は記憶となり、その街の住人の頭の中の街に住む
●その街の中にも住人がいて……と入れ子状に果てしなく続き、全ての意識、全ての死者の記憶が繋がっている最下層の街が「古街」である

というような世界でした。
人は何かを物語る時、自分の頭の中にある街を、物語る装置として駆動させ、「古街」は全ての物語る者と無意識に繋がる、まだ物語られていない物語の眠っている場所、という設定でした。
意識は街のような構造を持っている、という考えは、そのあともずっと僕の物語の重要な要素になっています。

物語られる前の物語を物語る、という行為は、無意識を無意識のまま意識する、という行為と同じように矛盾を含んでいるので実際にはできません。でも、その思考実験自体は、自分の頭の中にあってまだ気づいていないものに気づく事ができて、有益でした。

1996年に描いた「白雨」では、僕はまだクオリアという概念を知らず、漠然と『世界が記憶をつくるのではなく、記憶が世界をつくっているのではないか』という問いを発しています。
作中の双子は、互いを喰い合う事で記憶を補完し、閉鎖された実験空間の出口を現出させました。
描き終えてから、これは「古街」へ辿り着こうとする何者かの実験なのだと気づきました。

1998年の「古街」、2001年の「樹葬」は、共に「古街」という世界についての物語です。1995年にイメージしていた「古街」の世界は、静かな諦念に包まれた美しい世界でしたが、ここでは死に覆われた終焉の世界として描かれています。
自転の停まりつつある星の、永遠に引き延ばされた最後の一日を生きる、ルキットという名の少女の視点で物語は進んでいきます。世界は終わりつつありますが、ルキット以外の全てのウツロは思考を調律されていて、世界を正しく認識できていません。
「古街」では、人形師ゴードロイは遺跡から未加工の脳を発掘し、ルキットを造り、『世界を旅し、もし希望が見つからないならヒトという種を滅ぼせ』と命じます。
「樹葬」は、そのルキットの旅の物語です。いつか続きを描きたいです。

2004年から連載を始めた「廃域」は、「白雨」の前の物語になります。エンリ・ハミルという少女について、少しだけ記述が出てきます。
将来物語として描くかもしれない事なので、あまり種明かししてしまうのも何ですが、描くとしてもかなり先の事になるはずなので、この本を単体で読んだ時に消化不良になりそうな点だけ少し補足しておきます。
まず、エンリは病死しています。エンリの死の直前、脳科学者だった父親は、エンリの脳の精細なボクセルデータを造り、仮想空間上に展開したそのデータの中に、エンリの存在の痕跡を見いだそうとします。その試みがどのようなものであったのかは、エンリの父親が全てのデータを破壊し、自殺してしまっているので詳細は分かっていません。
破損を免れたわずかな資料から伺えるのは、エンリの父親は最終的に、エンリの人格を備え、チューリングテストにパスできる程度の人工知性体を生み出した可能性があります。
その背後にあるのは、人工知性の内部の情報循環系がバヴェルと呼ばれるある構造をとった時、その系には意識が発生している、という仮説です。
しかし、その研究中に起きた些細な機材トラブルのせいで、エンリの人工知性体は恐怖と絶望を感じたまま無限ループを発生させ、暴走してしまいます。装置を強制終了させるまでのほんの数秒は永遠に引き延ばされてしまい、それはこの世界に初めて現出した人工の死、人工の地獄となりました。
エンリの父親の死後、部分的に修復された仮想空間内に、恐怖によって分裂した、エンリの人格の残骸が340体程発見されます。死それらを修復、統合する過程で、いくつかの発見がありました。死の階層化。仮想空間内にはエンリの脳のデータしかなかったにも関わらず、分裂した人格の中にエンリではない人格が含まれていた事から、人の意識は、他者の行動を自己に置き換えて模倣する神経細胞群を経由して、他者の人格の一部を内包するのではないかという仮説。人格内人格の最下層に、全ての人の意識の溜まる場所、時間の概念が変調をきたした長く引き延ばされた街がある事。

「白雨」、「廃域」は、分裂したエンリの人格の残骸の再構成の実験の場で起きた物語、「古街」、「樹葬」は、その実験の先に発見された、「古街」という人の意識、感情が澱のように積もる墓場のような空間の物語という事になります。

これらの物語をつくり出す過程で、何故、物語は文字という記号の集積であるのに記号ではないのかについて考えていました。

文字は記号なのに文字の集合である物語が記号ではないのは、言葉はある程度の長さを持つにつれて、その背後に文脈を持つからではないかと思います。文脈はその言葉を読み取る人が持っている世界観を反映し、揺らぎ、変化します。
言葉にはその言葉自体に結びついている揺るぎない記号としての意味と、読み手の心のありようによって変化する不確かな文脈としての意味とがあります。文字の連なりが長くなればなるほど、記号としての意味より文脈としての意味の方がより優勢になり、その文脈がある構造に達した時、それは物語になるのではないかと思います。つまり言葉という記号は文脈という細い道を伝い、読み手の意識の持っている世界と繋がっている、という事です。

逆に言えば、物語は読まれない限りただの記号だ、という事になります。物語や、物語のように描かれた絵は、読まれ（あるいは見られ）、脳と繋がり、脳の情報処理を経由した際に記号ではない何かを発生させる装置だ、と考える事もできます。

作中に何度か登場するバヴェルというのは、文字の連なりが文脈と結びついて物語になるように、情報の循環系が、『世界の文脈』と呼べるような何かと結びついて意識を発生させる構造体です。

それが何なのかについては、これから描く物語の中で明らかにできれば、と思います。

これらの物語の根底の設定は、僕が19～21歳くらいの時に思いついたもので、今となっては古かったり、拙かったり、知識が足りなかったりする部分も多く、気恥ずかしかったりもするのですが、こうしてまとめてみると、自分が、作家になろうと思った時からずっと『意識とは頭の中にある街である』というテーマに寄り添って生きてきたのだと、改めて強く感じました。

そもそものきっかけは確か7歳の頃、熱を出して寝ていると、蕎麦殻の枕に押しつけたこめかみのあたりから、自分の脈に合わせて「ざっ、ざっ」という足音のような音が聞こえてきて、僕は浅い眠りの中でそれを誰かが砂漠を旅している足音だと空想した事に端を発します。
熱が引き、いつの間にかその足音が止んでいた時、僕は自分の頭の中には街があって、旅人はそこに辿り着いたのだ、と考えました。
以来ずっと、僕の頭の中には街があり、たくさんの記憶の影が、静かに暮らしています。

人の心とは不思議なものです。

2008・06・01　安倍吉俊

回 螺

2008年7月25日　初版発行

著者
安倍吉俊
All illustratians and Manga by yoshitoshi A8e

発行人
山崎公士
published by Kashi Yamazaki

編集
福嶋里味
Edited by Satomi Fukushima

装幀
星野ゆきお (VOLARE inc.)
8ook design by Yukia Hashina

印刷所
大日本印刷株式会社
Printed by Dai Nippan Printing Ca.,Ltd.

発行所
株式会社ワニマガジン社
〒160-8580
東京都新宿区内藤町1番地
03-3357-2911（営業）
03-3357-2247（編集）
http://www.wani.cam
published by WANIMAGAZINE CO.,LTD
1Naitou-chau,Shinjuku-ku,Takya 160-8580 Japan
+81 (0) 3-3357-2911 (Sales)
+81 (0) 3-3357-2247 (Editorial Office)

©yashitashi A8e / WANIMAGAZINE 2008

Printed in Japan

●落丁・乱丁はお取り替えします。
●本画集の無断複写（複製、データ配信、それに類する行為）は著作権法上での例外を除き禁じられています。

初出

『古街』
「FLAT」（ワニマガジン社）1999年11月発行

『樹葬』
第1～3話「月刊エースネクスト2002年1・3・4月号」（角川書店）2001年12月～2002年3月発行

『廃域』
第1話～第9話「robot vol.1-9」（ワニマガジン社）2004年11月～2007年9月発行

『白雨』
同人誌　1997年7月発行

9784862690609

1920979025004

ISBN978-4-86269-060-9
C0979 ¥2500E
ワニマガジン社
定価: 本体 2,500円 +税